

第3章 出土遺物

3-1 奈良時代の遺物

3-1-1 木簡

3-1-1-1 今回報告する SD3715出土木簡

木簡は南北溝 SD3715から、172点(うち削屑101点)出土した。地区ごとの出土点数は図74の通りである。今回報告するのは SD3715のうち、宮南面大垣部分から北へ約33m分であるが、木簡の出土点数に場所ごとの特に顕著な偏りは見られない。強いていえば、大垣部分の護岸 SX13280の始まる部分に削屑が集中しているのと、調査区中央北よりの DH 地区から DJ 地区にかけて比較的まとまりが見られるのが注目される程度である。いずれも溝幅がやや収束する箇所であるのと関係するかも知れない。以下、個別に所見を記す。なお、各木簡の釈文は巻末に掲げる。

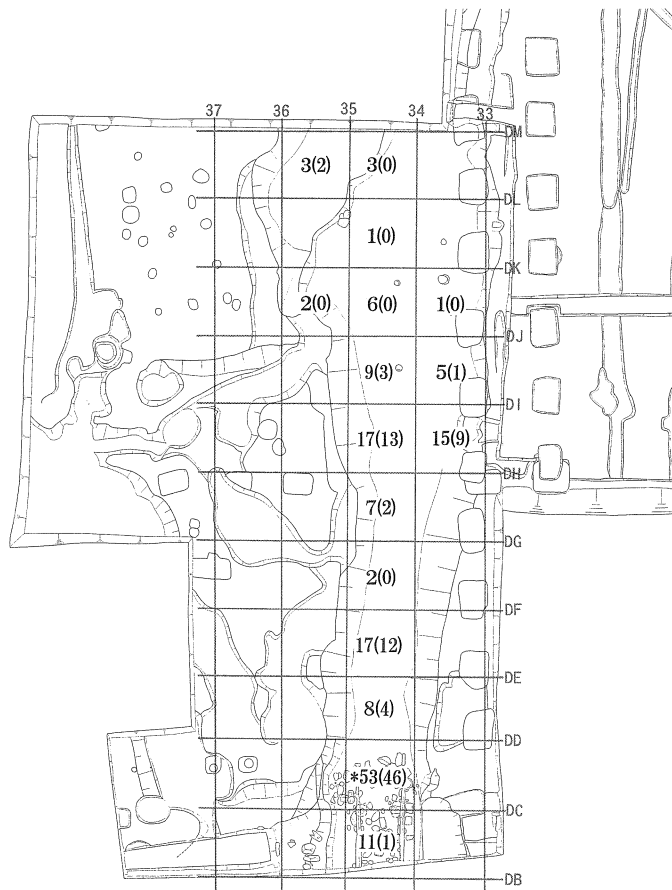
木簡の分布

3-1-1-2 木簡ごとの個別所見

1～8は文書木簡の断片。1は上下両端と右辺は削り、左辺は割れで木簡の約3分の1を欠く。厨から蔬菜の選択に従事する者(女性であろう。734年(天平6)の「造仏所作物帳」に、盛所に勤務する雇女として「択菜女」が見える。『大日本古文書』編年文書巻7、57頁)の食料として飯を請求する木簡。SD3715では、上流にあたる第41次調査区においても厨からの飯の請求木簡が出土している(『平城木簡概報5』10頁上段)。なお、類似の職名に、藤原京跡左京六条三坊出土木簡に見える「菜採司」がある(『飛鳥藤原木簡概報8』11頁上段)。蔬菜採取の担当者の意であろう。

菜 採

2は上下両端と左辺は削り、右辺割れ。細工所の食料請求木簡。細工所は、平安時代以降、宮廷、摂関家、幕府などにおいて造営に関わって恒常的にまた



細 工 所

図74 第157次調査・同補足調査における SD3715出土木簡分布

- ・() は削屑 [] 内数
- ・* は157次調査出土分32(27)と157次補足調査出土分21(19)の合計
- ・他に出土地不詳のもの12(8)あり

臨時に置かれた機構として頻出する。造営または調度品の製作に伴うものと考えられるが、22に見える勅旨省の職掌とも関連が深い。平安時代の宮廷では大嘗祭に伴って置かれる細工所が著名で、この木簡も中央区や東区の朝庭で行われた大嘗祭と関連する可能性もある。なお、平安京右京五条一坊六町から細工所の飯の請求と思われる木簡が出土している（『木簡研究』22）。

佐伯老 「老」は自署。但し日付は現存部分には見られない。佐伯老は宝亀元年（770）8月に宇佐八幡神に鹿毛馬を奉獻する使者として派遣されており、このとき内舎人と見え（『続日本紀』同月庚寅朔条）、延暦3年正月には正六位上から従五位下に昇っている（『続日本紀』同月己卯条）。従って、この木簡も神護景雲年間から宝亀年間にかけてのもので、細工所が奈良時代にも置かれていたことを示し、その最古の事例となろう。

大炊司 3は四周削り。左辺下端のみ細く抉り出すが、木簡として利用する以前のものか。十一人分の食料として飯二斗九升を受け取ったことが記された食料請求に関わる木簡。「大炊司」は某官司の炊飯担当者の意。長屋王家木簡（『平城京木簡1』146、『平城木簡概報21』7頁上段）や二条大路木簡（『平城木簡概報30』5頁上段）、東院南辺の二条条間路北側溝出土木簡（『平城木簡概報14』7頁上段）にも類例がある。物部荒人は藤原宮木簡（奈良県教育委員会『藤原宮跡出土木簡概報』5）や伊予国正税出挙帳（『大日本古文書』編年文書巻2、5頁）の同姓同名者が見えるが、同一人か否かは不詳。墨書土器に見える「内大炊」（表10-252・258・293）と関連する可能性がある。

4は上下両端と右辺は削り、左辺は割れ。但し上部はささら状に割れ目が入る。某省の食料請求に関わる木簡。字配りから考えて表面の人名は三行割書とみられる。表面右上部の記載内容は不詳。また、裏面の日下署名は「額田□長」までと思われ、その下に続く「三升」がここに書かれる理由は不詳。「受」とし受取人の記載があることから、単なる請求ではなく、伝票的な機能をもつ可能性がある。

5は、四周削り。上部左端と下端右寄りに穿孔があるが、木簡の記載との前後関係や機能は不詳。宿直木簡の類か。位子が見えることからすれば、式部省または兵部省に関わる木簡である可能性が高い。第一次大極殿院西側の南北溝 SD3825出土木簡に見える「日奉弟麻呂」（『平城木簡概報36』9頁下段）と同一人の可能性がある。

勤臣 6は上下両端折れ、左辺割れ。右辺削り。文書木簡の断片。少録（省の第四等官）である勤臣某の指示を錦部連某が奉じて発給したもの。錦部連に続く部分は自署か。勤は伊蘇志とも書き、元榎原造。天平勝宝2年（750）3月、榎原造東人が駿河守在任中に部内の廬原郡多胡浦浜から黄金を得てこれを献上した功績により、勤臣への改氏姓を受けたのに由来する（『続日本紀』同月戊戌条）。従って、この木簡は天平勝宝2年以降のもの。なお、イソシ臣姓をもつ者としては、東人・内麻呂・総麻呂の3名が知られる。

7は上端折れ、左右両辺と下端は二次的整形か。文書木簡をヘラ状に二次整形したものか。今回報告する木簡のうち年紀を有する木簡2点のうちの1点。

8は上下両端折れ、左右両辺割れ。文書木簡の断片と思われるが詳細不詳。

考状帳棒軸 9と10は棒軸の断片。9は、両木口の残る縦に割けた2断片と、木口の一端が残る小断片が接続するが、木口部分は両端とも完存しない。今回報告する木簡のうち年紀を有する木簡2点のうちの1点。考状は考の実状の意であり、官人の功過の実績を具体的に記した文書であろう。考文の内容を確認する機能をもつ帳簿と考えられる（寺崎保広1989「考課木簡の再検討」関見先生

古稀記念会編『律令国家の構造』吉川弘文館、所収)。平城宮東南隅の南面大垣を南北に抜ける開渠 SD11640からも、神亀5年の出羽国の郡司に関わる同種の文書の軸が出土している(『平城宮木簡6』9883)が、これには「考状帳」とあった可能性が高い。文書名としては「考状」で完結しているようにも考えられるが、9の場合も「状」の文字の左に墨痕が残り「帳」の可能性が考えられる。「状」とこれの下に続く書き出しの「天」との間に余白がほとんどなくなってしまったため、左傍に書き加えたのであろう。考状帳とは、文字通り考の実状を記す文書の意であろう。

なお、9の考状帳の対象については、天平宝字4年(760)は藤原仲麻呂によって一部の官号が唐風に改易されていた時期でありその可能性も考慮する必要があるが、「史」の上の文字は「内」や「大」ではない。「史」の次の文字は墨痕が残らないが、「生」の可能性を考えると、諸司の史生の考状を一括している事態を想定する必要があるが生じよう。もし史生であるならば、文官である史生の考状は最終的には式部省に送られ、その棒軸を廃棄した官司は式部省とみるのが自然である。天平宝字4年には既に式部省は壬生門を入れてすぐ東側(右手)に置かれていた。SD3715が隣接しているのは、壬生門内西側(左手)に位置した兵部省であって、SD3715に近接する兵部省ではなく、式部省に関わる木簡が投棄されるに至った経緯が問われることになる。

10は木口の一端の半分が残る断片。縦に二つに割れ、さらに一端を折損している。木口の文字は僅かな墨痕のみで、内容の推定は困難。

11~15は9と同様に式部省における事務を窺わせる一群。

11は河内国に本貫をもつ某官司の官人を列挙したとみられる横材木簡。いわゆる河内国歴名木簡。上端と右辺は削り、下端二次的切断、左辺は割れか。冒頭に「河内国」とあり、表面に11名、裏面に9名、計20名の人名を記す。20名のうち15名について河内国に本貫をもっていた氏族であることが『新撰姓氏録』そのほかによって確かめられる(佐伯有清1995「河内国歴名木簡」『古代東アジア金石文論考』吉川弘文館、所収)。

河内国
歴名木簡

12は上端と左右両辺は削り、下端は側面に穿たれた孔の部分で折れ。015型式の木簡の断片。「去出」は昨年出身した、すなわち初めて出仕したことを示す。「去」として昨年の勤務評定を冒頭に記すタイプの木簡は、平城宮東南隅のSD4100出土の木簡群のうち、神護景雲年間から宝亀元年にかけての時期(767~770)のものに類例が多数あり(『平城宮木簡5』、『平城宮木簡6』)、奈良時代後半の考課木簡の特徴を示す記載と考えられる。

13も考課木簡の断片。上端は削り、左右両辺は二次的削り、下端は折れ。三等の評定から書き出すタイプの考課木簡は、平城宮東南隅のSD4100のうちCJ67地区、ここから南に分かれて南面大垣を開渠で抜ける南北溝 SD11640、及び奈良時代前半の式部省の井戸 SE14690出土の考課木簡に多く含まれている(いずれも『平城宮木簡6』所収)。時期的には12のようなタイプとは異なり、奈良時代前半に多く見られるものである。

14は考課木簡の削屑。「今」として当年の評定を記すタイプの木簡は、「去……」のタイプと同様に奈良時代後半のものに多くの類例がある。

15も削屑で、文字の左半分を欠くが、「番上選目録」と読める。選目録は、諸司から式部省に集められた考文・選文に基づいて、考目録・考別記・選別記とともに式部省において作成された紙の文書(『延喜式部式』考問条)。「番上」とあることからみて、長上官と番上官に分けて作成されたらしいことがわかる。

番上選目録

16・17は位階・勲位の見える木簡。16は「勲位」と読める削屑。但し、前後の文脈ははっきりしない。15と同一木簡の削屑の可能性もある。17は表裏に位階を伴う人名の見える木簡の断片。上下両端とも折れ、左右両辺割れ。「尺度」は坂門、坂戸とも書く。「尺度」と表記されるものとしては、尺度皆万呂（『平城宮木簡6』8497）、尺度君麻呂の事例（『平城木簡概報24』7頁上段）がある。

18～27は、人名や官司名が記された木簡。

糸益人 18は文書木簡の署名部分の削屑。「真□」は自署。令史は司・監・署の主典。糸姓としては、式部位子から後に仁部省史生となり経師として造東大寺司の写経所にも出仕した糸益人の事例がある（『大日本古文書』巻4、303頁。『平城木簡概報37』25頁下段）。第140次調査においてSD3715から西に分岐する南北溝SD10325から出土した木簡に「糸真嶋」が見え（『平城木簡概報16』11頁上段）、同一人の可能性がある。

19は人名を列記していると思われる帳簿状の削屑。「十一月十六日返」という別筆の書き込みがあることからみて、人員管理に関わるものか。

勅旨省 20は上下両端折れ、左右両辺割れ。21は上端と右辺は削り、下端は折れ、左辺は折れ。22は上端と左右両辺は削り、下端のみ折れ。勅旨省は供御の調度の調達のために置かれた令外官。天平宝字八年十月（『続日本紀』同月癸未条）以前の設置。東院西辺の調査で出土した墨書土器にも「勅旨省」と書かれたものがある（『平城宮出土墨書土器集成I』439）。また、内裏東大溝からも「勅□〔旨カ〕」と書かれた墨書土器が出土している（『平城宮出土墨書土器集成II』840）。23は上下両端折れ、左右両辺割れ。文献より知られる範囲では、「□守王」は道守王、掃守王、津守王など、「□内王」は河内王（但し同名の別人が2人いる）の可能性がある。

24は上下両端は折れ、左辺は割れ、右辺は削り。表裏に人名を記す。25～27は人名を記す削屑。

水母 28は上端は折れ、下端と左右両辺は削り。貢進物の荷札の可能性が高いが、詳細は不詳。29は上端は切り込み部分で折れ。左右両辺は削り、下端は折れ。上部に地名の入る余地はないが、水母には二斗を単位とする貢進事例があり（『平城宮木簡1』398）、また地名を書かない事例もある（『平城木簡概報24』31頁下段）。従って、29もラベルとしての付札ではなく、貢進物の荷札の可能性もある。なお、水母の貢進国として知られるのは備前国のみである。

参河国の贄 30も上端は切り込み部分で折れ。左右両辺は削り、下端は折れ。貢進物荷札の断片の可能性が高いが、詳細は不詳。31は上端折れ、下端と右辺は削り、左辺は割れ。小断片ながら「御贄佐米楚割六斤」と読みとれ、参河国幡豆郡の典型的な贄貢進荷札の下端右半部分の断片である。

32は、上下両端は折れ、右辺削り。左辺は割れか。24とよく似た柁目材で、同一木簡の断片の可能性もあるが接続は確認できない。33は完形の032型式の木簡。表面が削られていて文字は「天」一字のみしか残らない。年号「天平……」の一部であろう。34は右辺の切り込み部分より下をかなり欠くが、完形に近い032型式の木簡。しかし、充分には釈読できない部分があり、物品名も特定できない。

35は上下両端は折れ、左右両辺は割れ。36は上下両端は折れ、左辺は削り、右辺は割れ。37は上端のみ折れ、下端と左右両辺は削り。「机」を二文字習書する。38～44は削屑。44の一文字めと二文字めは草偏の文字。45は用途不明の木製品に二次的に加工されているが、木目と直交する方向に「相」の一文字を確認できる。46は横材の削屑。

3-1-2 瓦埴類

本調査区からは多量の瓦埴類が出土した。瓦埴の種類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、施釉瓦、ヘラ書き瓦、刻印瓦、鬼瓦、隅切平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、隅木蓋瓦、埴がある。軒瓦の型式分類は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』に従い、『平城報告XIII』の瓦編年に基づいて時代順に説明する。¹⁾ 瓦編年の第Ⅰ期、第Ⅱ期は平城還都前、第Ⅲ期以降は平城還都後に相当する。

3-1-2-1 軒丸瓦

総数503点²⁾、このうち型式が判明したのは381点、24型式59種ある。以下の記述で使用する各部位の名称は図75のとおりとする。特に断らない場合は接合式で、一本作りが確認できる例のみ記述する。図版に使用した各型式の法量、出土遺構などは表2に示した。

第Ⅰ期

6233型式 (2点) 独立間弁、外区は珠文のみの素文縁。A、Bの2種が出土した。

A (1点 図版85) 中房1 + 4 + 8、花卉8、外区珠文32、外縁は三角縁で頂部を面取りする。中房の外周に圏線を彫り足したAbが出土した。

丸瓦部凹面には粘土紐の継ぎ目がみえる。破片断面の観察から接合式で、丸瓦は瓦当の外区部分までおよぶ。瓦当外区外縁は頂部と傾斜面を面取りする。瓦当側面と丸瓦部凸面はタテケズリする。瓦当裏面はヨコナデ、接合部はヨコナデツケ、丸瓦部凹面は未調整で布目がのこる。側面はケズリ、凹面側縁は面取りし、側面接合部はほぼ直角に仕上げる。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

B (1点 図版85) 中房1 + 4 + 8、花卉8、外区珠文32、外縁は傾斜縁Ⅰ。鋸歯文のないBa

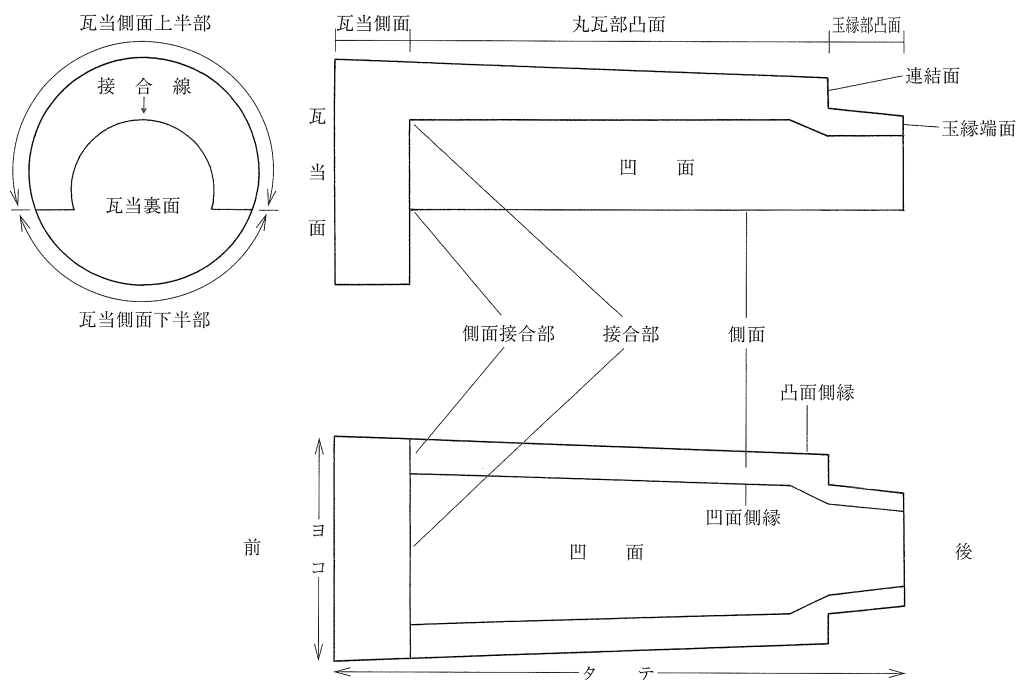


図75 軒丸瓦部位名称

が出土。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテナデする。ナデ調整後、瓦当側面頂部に幅4cm、長さ3cmほどの範囲を工具で横位に刻みをつける(図版93)。瓦当側面下半部の調整は不明、瓦当側面には瓦当面から0.5cmのところに範端痕跡が一周する。瓦当裏面下半部はヨコケズリ、裏面上半部はタテケズリ、接合部はタテナデツケがみられる。また丸瓦部側面から瓦当裏面下半部周縁にかけてケズリを施し、側面接合部を曲線に仕上げる(図版93)。凹面側縁も面取りする。丸瓦部凹面は未調整。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

6273型式 (11点) 中房は二重蓮子、独立間弁、外区に珠文と凸鋸齒文を飾る。A、Bが出土した。このほか種に分類できない例が2点ある。

A (3点 図版85) 中房1+5+9、花卉8、珠文40、凸面鋸齒64、外縁は三角縁。

瓦当側面には瓦当面から1cmほどのところに範端の痕跡が一周する。瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテあるいはヨコケズリ、瓦当側面下半部はヨコナデ調整する。瓦当裏面には指頭圧痕やユビナデがあり、裏面下半部の周縁部分は斜位の刻みが3条みとめられる。接合部から丸瓦凹面にかけて接合粘土を粗くナデつけた後、細いヘラ状工具で縦方向に粗くナデツケする。丸瓦側面はケズリ、側面接合部は直角をなす。胎土は2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は灰色だが一部に暗灰色をのこす。

B (6点 図版85) 中房1+5+9、花卉8、珠文40、凸面鋸齒64、外縁は三角縁。

6点の瓦当側面には瓦当外縁頂部より1cmほどのところに範端痕跡がある。瓦当側面がのこる4点のうち1点は1周し、3点は側面上半部のみ、2点は下半部のみ残存する。図版の例は範端が瓦当周縁を一周する(図版85①・③)。瓦当側面はタテケズリし、丸瓦部凸面はタテナデする。これらの調整後に、瓦当より後方約5cm~12cmの範囲にかけて、ヘラ状の工具を強く押し当てながら斜めに刻みをつける(図版93①)。瓦当裏面中央部から接合部にかけて指頭圧痕や爪痕がみえ、丸瓦部凹面は粗いタテナデを施す(図版93①)。丸瓦部凹面側縁は面取りし、丸瓦側面から瓦当裏面下半部周縁にかけてタテケズリ、側面接合部は曲線を呈す。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は堅緻、全体に暗灰色で瓦当側面のケズリ部分は色が濃く、若干光沢がある。

別の例では丸瓦部が完存する。範端は瓦当側面上半部のみ。丸瓦部凸面の前方は瓦当から凸面に向かって斜位の強いユビナデ調整する。凸面中央部は縦位のヘラナデ、後方3分の1ほどはヘラナデが及ばず横位のハケメがのこる(図版85②・94②)。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は器表が剥離し灰色を呈す。接合溝に丸瓦広端面の刻みが反転してのこる例もある(図版85③)。

6274型式 (4点) 中房は二重蓮子、独立間弁、外区は珠文と線鋸齒文を飾る。Aが出土した。このほか種に分類できない例が2点ある。

A (2点 図版85) 中房1+5+9、花卉8、珠文40、鋸齒文42、外縁は傾斜縁Ⅰ。

器表が摩滅しているため調整は不明。胎土は2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は灰色を呈すが部分的に暗灰色がのこる。

6275型式 (38点) 中房は二重蓮子、独立間弁、外区は珠文と線鋸齒文。6274型式に類似するが花卉がやや小さい。A、B、I、Jが出土した。このほか種に分類できない例が7点ある。

A (24点 図版85) 中房の蓮子1+4+12、花卉8、珠文43、鋸齒文32、外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面には瓦当から0.8cm前後のところに範端痕跡がある。瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテナデ調整する。ナデ調整後、工具を瓦当側面頂部に押し当て平坦面をつくる(図版93①)。この平坦面は瓦当側面頂部が残存する13点中、8点で確認できた。瓦当側面下半部はヨコナデ調整する。瓦当裏面は接合部から下方にかけて縦位のユビナデ後、下半部をヨコナデする。接合部から丸瓦凹面にかけてはタテナデツケがみられる。丸瓦側面から瓦当裏面下半部周縁にかけてタテケズリし、側面接合部を曲線に仕上げる。胎土は径3mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。また別の1点では頂部にヘラ状工具の先端を縦位に押しつけた例がある(図版93②)。

B (2点 図版85) 中房の蓮子1+4+8、花卉8、珠文39、鋸齒文22、外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面をタテケズリし、瓦当裏面はヨコナデ、接合部はタテナデツケする。側面接合部は曲線をなし、側面から瓦当裏面下半部周縁にかけて面取りする。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は淡い暗青灰色を呈す。

I (1点 図版86) 中房の蓮子1+4+8、花卉8、珠文32、鋸齒文32、外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面上半部はタテケズリ、下半部はヨコナデ調整する。瓦当裏面はヨコナデ、接合部はヨコナデツケする。丸瓦接合の際に内側に接合粘土をほとんど使用せず、側面接合部はほぼ直角を呈す。胎土は精良、焼成は良好、暗灰色を呈す。

J (4点 図版86) 中房の蓮子1+4+8、花卉8、珠文39、鋸齒文22、外縁は傾斜縁Ⅰ。Bと酷似するが、JはBにくらべて外区外縁幅が広いのが特徴。

瓦当側面、丸瓦部凸面は摩滅のため調整不明。瓦当裏面は斜位のナデ調整を施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好、瓦当面は灰色だが裏面は濃い暗灰色を呈す。別の資料では瓦当側面上半部から丸瓦凸面にかけてタテケズリする。瓦当裏面には指頭圧痕があり、接合部はタテナデツケする。丸瓦側面はタテケズリし側面接合部を曲線に仕上げる。側縁は面取りする。

6278型式 (1点) 中房二重蓮子、独立間弁、外区は珠文と線鋸齒文。Eが出土。

E (1点 図版86) 中房蓮子1+8+12、花卉8、珠文40、鋸齒文は不明、幅の狭い傾斜縁Ⅰ。

瓦当上半部が残存するが、器表は摩滅し調整不明である。胎土には径3mm以下の砂粒が多く含まれ、焼成は良好、色調は瓦当面に暗灰色がのこる。

6279型式 (12点) 中房は一重蓮子、独立間弁、外区は珠文と線鋸齒文。A、B種が出土。

A (11点) 中房蓮子は1+8、花卉8、珠文31、鋸齒文27、外縁は傾斜縁Ⅰ。鋸齒文の彫り直しと外縁頂部の加工によりAa、Abに細分できるが、判定できない例が1点ある。

Aa (5点 図版86) 瓦当外縁頂部には凹線がめぐる。摩滅のため調整は不明。側面接合部は曲線を呈しケズリを施す。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。別の資料では瓦当側面上半部はタテナデ、下半部はヨコナデ、瓦当裏面はヨコケズリする。

Ab (5点 図版86) 瓦当外縁頂部を面取りし端面を作る。瓦当上半部から丸瓦凸面にかけてタテケズリし、下半部はタテケズリ後ヨコナデ調整する。瓦当裏面はタテナデ調整。接合部から丸瓦凹面にかけてはタテナデ後、接合部をさらにヨコナデツケする。丸瓦側面はタテケズリし、側面接合部は直角に仕上げる。側面接合部から瓦当裏面下半部周縁にかけてケズリを施す。胎土は精良、焼成は良好、色調は灰色を呈すが、凸面に暗青灰色の部分のこす。

B (1点 図版86) 中房蓮子1+6、花卉8、珠文28、鋸齒文28、外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテケズリし、瓦当裏面から丸瓦凹面はタテナデ調整する。丸瓦凹面側縁は面取りする。胎土には径4mm以下の砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は暗灰褐色を呈す。

6281型式 (10点) 中房は二重蓮子、連続間弁、外区は珠文、線鋸齒文。A、Bが出土した。種に分類できない例が2点ある。

A (7点 図版86) 中房珠文1+4+8、花卉8、外区珠文32、鋸齒文46、外縁は三角縁。

瓦当側面に筈端痕跡があり、瓦当から幅0.7~0.8cmある。瓦当側面から丸瓦部凸面にかけてタテケズリする。瓦当裏面は下半部周縁に沿ってケズリを施し、中央部は不明、接合部から丸瓦凹面にかけてはタテナデがみられる。丸瓦部凹面側縁を面取りし、側面接合部はほぼ直角に仕上げる。胎土は白色の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。側面接合部が曲線をなす例もある。

B (1点 図版86) 中房珠文1+8+8、花卉8、外区珠文32、鋸齒文37、外縁は三角縁。

外縁三角縁のBaが出土した。瓦当下半の一部が残存するのみで、瓦当側面はヨコナデ調整する。瓦当裏面はヨコケズリ、裏面の一部は剥離しており、剥離面には布目が残存する。布目上には指頭圧痕とおもわれる凹凸があり、布目押圧のあとに瓦当裏面に接合粘土を貼り足している。胎土には5mm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

6282型式 (94点) 中房蓮子一重、連続間弁、外区は珠文と線鋸齒文。Aのみ第I期に属する。

A (1点 図版87) 中房珠文1+8、花卉8、外区珠文24、鋸齒文は不明。外縁は内湾する傾斜縁II。

器表が摩滅し調整の詳細は不明だが、瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてと、瓦当側面下半部はタテケズリかタテナデ調整を施す。瓦当裏面はナデ、接合部はヨコナデツケ、丸瓦凹面はタテナデ調整。胎土は精良、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。

6284型式 (39点) 中房蓮子一重、連続間弁、外区は珠文と線鋸齒文。A~Eが出土した。

A (12点 図版87) 中房1+6、花卉8、外区珠文24、鋸齒文23、外縁は傾斜縁II。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面はタテケズリ後ナデ調整、瓦当側面下半部はヨコナデ。瓦当裏面はタテナデ、接合部はヨコナデツケ、丸瓦部凹面はタテナデ調整後、部分的にタテケズリする。接合線は半円形、側面接合部は直角をなす。胎土は精良で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

B (4点 図版87) 中房1+6、花卉8、外区珠文20、鋸齒文20、外縁は傾斜縁II。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテケズリする。瓦当側面下半部の調整は不明。瓦当裏面下半部はヨコナデ、上半部から丸瓦部凹面にかけてはタテナデ調整を施す。接合線は半円形で側面接合部は鈍角を呈し、側面接合部から瓦当裏面の下半部周縁にかけてケズリ調整する。丸瓦部凹面側縁は面取り。胎土は精良で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

C (12点 図版87) 中房1+6、花卉8、外区珠文24、鋸齒文16、外縁は傾斜縁II。

器表は摩滅のため調整不明。径3mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好、器表がのこる瓦当は暗灰色を呈す。別の資料では瓦当側面上半部に幅の狭いヘラ状工具を斜位に押し当て長さ2cm前後の刻みをつける(図版93②)。また瓦当裏面から接合部にかけてヨコナデツケし、丸瓦部凹面は幅5mm前後のヘラ状工具で縦位にナデツケする例がある。胎土は最大径3mm以下の砂粒

を含むが、その含有量には多少の差がある。焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

D (2点 図版87) 中房1 + 6、花卉8、外区珠文20、鋸歯文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

調整は瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテナデ調整する。瓦当側面下半部の調整は摩滅のため不明。凹面側の接合粘土は非常に薄い。瓦当裏面はナデ調整、丸瓦凹面はタテナデの後、接合部をヨコナデツケする。別の1点は瓦当側面下半部をタテケズリ後ヨコナデする。瓦当裏面は中央部が皿状にくぼみ、その中を周縁に沿ってヨコナデし、中央部はタテナデする。胎土は5mm以下の砂粒を極少量含み、焼成は堅緻あるいは良好、色調は暗灰色を呈す。

E (2点) 中房1 + 6、花卉8、外区24、鋸歯文22、外縁は傾斜縁Ⅱ。中房の中心珠文の彫り直し前のEaと花卉の彫り直し後のEbが出土した。

Ea (1点 図版87) 器表の状態がわるく調整は不明。接合部から丸瓦部凹面にかけてタテナデ調整するが後方には及ばず布目がのこる。接合線は半円形。胎土は径5mm以下の大粒の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。

Eb (1点 図版87) 器表は摩滅しており調整は不明。瓦当側面の瓦当周縁に幅0.4cmほどの範端痕跡がのこる。胎土は径1cm以下と大きな砂粒を比較的多く含み、焼成は良好、器表が摩滅し全体に灰白色を呈すが、わずかに暗灰色の部分がある。

6304型式 (5点) 中房蓮子一重、連続間弁、外区は珠文と線鋸歯文。A～Cが出土した。このうちC種が第Ⅰ期に属する。このほか種に分類できない例が1点ある。

C (2点 図版87) 中房1 + 6、花卉8、外区珠文19、鋸歯文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

瓦当側面は摩滅により調整不明、瓦当裏面はタテナデを施す。胎土には微量の細かい砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

第Ⅱ期

6304型式

A (1点 図版88) 中房1 + 6、花卉8、外区珠文17、鋸歯文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

外区の珠文に範傷が認められる。調整は瓦当側面上半部にヘラ状工具を斜めに押し当ててつけた刻みがあり、刻みの長さは3～7cmほどある。瓦当側面下半部は摩滅しており調整不明。瓦当裏面はナデを施し、接合部はナデツケ後に丸瓦部凹面まで幅5mmほどのヘラ状工具で横位、斜位に粗くナデツケする。胎土は精良で焼成は堅緻、色調は黒灰色を呈す。

B (1点 図版88) 中房1 + 6、花卉8、外区珠文20、鋸歯文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

瓦当の半分ほどが残存するが、器表はほとんど摩滅しており調整は不明。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は全体に灰色を呈すが、部分的に暗灰色がある。

6311型式 (9点) 中房蓮子一重、独立間弁、外区は珠文と線鋸歯文。A、Bが出土した。

A (2点 図版88) 中房1 + 6、花卉8、外区珠文26、鋸歯文23、外縁は傾斜縁Ⅱ。花卉の輪郭と子葉の彫り直しによってAa、Abに細分でき、Aaが出土した。

厚さ1.5cmほどの範詰め1次粘土、1.5～2.0cmほどの2次粘土、丸瓦接合のための3次粘土、それぞれの接合面のところで剥離しており成形の工程がわかる。器表が摩滅して凸面の調整は不明だが、瓦当裏面には指頭圧痕がのこり、接合部はヨコナデ、丸瓦部凹面はタテナデする。接合線は台形状を呈す。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は全体に灰色を呈すが一部に暗灰色部分がある。

B（7点 図版88） 中房1 + 6、花卉8、外区珠文26、鋸齒文26、外縁は傾斜縁Ⅱ。花卉の彫り直しによりBa、Bbに細分できるが、Ba2点を確認したのみでほかは細分できなかった。

器表が摩滅しているため調整は観察できない。接合線は低い半円形。胎土には径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は黒灰色である。

6313型式（37点） 中房蓮子珠文1、独立間弁、外区珠文と線鋸齒文。A、Cが出土した。このほか種に分類できない例が4点ある。

A（14点 図版88） 花卉4、外区珠文16、鋸齒文16、外縁は傾斜縁Ⅰ。中房と弁の彫り直しによりAa、Abに細分でき、確認できたのはAa10点、ほかは細分不明である。

瓦当側面上半部はタテケズリ、下半部はヨコナデする。瓦当裏面はヨコナデあるいはユビの凹凸が残るような強いヨコナデを施す。胎土は径5mmほどの大粒の砂粒を含む、あるいは径1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻あるいは良好、色調は器表が剥がれて灰色を呈するが、一部に淡い暗灰色の部分のこす。

C（19点 図版88） 花卉4、外区珠文16、鋸齒文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

図版の例は摩滅のため調整不明だが、砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。別の資料では、瓦当側面上半部から丸側部凸面にかけてタテケズリする。瓦当側面下半部はヨコナデを施す。瓦当裏面はヨコナデする。接合部はヨコナデ、丸瓦部凹面はタテナデする。胎土は径5mm以下の大粒の砂粒を含むものと、2mm以下の砂粒を少量含む例とがあり、焼成は堅緻あるいは良好、色調は暗灰色を呈す。

6012型式（1点） 中心に珠文をもつ三重の重圏文。Bが出土した。

B（1点 図版88） 中心から数えて第3圏線が細いのが特徴。外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面、裏面は摩滅のため調整不明。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6135型式（1点） 菊花状重弁、三角形の独立間弁、外区は珠文、線鋸齒文。Bが出土した。

B（1点 図版89） 中房蓮子1 + 4、花卉13、外区珠文24、鋸齒文39、外縁は三角縁。

珠文を彫り直したBbである。丸瓦の接合溝内壁面に丸瓦凹面の布目が転写されている。器表は摩滅し調整はほとんど不明であるが、瓦当裏面はタテナデツケする。側面接合部は曲線を呈し、接合部から瓦当裏面下半部周縁にかけてケズリ調整する。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6142型式（8点） 重弁、菊花状、連続間弁、外区は珠文と線鋸齒文を飾る。Aが出土。

A（8点 図版89） 中房1 + 6、花卉13、外区珠文と鋸齒文数は不明、外縁は三角縁。

器表が摩滅し調整は不明。径2mm以下の砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰褐色を呈す。別の資料では瓦当側面上半部をタテナデ調整する例がある。

6291型式（2点） 中房蓮子一重、連続間弁、外区は珠文と線鋸齒文。Aが出土した。

A（2点 図版89） 中房1 + 6、花卉8、外区珠文16、鋸齒文は不明、外反する傾斜縁Ⅲ。

2点はいずれも間弁の彫り直しのないAaである。図版の例は摩滅し調整は不明。接合線は低い半円形を呈し、丸瓦部の断裂部分には丸瓦の輪郭が見えないことから一本作りと考えられる。別の資料では瓦当側面をヨコナデする。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6307型式（2点） 中房蓮子一重、無間弁、外区は珠文と線鋸齒文。Aが出土した。

A（2点 図版89） 中房1 + 6、花卉8、外区珠文16、鋸齒文16、外縁は傾斜縁Ⅱ。

器表の状態がわるく調整は観察できない。瓦当裏面は剥離し、その剥離面には粘土を範詰める際の指頭圧痕がのこる。胎土は微量の細かい砂粒を含み、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。

6308型式（8点） 中房蓮子一重、独立間弁、外区は珠文と線鋸歯文。A、Cが出土した。

A（1点 図版89） 中房1 + 6、花卉8、外区珠文16、鋸歯文16、外縁は傾斜縁Ⅰ。

彫り直しのないAaが出土した。瓦当面上半部に外区から内区を横切る形で横に直線状の範傷が明瞭にみとめられる。瓦当側面の調整は摩滅のため不明だが、瓦当裏面はヨコケズリした後、接合部を強くナデツケする。接合線は低い半円形。胎土は2mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は全体に灰色を呈すが部分的に暗灰色をのこす。

C（7点 図版89） 中房1 + 6、花卉8、外区珠文16、鋸歯文数は不明、外縁は傾斜縁Ⅰ。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテヘラナデ調整をする。側面下半部はヨコナデ。瓦当裏面はナデ調整の後、下半部周縁側を面取りする。丸瓦部凹面は瓦当側から玉縁方向へタテケズリし、瓦当裏面と丸瓦部凹面の調整後、接合部をヨコナデする。丸瓦部側面はタテケズリし、側面接合部はほぼ直角を呈す。胎土は径1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

第三期

6225型式（75点） 独立間弁、外区は二重の圏線と凸面鋸歯文を飾る。A、B、C、Lが出土した。このほか種に分類できない例が20点ある。

A（22点 図版90） 中房蓮子1 + 8、花卉8、凸面鋸歯文26、外縁は傾斜縁Ⅰ。

外縁頂部をヘラケズリして端面をつくる。丸瓦の接合痕跡がみられず一本作りと考えられる。瓦当側面全面をヨコナデし、丸瓦部凸面は狭端部までタテナデ、狭端部肩から連結面まではヨコナデ、玉縁部凸面もヨコナデ、玉縁端面は未調整。瓦当裏面下半部から丸瓦部凹面、玉縁部凹面までは粗いタテナデを施す（図版94①）。丸瓦部側面はタテナデ調整する。接合線は低い半円形か台形状を呈し、側面接合部はほぼ直角となる。胎土には2mm以下の砂粒を少量含み、焼成はやや軟質、色調は黒灰色を呈す。

このほか、瓦当裏面に布目押圧痕がある例（図版93②）、瓦当裏面中央部が大きくくぼみ斜位の強いナデを施す例がある（図版94③）。

B（3点 図版90） 中房1 + 8、花卉8、凸面鋸歯文24、外縁は傾斜縁Ⅰ。

丸瓦の接合痕跡がみられないことから一本作りの可能性がある。瓦当外縁頂部をヘラケズリして端面をつくる。瓦当側面上半部から丸瓦凸面にかけてはタテヘラナデを施し、瓦当側面下半部はヨコナデする。瓦当裏面下半はナデ調整、上半から接合部にかけてはタテナデする。接合線は半円形をなし、丸瓦側面と瓦当裏面の接合部は鈍角を呈す。胎土は径5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は堅緻または良好、色調は暗灰色を呈す。

C（29点 図版90） 中房は1 + 8の珠文、花卉8、外区凸面鋸歯文32、外縁は傾斜縁Ⅰ。

C種は一本作りと接合式とがあるが、接合式と確認できたのは接合溝をのこす3点（図版94①）。そのほかは丸瓦部の断面などに丸瓦の痕跡が見られないことから一本作りと考えられる。

玉縁までのこる完形品が出土し、瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてはタテナデ調整するが、これは丸瓦部狭端連結面をヨコナデした後におこなう（図版94②）。玉縁凸面はタテヘラナデ。瓦当側面下半部はヨコナデ、瓦当裏面から丸瓦部凹面の接合部にかけては斜位の強いナ

デツケがみられ、丸瓦部凹面はタテケズリを施し、玉縁凹面は未調整で布目がのこる（図版94②）。瓦当裏面下半部周縁に沿って面取りし、側面接合部は曲線気味に仕上げる。接合線は半円形。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

L（1点 図版90） 中房1+8、花卉8、鋸齒文数は不明、外縁は傾斜縁I。

瓦当の一部が残存するのみで器表は摩滅し調整は不明である。胎土は精良で、焼成も良好、色調は全体に灰白色を呈すが一部に暗灰色をのこす。

6282型式 中房蓮子一重、連続間弁、外区は珠文と線鋸齒文。前述したA以外に、B、C、E、G、Lが出土した。このほか種に分類できない例が3点ある。

B（4点） 中房1+6、花卉8、外区24、鋸齒文24、外縁は傾斜縁I。花卉の彫り直しによってBa、Bbに細分できる。

Ba（3点 図版89） 丸瓦接合部の位置が低く、接合粘土を大量に使用する。器表摩滅のため調整は観察が難しいが、丸瓦部凸面ではタテケズリの痕跡が認められる。側面接合部は鈍角を呈し、接合線は低い台形になる。胎土には径が最大1cmほどの砂粒が多く含まれる。焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

Bb（1点 図版89） Ba同様、丸瓦接合部の位置が低く接合粘土が厚い。側面接合部は鈍角を呈し、接合線は低い台形になる。器表が摩滅し調整は不明である。胎土は径5mm以下の大きめの砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

C（11点 図版91） 中房蓮子1+6、花卉8、外区珠文24、鋸齒文24、外縁は傾斜縁I。文様の彫り直しがないCaが3点あり、そのほかは細分できなかった。

全体に器表の摩滅が激しく調整を観察できる例はほとんどなく、かろうじて瓦当裏面にタテナデの痕跡がのこる程度である。接合線は確認できた限り台形を呈す。丸瓦部側面と瓦当裏面の接合部は鈍角をなす。胎土には径1cm以下の大粒の白色砂粒を多量に含み、焼成は良好、すべて器表が剥離し灰色を呈す。

E（1点 図版91） 中房1+6、花卉8、外区24、鋸齒文24、外縁は傾斜縁I。

器表は激しく摩滅し調整は不明である。胎土には径5mm以下の大きめの砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は灰色を呈する。

G（71点 図版91） 中房1+6、花卉8、外区24、鋸齒文25、外縁は傾斜縁I。

1型式の種としては、最も個体数が多いが、残存状況がわるく器表は摩滅し、当初の色調や調整はほとんど残っていない。①は瓦当側面下半部をタテナデ、丸瓦部凸面はタテヘラナデ、瓦当裏面下半部はタテケズリ、上半部はタテナデ調整する。③は丸瓦凸面にタテヘラナデの痕跡をのこすほかは調整不明である。接合線は台形を呈し、丸瓦側面と裏面の接合部は鈍角をなす。胎土には径1cm以下の大粒の白色、暗灰色砂粒を多量に含み、焼成は良好、残存する器表は暗灰色を呈す。

L（3点 図版91） 中房1+6、花卉8、外区24、鋸齒文不明、外縁は直立縁。

瓦当径が22cmある大型の軒瓦。丸瓦凸面が瓦当頂部から約5cmのところの位置し、接合粘土は丸瓦凸面側に多量に用い、接合部はごく薄い。丸瓦凸面側には接合粘土の接着をよくするための凹凸が明瞭にのこる（図版94）。調整は摩滅のため詳細不明だが、瓦当裏面はヨコナデ調整し、接合部はヨコナデツケする。側面接合部は鈍角を呈し、接合線は低い半円形になる。胎土

には径5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6129型式 (3点) 重弁菊花状で、外区には珠文と凹線鋸齒文を飾る。Aが出土した。

A (3点 図版91) 中房蓮子1+8、花卉12、外区珠文18、凹線鋸齒文19、外縁は傾斜縁I。

瓦当側面には瓦当から1cmほどのところに範端痕跡がめぐり、側面下半部はヨコナデ調整し、瓦当側面上半部はタテナデを施す。瓦当裏面下半部の周縁は幅1.5cmほどのケズリ部分がめぐり、中央は浅い凹面状をなし、方向不定のナデを施す。接合部はヨコナデツケをおこなう。別の1点では丸瓦部が残存し、凸面はタテヘラナデ、凹面はタテナデをおこなう。胎土は径3mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

6132型式 (1点) 重弁、菊花状、無間弁、外区に珠文と線鋸齒文を飾る。Aが出土した。

A (1点 図版91) 中房蓮子1+8、花卉16、外区珠文16、鋸齒文17、外縁は三角縁。

珠文と内側界線の間に範傷が認められる。器表摩滅のため調整は不明。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は変色しており不明。

6133型式 (15点) 重弁、菊花状、無間弁、外区内縁の珠文のみで外区外縁は素文。A、D、K、Mが出土した。このほか種に細分できない例が1点ある。このうちKがⅢ期に属する。

K (4点) 中房蓮子1+5 花卉16、外区珠文27、外縁は傾斜縁I。中房、花卉の輪郭線の彫り直しによってKa、Kbに細分できる。

Ka (3点 図版92) 図版の例は瓦当側面をタテナデ調整する。別の資料では瓦当側面下半部をヨコナデ、瓦当側面上半部から丸瓦凸部にかけてタテケズリ後タテナデ、瓦当側面の瓦当側を幅1cmほどヨコナデする。瓦当裏面下半部はヨコケズリ、上半部はヨコナデ、丸瓦部凹面はタテナデする。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

Kb (1点 図版92) 摩滅のため丸瓦部凸面は調整不明、瓦当裏面には指頭圧痕がのこり、丸瓦部凹面は比較的強いタテナデを施す。接合部には整った円弧状の痕跡があり、一本作り成形台の痕跡とおもわれる。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

第Ⅳ期～Ⅴ期

6011型式 (2点) 中心に珠文のない三重の重圏文。Cが出土。

C (2点 図版92) 圏線は太さが変わらず全て細いのが特徴。外縁は直立縁。

瓦当側面上半部から丸瓦部凸面にかけてタテナデ調整した後、瓦当側面にヨコナデを施す。瓦当側面には範端痕跡が瓦当から0.7、0.8cmのところの一部のこる。瓦当裏面はナデ調整、丸瓦接合部はヨコナデする。別の1点は瓦当裏面に布目があり、裏面の外周にケズリを施す。胎土は2点とも径1mm以下の砂粒を含む精良な土で、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

6133型式 (2点)

A (1点 図版92) 中房蓮子1+5、花卉12、外区珠文13、鋸齒文不明、外縁は傾斜縁I。

範の彫り直しの有無で細分できるが、本例は小片のため判断できない。器表はすべて摩滅し調整は不明。胎土は径5mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は灰褐色を呈すが、当初の器表はすべて剥離している。

D (8点 図版92) 中房蓮子1+6、花卉16、外区珠文24、外縁は傾斜縁I。彫り直し前のDa、中房全体が突出するDbがある。3点は中房が残存していないため判断できない。

Da (2点 図版92) 瓦当側面上半部をタテケズリないしタテヘラナデする。下半部は摩滅の

表2 軒丸瓦の出土遺構と法量

型式	遺構番号	瓦当径	全長	玉縁長	図版	型式	遺構番号	瓦当径	全長	玉縁長	図版
6233Ab	SD3715	15.9			85	6135Bb					89
6233Ba	SD3715	16.0			85・93	6142A		14.0			89
6273A	SA13920	19.1			85	6291Aa		16.2			89
6273B①	SD3715	18.9			85・93	6307A①					89
6273B②		18.3	37.4 (玉縁欠)		85・94	6307A②					89
6273B③	SD3715	18.7			85	6308Aa		16.4			89
6274A					85	6308C	SD3715	17.1			89
6275A①	SB14105	18.1			85・93	6282Ba	SB14110	16.5			89
6275A②	SD3715	18.0			93	6282Bb	SD3715				89
6275B	SD11714	17.8			85	6225A①	SD3715	17.2	36.8	4.8	90・94
6275I		17.6			86	6225A②	SD3715中層	17.1			90・93
6275J	SD13885	18.6			86	6225A③	SD3715				90・94
6278E					86	6225B①		17.7			90
6279Aa	SD3715				86	6225B②	SD3715下層	18.1			90
6279Ab	SD3715	18.3			86	6225C①		16.2			90・94
6279B	SD3715				86	6225C②	SA13749	15.4	39.0	4.4	90・94
6281A					86	6225C③	SD13990	16.0			90
6281Ba	SD3715				86	6225L	SX14448				90
6282A		15.9			87	6282Ca	SD13025	14.3			91
6284A	SK14440				87	6282E	SD13726				91
6284B	SD13990	15.5			87	6282G①	SD3715	17.1			91
6284C①	SK13012	16.0			87	6282G②		17.0			91
6284C②	SD3715				93	6282G③	SB13125	16.6			91
6284D	SD3715	16.2			87	6282L		22.0			91・94
6284Ea	SD13736				87	6129A	SK14521	16.5			91
6284Eb	SD3715				87	6132A	SB14110				91
6304C					87	6133Ka	SD3715下層				92
6304A	SD3715				88	6133Kb	SD13006	17.8			92
6304B					88	6011C	SX13729	13.0			92
6311Aa	SD14112	16.4			88	6133A	SD3715				92
6311Ba		16.5			88	6133Da	SD13742	16.5			92
6313Aa①		12.5			88	6133Db					92
6313Aa②		12.7			88	6133M					92
6313C	SB14110	10.6			88	6316C					92
6012B	SK14355				88						

※単位は cm

ため調整不明。瓦当裏面は下半部周縁に沿って幅1.3mmほどケズリする。裏面の中央部は凹状にくぼみ、工具によるヨコナデ調整がみられる。胎土は精良、焼成は良好、色調は全体に灰黄色を呈すが、一部に暗灰色が残存する。

Db (3点 図版92) 器表の状態はわるく調整は不明だが、瓦当側面に範端痕跡がのこる。胎土は精良あるいは微細な砂粒をわずかに含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

M (1点 図版92) 中房蓮子1 + 6、花卉16、外区珠文16、外縁は厚手の傾斜縁I。

花卉と外区の珠文がわずかに残存するのみである。器表は摩滅し調整は不明。胎土は1mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6316型式 (1点) 中房蓮子一重、無間弁、外区は珠文と線鋸歯文。Cが出土した。

C (1点 図版92) 中房1 + 4、花卉8、外区珠文数、鋸歯文数は不明、外縁は直立縁。

器表は摩滅し調整は観察できない。胎土は径1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

3-1-2-2 軒平瓦

出土した総数は計306点、このうち2点は近世である。近世の瓦については報告を割愛する。

奈良時代の瓦は23型式52種あり、型式を判別できない例が39点ある。軒丸瓦同様に時期別に記述する。各部位の名称は図76、図版に示した瓦の法量、出土遺構は表3にまとめた。

第I期

6561型式（2点）六重の重弧文上に○、×文を施文する。Aが出土した。

A（2点 図版95）顎部は貼付け、凹面には幅2.5～3.0cmの枠板痕跡がみられる。施文は重弧文を押し挽きした後、○文と×文を押捺する。上縁の×文は切り合いから右上から左下が先、左上から右下が後である。○、×文は1単位ずつ施文するため間隔は均等でない。下端の波状文は○文施文後に指捻りで作り出す。

平瓦部凹面の瓦当側を幅3～5cmほどヨコズリし、後方は未調整で布目痕が残る（図77）。段顎I Lで、顎面は縦位の縄タタキ後に全面ヨコナデする。平瓦部凸面は顎後端部側を幅11cmほどヨコナデ調整する。凸面後方は未調整。狭端沿いに幅1.5cmほど、狭端面にも凹線状のヨコナデを施す（図版102）。焼成は良好、胎土には径3mm以下の白色砂粒を少量含み、色調は灰色を呈す。

6641型式（21点）内区は右偏行の唐草文、上外区に珠文、下外区と脇区に鋸齒文を飾る。C、E、Fの3種が出土した。種に細分できない例が1点ある。

C（10点 図版95）顎は貼付けの段顎I Lで顎面の幅は7.8～9.2cmある。顎面、平瓦部凸面は

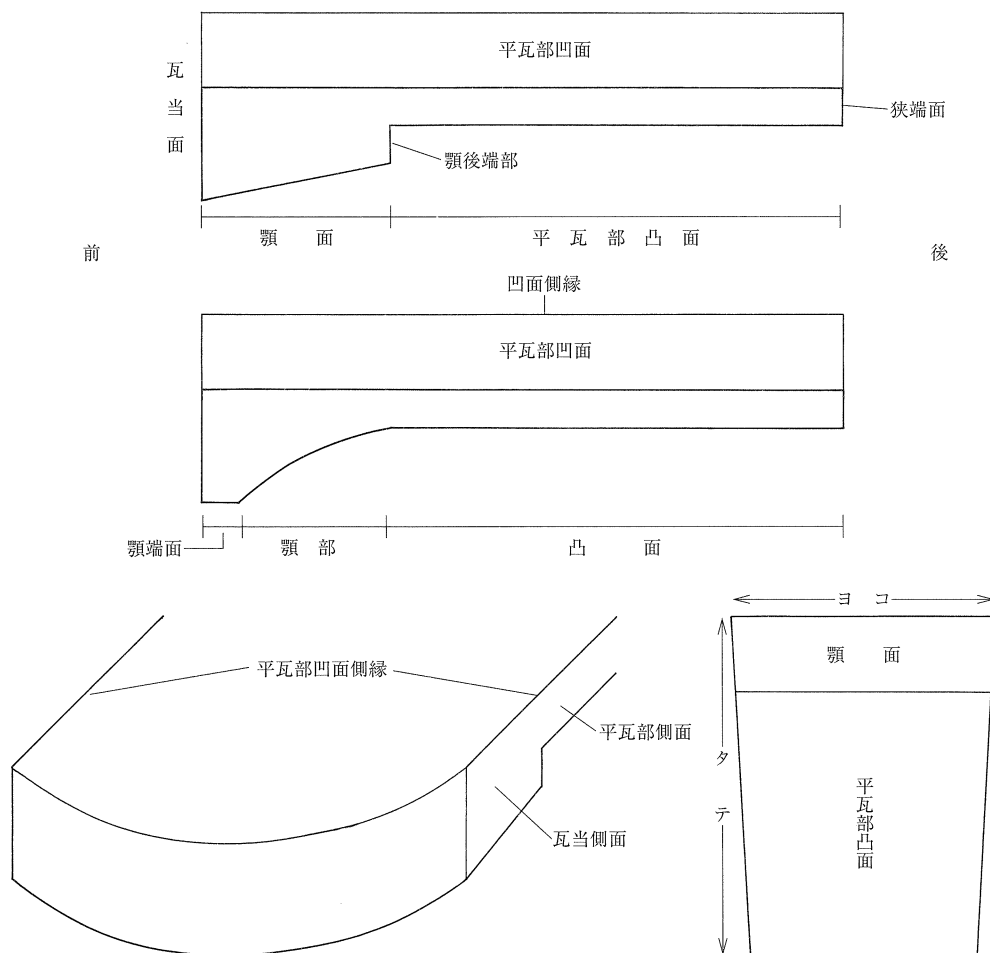


図76 軒平瓦部位名称

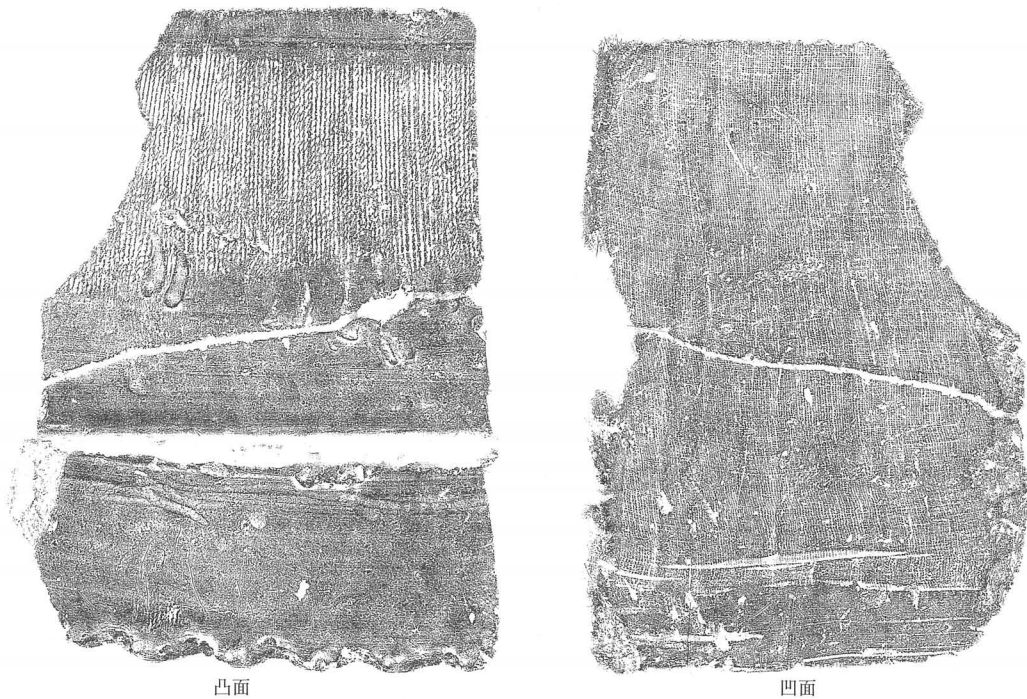


図77 6561A(1:5)

摩滅のため調整不明。平瓦部凹面の瓦当側を幅4cmほどヨコケズりする。凹面側縁は幅1cmほど面取りする。胎土には径2mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

別の資料では顎面にヨコあるいはナナメのケズリを施し、一部ナデ調整を行う。平瓦部凸面は顎後端部側に幅1~3cmほどのヨコナデ調整がみられ、後方はタテケズりする。平瓦部凹面側縁が残存する3点はすべて面取りする。胎土には白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻で、器表が残存する部分は暗灰色である。

E (7点 図版95) 唐草の右第3単位が反転して左向きに巻き込むのが特徴である。

段顎I Lで幅7.5~9.5cmある。顎面は全面にヨコケズリし、顎後端部をヨコナデする。平瓦凸面はヨコナデ調整。側面はタテナデ調整、凹面側縁は面取りする。凹面瓦当側に幅4cmほど横方向のハケメ状調整をするほかは未調整(図版102①)。胎土は白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

そのほかの資料では凹面瓦当側をヨコケズリし、凸面は縦位の縄タタキを擦り消したあとにタテケズりする(図78)。顎後端部を削出す際の切り込みがのこる例もある(図版102③)。

F (3点 図版95) 唐草文はEに似るが、右第3、第4単位がEと違い順行し、内区の幅もEよりせまい。段顎I Lで幅6.5~7.1cm。顎面は摩滅のため調整不明。平瓦部凹面は瓦当側にヨコケズリがみとめられる。凹面側縁は面取りする。胎土は精良で、焼成は良好、色調は暗青灰色が部分的に残存する。

6642型式 (2点) 右偏行唐草文で、上下外区、脇区ともに珠文を飾る。Cが出土した。

C (2点 図版95) 段顎I Lで顎面は摩滅がひどく調整不明。平瓦部凹面の瓦当側にヨコケズリを施す。凹面側縁を幅0.5cmほど面取りする。胎土は精良で、焼成も良好。器表は風化し全体に灰色を呈す。

6643型式（8点）左偏行唐草文で上下外区、脇区ともに珠文を飾る。B、Cが出土した。

B（2点 図版96）段顎ⅠL、顎は貼付け削出し。顎面はヨコケズリ、顎後端側の凸面に幅1.5cmほどの低い段がある（図版102）。平瓦部凸面をタテヘラナデした後に顎後端部沿いをヨコナデするが、わずかに縦位の縄タタキ痕がのこる。平瓦部凹面は瓦当側を5cm幅ほど調整するが摩滅のため詳細不明。凹面後方は未調整。残存する凹面側縁は面取りしない。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

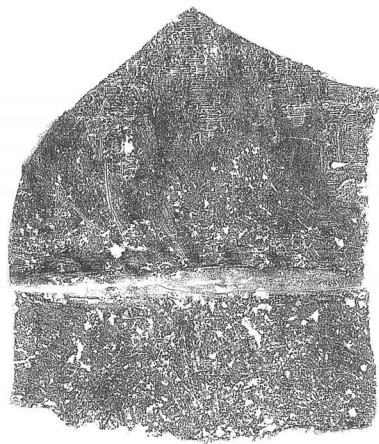
C（6点 図版96）唐草文や珠文が全体に大ぶりなのが特徴。顎は段顎ⅠLで幅は6.2~7.5cmある。顎面をヨコケズリし、平瓦部凸面は顎後端部側を幅4cmほどをヨコナデする。その後方は縦位の縄タタキを部分的に擦消している。瓦当側面のタテケズリは平瓦部凸面の側縁にわずかに及ぶだけで収束する（図版102）。凹面は未調整で枳板痕跡と布目がのこり、中央には布の綴じ合わせ目がみえる（図79、図版102）。別の資料では瓦当側面の面取りがかなり後方まで及ぶ例がある。胎土は精良、焼成は堅緻で、色調は暗灰色あるいは暗青灰色を呈す。

6646型式（1点）右偏行の変形忍冬文、上外区珠文、下外区鋸齒文、脇区は無文。Cが出土。

C（1点 図版96）顎部分だけがのこる。貼付け部分からの剥離であろう。顎はⅠLで顎面と顎後端面はともにヨコナデ調整、瓦当側面の調整は不明。胎土は径1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈すが部分的に暗青灰色をのこす。

6647型式（2点）左偏行の変形忍冬唐草文で上外区は珠文、下外区は鋸齒文。CとDが出土。

C（1点 図版96）Cは笥の彫り直しによりCa~Ccに細分できるが、彫り直しのないCaが出

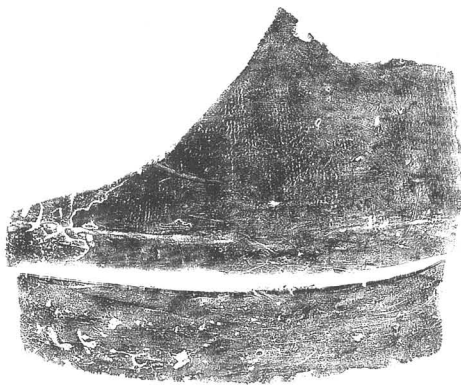


凸面

図78 6641E②(1:5)

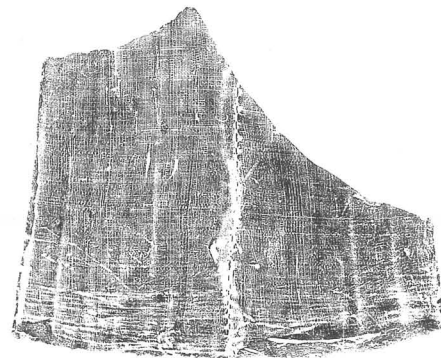


凹面



凸面

図79 6643C(1:6)



凹面

土した。中心飾りと左第1単位の一部のみ残存。段顎I Lで平瓦部の顎貼付け部分に横方向の重弧文状の刻みをつけたあと、顎を貼付けた様子が断面で観察できる(図版103)。顎面全面と顎後端部はともにヨコナデ調整する。凹面は瓦当側に幅6 cm以上のヨコケズリを施す。胎土は精良、焼成は須恵質で堅緻、色調は明灰色を呈す。

D(1点 図版96) 8回転の唐草文でCより文様が崩れる。範の割れを示す斜めの隆起線がある。断裂面で粘土の貼付け痕跡がみえる(図版103)。段顎I Lで、顎面、平瓦部凸面は調整不明。瓦当側面はタテケズリ、凹面はわずかにタテナデの痕跡が確認できる。凹面側縁は幅6 mmほどを面取りする。胎土は砂粒を比較的多く含み、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

6644型式(1点) 右偏行の変形忍冬唐草文で上外区に珠文、下外区は鋸歯文。Aが出土した。

A(1点 図版96) 削出しの段顎I L。顎後端には削出しの際の切り込み痕跡がある。顎面は全面ヨコケズリを施す。平瓦部凸面の顎後端部沿いはヨコナデ調整する。平瓦部凹面は瓦当側を幅3、4 cmほどヨコケズリし、その後方は未調整。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。

6654型式(1点) 左巻きの中心飾りを軸に2支葉1組の唐草を左右対称に展開する。上外区は珠文、下外区と脇区に鋸歯文を飾る。Aが出土した。

A(1点 図版96) 段顎I Sで、顎面と平瓦部凸面、瓦当側面ともタテケズリ調整する。凹面は瓦当側をヨコケズリするほかは布目圧痕がのこる。凹面側縁を幅0.5 cmほど面取りする。胎土は極少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は灰色を呈するが、一部に暗灰色が残存する。

6664型式(28点) 左右3回転の唐草文、外区に珠文を飾る。B、C、D、F、H、I、L、Nが出土した。このうちB、C、H、I、L、Nが第I期に属する。

B(2点 図版97) 左右の第3単位が巻き込まないのが特徴。破片のため顎の形状は不明。摩滅のため調整も明確ではないが、顎面にヨコナデがみえる。凹面側縁は幅0.8 cmほど面取りする。胎土は精良、焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈す。

C(15点 図版97) 段顎I Lで幅は6.0~7.3 cm。顎面はヨコナデ、平瓦部凸面は顎後端沿いを幅8 cmほどタテケズリした後、顎後端部をヨコナデする。後方は未調整で横位の縄タタキ目がのこる。瓦当側面はタテケズリを施す。凹面は瓦当側をヨコケズリ、側縁近くは斜位のケズリ、中央部はタテケズリを施す。他の例でも凸面の縄タタキはすべて横位で、凹面側縁を0.7~1.0 cm幅で面取りする。胎土は砂粒を少量含む例が多く、焼成は良好、色調は暗灰色あるいは暗青灰色を呈す。

H(3点 図版97) 段顎I Lで、顎面と顎後端部はヨコナデ調整する。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は色あせた淡い青灰色を呈す。

I(1点 図版97) 中心飾りが残存。顎は段顎I Lで、顎面はヨコケズリし、顎後端部はヨコナデ調整。凹面瓦当側はヨコケズリを施す。胎土は径2 mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は全体に灰色だが、暗青灰色の部分を残す。

L(2点 図版97) 顎は剥離しているが、後端部が残存し段顎I L。平瓦部凸面は未調整で横位の縄タタキ目をのこす。瓦当側面は調整不明、凹面はヨコケズリする。胎土には径2 mm以下の砂粒を少量含み、焼成はやや軟質、色調は暗青灰色を呈す。

N(1点 図版97) 顎は剥離しているが、後端部が残存し段顎I L、顎後端部をヨコナデし、平

瓦部凸面は未調整で縦位の縄タタキ目がのこる。凹面はヨコケズリで瓦当側を面取りする。胎土は精良、焼成は良好、色調は部分的に暗灰色を呈す。

6668型式 (7点) 左右3回反転、外区珠文で、中心飾りの花頭両端が鋭いのが特徴。Aが出土した。

A (7点 図版97) 段顎I Lで顎面はヨコケズリし、顎後端部をヨコナデして匙面状に仕上げる(図版103)。平瓦部凸面は未調整で縦位の縄タタキ。凹面は瓦当側に最大3.5cm幅でヨコケズリし、その後方はヨコナデ、タテナデ調整する。平瓦部凹面の側縁を幅0.4cmほど面取りする。瓦当側面はケズリ後にタテナデする。胎土は径2mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻、凸面、側面の色調は暗灰色、凹面は一部灰色を呈す。

第Ⅱ期

6572型式 (2点) 二重圏の重郭文。CとGが出土した。

C (1点 図版98) 顎は直線顎。残存状況がわるく調整は不明。胎土は砂粒をほとんど含まない精良な粘土で、焼成はやや軟質、器表が風化し灰黄色を呈す。

G (1点 図版98) 重郭文がCよりやや太い。直線顎で、平瓦部凹面は瓦当側をヨコナデする。胎土は精良、焼成は良好で、色調は暗灰色を呈す。

6664型式

D (1点 図版98) 顎は剥離しているが、顎後端部がわずかに残存し段顎I S。顎後端部をヨコナデする。凹面もヨコナデ調整。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は堅緻、暗灰色を呈す。

F (3点 図版98) 顎は段顎I Sで顎面をヨコナデ、顎後端部も幅1.5cmほどヨコナデする。平瓦部凸面は未調整で縦位の縄タタキ目がのこる。瓦当側面はタテケズリ、凹面は部分的にヨコナデし布目を擦り消す。凹面側縁は幅1.3cmほど面取りする。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色あるいは暗青灰色を呈す。

6666型式 (4点) 花頭文の中心飾りと左右3回転の唐草文で外区は珠文。小型の軒平瓦。

A (4点 図版98) 顎は段顎I Lで顎面をヨコケズリし、顎後端部はヨコナデ調整。瓦当側面はハケメ状の調整を施す(図版103)。平瓦部凹面側縁を幅1.5cmほど面取りし、凹面の瓦当側はヨコケズリする。胎土はわずかに砂粒を含むが、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

6685型式 (11点) 文様は6682型式と類似する。A、B、Eが出土した。種に細分できない例が1点ある。

A (2点 図版98) 段顎I Sで顎面はヨコケズリ、顎後端部はヨコナデする。平瓦部凸面は未調整で縦位の縄タタキ目がのこる。瓦当側面はハケメ調整する(図版103①)。平瓦部凹面は瓦当側を幅5cmほどヨコケズリし、それより後方はヨコナデする。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰色を呈する。

B (7点 図版98) Aよりさらに小ぶりの軒平瓦。段顎I Sで顎面と顎後端部はヨコナデする。瓦当側面はタテケズリ、凹面側縁は幅0.8cmほど面取りする。凹面はヨコケズリないしヨコナデする。胎土は径5mm以下の白色砂粒をやや多く含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

E (1点 図版98) 器表の摩滅がひどく、顎の形態や調整は不明である。胎土は径3mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は軟質、色調は暗灰色を呈す。

6663型式 (97点) 花頭形の中心飾りと左右に3回転する唐草文、外区は二重の圏線を飾る。A、

B、Cが出土した。種に細分できない例が16点ある。このうちA、BがⅡ期に属する。

A（3点 図版99）顎は曲線顎Ⅰで、顎部は瓦当面から7、8cm幅をヨコナデする。瓦当面から5cmのところの萱負の朱線が残存する。平瓦部凸面は未調整で、縦位の縄タタキをした後、狭端部側、幅16、17cmの範囲に斜位の縄タタキをおこなう（図80）。瓦当側面から平瓦部側面にかけてはケズリを施す。凹面は摩滅のため調整不明だが、狭端部近くには所々に布目がのこる。凹面側縁は幅5mmほど面取りする。胎土には径5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好、器表はほとんど摩滅しており灰褐色を呈す。

B（1点 図版99）左右第3単位の主葉と第1支葉との間にある珠文が特徴である。曲線顎で顎端面はヨコナデ、凹面は摩滅で調整不明。胎土は径2mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。

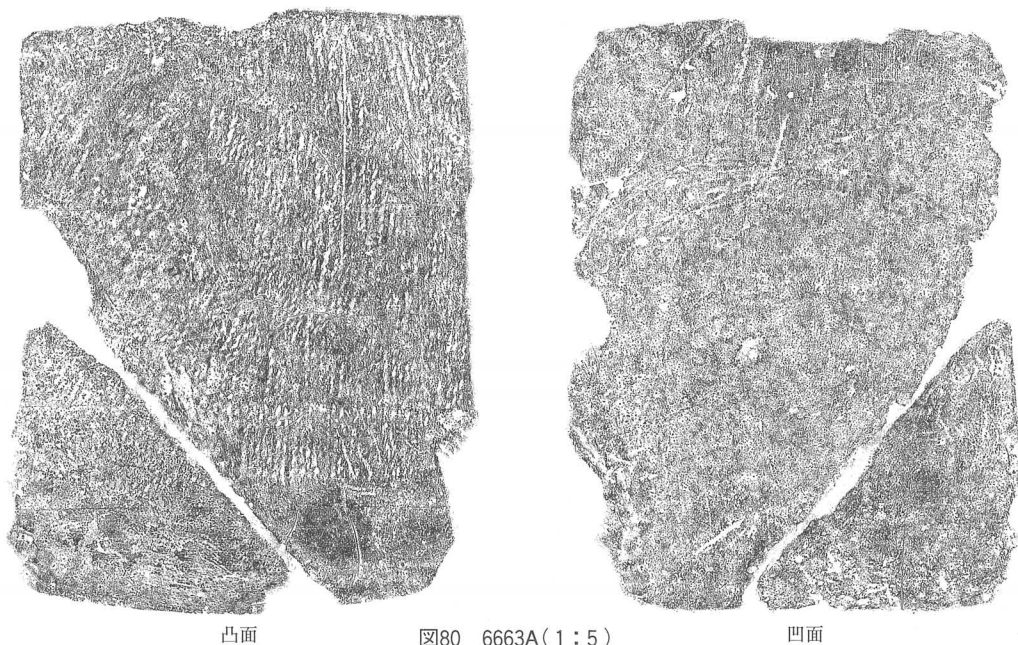
6681型式（7点）中心飾りの有軸三葉文と左右3回反転の唐草文で、外区は二重圏線。B、C、Eが出土した。このうちB、EがⅡ期に属する。

B（1点 図版99）顎は曲線顎だが型式は不明。顎部はタテケズリを施す。凹面は摩滅のため調整不明。胎土は精良、焼成は軟質で、器表は摩滅し灰黄色を呈すが、わずかに暗灰色の部分がある。

E（5点 図版99）曲線顎Ⅱで顎端面はナデ。顎部はタテナデ後に顎端面側に2cm幅でヨコナデする。瓦当側面はハケメ調整し、顎部側だけナデ調整（図版103②）。平瓦部凹面側縁は幅1cmほど面取りする。凹面は瓦当側に最大8cm幅でヨコケズリ、それより後方はヨコナデ調整。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

6694型式（2点）有軸三葉形に二葉を加えた中心飾りで、左右3回反転の唐草文、外区は珠文を飾る。Aが出土した。

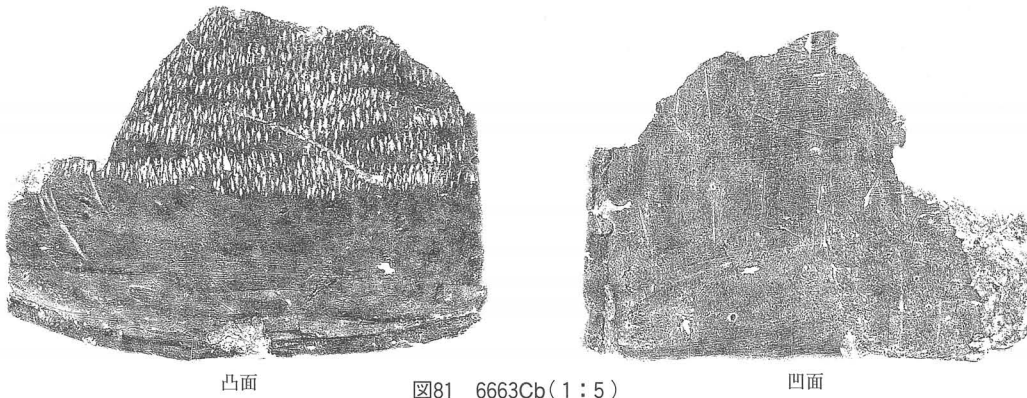
A（2点 図版99）顎形態や凹面の調整は不明。胎土は径1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。別の1点は瓦当側面をタテケズリ、凹面側縁は幅1.5cmほどの面取りをし、凹面はヨコケズリする。



凸面

図80 6663A(1:5)

凹面



凸面

図81 6663Cb(1:5)

凹面

第Ⅲ期

6663型式

C (77点 図版100) 第2単位文様の第2支葉と第3単位文様が左右対称ではないのが特徴。中心飾りの花頭文と左第2単位文様第2支葉の彫り直しでCa、Cbに細分できる。Cbと確認できたのは15点あり、そのほかは不明である。顎型式は曲線顎Ⅰが2点、曲線顎Ⅱが40点、型式不明が35点ある。曲線顎Ⅱの端面幅は0.4~2.0cm。

図版の例は曲線顎Ⅱで顎端面と顎部はヨコナデする。凸面は未調整で縦位の縄タキ目がのこる(図81、図版103)。瓦当側面はタテナデし、一部に布目をともなう指頭圧痕がのこる。凹面は瓦当から幅10cmほどをヨコナデし、さらに後方は横位のハケメ調整がみられる。凹面側縁は幅1.5cmほど面取りする。胎土は径3mm以下の白色砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。6663Cは曲線顎Ⅰの例(図版100)。そのほか凹面の瓦当側をケズリして瓦当側にわずかに傾斜をつける例、瓦当側をケズリ後ヨコナデする例、ヨコナデ後さらに凹面をタテナデする例がある。凹面側縁は残存する限り、すべて面取りを施す。凸面のタキ目は確認できた限り縦位のみである。

6681型式

C (1点 図版99) 中心飾りは垂下する花頭の三葉と下辺の唐草とが連続する。曲線顎Ⅱで顎部は摩滅のため調整不明。凹面はヨコケズリを施す。胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好、器表は摩滅し灰黄色を呈す。

6682型式 中心飾りが有軸三葉文で左右3回反転の唐草文、外区は珠文。Aが出土した。

A (3点 図版100) 曲線顎Ⅱで顎部はタテナデ、凹面は瓦当側を幅1.5cmほどヨコケズリし、後方は方向不定なナデ調整。胎土は径5mm以下の砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。別の1点は瓦当側面をタテケズリする。

6691型式 (2点) 中心飾りは有軸三葉形、左右4回反転の唐草文、外区は珠文。Aが出土。

A (2点 図版100) 曲線顎Ⅱ。凸面、凹面は摩滅のため調整不明である。瓦当側面はタテケズリ、凹面側縁は幅1.2cmほど面取りする。胎土は5mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、器表は摩滅し灰白色を呈すが、部分的に淡い青灰色がのこる。

6710型式 (1点) 中心飾りが逆V字形の特殊な形をしており、左右3回反転の唐草文、外区は大粒の珠文を飾る。Cが出土した。

C (1点 図版100) 顎は直線顎、摩滅のため器表の調整は不明。胎土は精良、焼成は良好、全

体に灰色を呈すが部分的に暗灰色がのこる。

6721型式 (57点) 中心飾りが「小」字形で左右に5回反転する唐草文、外区は小粒の珠文を飾る。C、D、F、G、Hが出土した。種に細分できない例が14点ある。

C (19点 図版101) 顎形態は曲線顎Ⅱ。器表が摩滅し凹凸面の調整は不明。図版以外の資料では、顎部はタテケズリかタテナデ、平瓦部凸面には斜位の縄タタキ目がのこる。瓦当面から6～10cmの位置に萱負いの朱線が残存する。側面の調整は不明。平瓦部凹面側縁は0.8～1.5cm幅で面取りする。凹面は瓦当側をヨコケズリあるいはヨコナデし、後方は未調整で布目がのこる。布端が側縁に沿って平行に走る例があり、一枚作りとわかる。胎土には径5mmほどの砂粒を含む例が多く、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

D (1点 図版100) D種は文様の彫り直しでDa、Dbの区別があるが、本例は判別できない。曲線顎Ⅱで顎部と凹面の調整は摩滅のため不明である。胎土は径8mm以下の比較的大きい白色砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

F (21点 図版101) 珠文の彫り直しによりFa、Fbに細分できる。Fbが12点、不明が9点あり、Faは確認できなかった。

瓦当上下縁には範端の痕跡がのこる例が多い。図版は曲線顎Ⅱで顎部の調整は不明、平瓦部凸面には斜位の縄タタキ目がのこる。ほかの例では顎部から平瓦部凸面にかけてタテケズリし、凸面後方に斜位の縄タタキ目がみられる。瓦当面から9～11.5cmの位置に萱負いの朱線が残存する例がある。瓦当側面はタテケズリ、平瓦部側縁を面取り、凹面は瓦当側を幅広くヨコケズリする。胎土には最大径7mm以下の白色砂粒を比較的多く含み、焼成は良好、色調は器表が摩滅して灰色、灰黄色を呈するが、部分的に暗灰色をのこす例が大半である。

G (1点 図版100) 外区周縁に界線のあるGaが出土した。曲線顎Ⅱで顎部は幅3cmほどケズリ調整。凸面は未調整で斜位の縄タタキ目が残存する。凹面はヨコケズリを施す。胎土は径5mm以下の白色砂粒をわずかに含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

H (1点 図版100) 文様の彫り直しによる細分は破片のためできなかった。顎の形態、器表の調整などは摩滅のため不明。胎土は極少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗灰色。

第Ⅳ～Ⅴ期

6732型式 (4点) 中心飾りは三葉形の左右に上巻きの唐草が囲み、上方には対葉華文がつく。左右は3回反転の唐草、外区は大粒の珠文を配す。A、C、Lが出土した。

A (1点 図版101) 曲線顎Ⅱで、顎端面の瓦当側幅0.8cmを面取りする。顎部はタテヘラナデする。平瓦部凸面もタテヘラナデするが、部分的に縦位の縄タタキ目がのこる。瓦当側面から平瓦部側面はタテケズリないしタテナデする。平瓦部凹面側縁は幅0.8cmほど面取りし、凹面は瓦当側を幅2～3cmほどヨコケズリあるいはナデ調整する。その後方は未調整。胎土は径5mm以下の砂粒をわずかに含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

C (1点 図版101) 顎は曲線顎Ⅱだが型式は不明。器表の調整も摩滅のため不明である。胎土は精良、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

L (2点 図版101) 曲線顎Ⅱで端面から顎部にかけてヨコナデを施す。瓦当側面は調整不明、凹面側縁は幅0.4cmの面取りを施す。平瓦部凹面は瓦当側を4～6cm幅でヨコケズリするが、ケズリ幅は中央が幅広く瓦当の両端に向かって狭くなる。凹面は未調整で布目がのこる。胎土は

表3 軒平瓦の出土遺構と法量

型式	遺構番号	顎型式	顎幅	全長	最大幅	図版	型式	遺構番号	顎型式	顎幅	全長	最大幅	図版
6661A		段 I L	10.0	42.2		95・102	6664F②		段 I L	6.0			98
6641C		段 I L	9.0		32.4	95	6666A	SD14112	段 I L	6.0			98・103
6641E①	SD3715	段 I L	7.5		30.5	95・102	6685A①	SD3715	段 I S	4.3			98・103
6641E②		段 I L	9.5			95	6685A②	SD3715	段 I S	4.0			98
6641E③		段 I L	8.4			102	6685B①	SD14112	段 I S	4.2			98
6641F①		段 I L	7.1			95	6685B②		段 I S	3.9			98
6641F②		段 I L	6.5			95	6685E	SK14355					98
6641F③						95	6681E①		曲 II				99
6642C①		段 I L	6.5			95	6681E②	SD3715	曲 II	1.2			99・103
6642C②	SA13770	段 I L	8.7			95	6663A		曲 I		39.2		99
6643B	SK13012	段 I L	6.0			96・102	6663B		曲				99
6643C	SK13012	段 I L	7.3		32.5	96・102	6681B		曲				99
6646C		段 I L	7.2			96	6681C		曲 II				99
6647Ca	SA13770	段 I L	6.3			96・103	6694A①						99
6647D		段 I L	8.3			96・103	6694A②						99
6644A	SD13025	段 I L	8.0			96	6663Cb	SD3715	曲 II	1.1		28.8	100・103
6654A		段 I S	5.5			96	6663C	SB13730B	曲 I				100
6664B①						97	6682A		曲 II	0.7			100
6664B②						97	6691A		曲 II	1.5			100
6664C①	SA13920	段 I L	7.6			97	6710C	SD3715	直				100
6664C②	SK13012	段 I L	7.3			97	6721C①	SK14144	曲 II	1.2		28.1	101
6664C③	SD3715	段 I L	7.1			97	6721C②	SK14440	曲 II	1.0+		28.2	101
6664C④	SK13012	段 I L	7.2			97	6721D		曲 II	1.2			100
6664H		段 I L	6.7			97	6721Fb①	SD13011	曲 II	2.0			101
6664I		段 I L	6.7			97	6721Fb②	SD13008	曲 II	1.6	40.9		101
6664L		段 I L	6.5			97	6721Ga		曲 II				100
6664N	SD3715	段 I L	6.2			97	6721H						100
6668A	SA13920	段 I L	7.2			97・103	6732A	SD3715	曲 II	1.7			101
6572C		直				98	6732C		曲				101
6572G		直				98	6732L	SD3715	曲 II	2.7			101
6664D	SD3715	段 I S				98	6801A		曲 II	1.6		30	101
6664F①		段 I S	5.5			98	6726E	SK14441	曲 II	1.8			101

*単位は cm

径 5 mmほどの砂粒を比較的多く含み、焼成は良好、色調は灰色。別の 1 点は黒灰色である。

6801型式 (1 点) 中心に「修」字を飾り左右対称に 3 単位ずつの雲文を配す。

A (1 点 図版101) 曲線顎Ⅱで顎端面はヨコナデしやや丸みを帯びる。顎部、平瓦部凸面、側面は摩滅のため調整不明。凹面側縁は0.5cm幅の面取りを施す。凹面は瓦当側を最大幅5.5cmでヨコナデするが、両端より中央ほど幅が広い。凹面は未調整で布目がのこる。胎土は径 5 mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

6726型式 (1 点) 中心飾りは三葉形と上巻きの唐草文。その左右は 3 回反転の唐草文、外区は珠文を飾る。E が出土した。

E (1 点 図版101) 曲線顎Ⅱ、器表は摩滅のため調整不明。胎土は精良で、焼成はやや軟質、色調は暗青灰色を呈す。

3-1-2-3 丸・平瓦

出土量は丸瓦8458kg、平瓦20194kgである。丸瓦、平瓦それぞれの隅数を数えて 4 で割る隅数計算法によって個体数を計算すると、丸瓦の隅数9566点 ÷ 4 = 2391点 (丸瓦個体数)、平瓦の隅数35410点 ÷ 4 = 8852点 (平瓦個体数) である。丸瓦と平瓦の比率をそれぞれの個体数によって算出すると、丸：平 = 1 : 3.7となる。ただし隅数は丸瓦の場合、軒丸瓦の狭端部の隅や玉縁の隅、平瓦の場合も軒平瓦の隅、鬘斗瓦の隅が混入している可能性があるため、丸瓦、平瓦の実際の個体数はさらに少ないと考えられる。したがって丸瓦、平瓦の個体数、丸瓦対平瓦の比率も参考数値として提示する。

3-1-2-3-1 丸瓦

丸瓦はすべて玉縁式で、行基式の瓦は確認できなかった。分類の対象は、玉縁を有し狭端部分が残る資料に限定した。第1次成形技法は粘土紐成形、粘土板成形があるが、実際にはどちらとも確定できない資料が多数ある。第2次成形技法は確認できた限り縦位の縄タタキのみであった。成形技法の段階では分類できない資料がほとんどなので、便宜的に凸面タタキ後の調整を分類基準とし、成形技法、玉縁、側縁、側面、凹面の調整などは適宜記述する。法量と出土遺構は表4にまとめた。

A ハケメ調整

成形技法で確認できたのは粘土紐成形のみで、糸切り痕など粘土板成形を示す痕跡は見あらず、成形技法不明の例が多い。縄タタキの痕跡は観察できない例もある。ハケメの原体は複数あると考えられるが、凸面の状態がわるく原体を特定することは困難であるため、ハケメ条痕の粗密により2類に大別する。ハケメ調整は条痕の連続性から回転台を利用して行われていると考えられる例もあるが、回転方向を特定できる例が少ないため、ここでは言及しない。凹面はすべて未調整で布目がのこる。

A-1 粗類 3cm四方の範囲に12~14本の条線がある。ハケメの方向から2種に細分する。

A-1-1 横位+斜位

筒部凸面広端側は横位ないし斜位、狭端側は交差するように調整する。斜位、交差の角度はいずれも浅い。ハケメ調整のみの例とハケメ調整後に部分的にナデを施す例がある。玉縁凸面はヨコナデ調整。

側面未調整 (3点 図版104) 1は側面に分割破面をのこす。側面は片側だけしか残存しておらず、片側だけ未調整の可能性もある。玉縁凹面端部と玉縁側縁のみ面取り。

両側面調整 (29点 図版104) 両側面を削り平坦に仕上げる。粘土紐成形24点と成形技法不明5点ある。

2は筒部狭端肩と連結面をヨコナデする。砂粒をほとんど含まない胎土で、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。側面を平坦に調整したのち凹面の玉縁端部と玉縁側縁、筒部側縁を面取りする。3は玉縁端部、玉縁側縁、筒部側縁を面取り、4は玉縁凸面端部も面取りする。胎土は砂粒をほとんど含まない精良な土で、焼成は堅緻あるいは良好、色調は暗灰色の例、灰色だが部分的に暗青灰色のこす例がある。

A-1-2 交差

凸面全体を襻がけ状にハケメ調整する。交差する角度は横位+斜位にくらべて深くなる。成形技法はすべて粘土紐である。

片側面未調整 (1点 図版104) 片側側面に分割破面をのこす。5は片側側面にケズリを施し平坦に仕上げる。狭端側凸面はハケメ調整後にヨコナデ、玉縁側縁のみ面取りする

両側面調整 (6点 図版104) 6は凹面の玉縁端部と側縁、筒部側縁を面取りする。胎土は砂粒が少なく、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

A-2 密類 (2点 図版104) 3cm四方の範囲に約20本の条線がある。7は玉縁と筒部に同じ原体で横位のハケメ調整をした後、筒部凸面に部分的にタテナデを加える。破片のため側面、側縁の調整は不明。精良な胎土で焼成は良好、暗青灰色を呈す。

A-3 特殊例(1点 図版104) 狭端部分は残存せず広端部のみだが、特殊な形なので取り上げた。8は両側面調整、凹面側縁を面取りする。丸瓦の曲率が小さいため、丸瓦としてつくられた後に焼成前に幅を広げたと考えられ、丸瓦とは別の用途を考えられるが、具体的な用途は不明。

B ナデ調整

縄タタキ後に凸面にナデ調整シタタキ目を擦り消す。ナデの方向により2類に大別する。

B-1 ヨコナデ

玉縁凸面もヨコナデ調整。凹面はすべて未調整である。

側面未調整(19点 図版105) 両側面に分割破面をのこす。筒部凸面には部分的に斜位、縦位のナデがみられる。狭端部径は13.7~18.0cm、厚みは1.2~2.4cmと幅がある。粘土板成形2点と成形不明14点がある。9、10は粘土板成形で、9は凹面に布の綴じ合わせ目がのこる。11は分割の切り込みが深く、広端側の側面にはほとんど破面が見られない。凸面には縄タタキ目がのこる。胎土は砂粒を微量に含む粘土で、焼成は良好、暗灰色、暗青灰色を呈す。

片側面調整(10点 図版105) すべて粘土紐成形で、粘土紐は幅4~5cm。12は玉縁凸面にヨコナデの際にできた指の凹凸がのこる。狭端部径は14.0~16.2cmの間に収まり、筒部の厚みは1.2~1.7cmある。胎土は微量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は暗青灰色あるいは灰色を呈す。

両側面調整

1) 側面調整のみ(39点)

粘土紐成形(4点 図版105) 粘土紐の幅は約5cmと約9cmがある。狭端部径は16.5~17.5cm、厚みは1.9~2.1cm。13は凸面に縦位の縄タタキ目を部分的にのこす。胎土は微量の砂粒を含むが精良で、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

粘土板成形(6点 図版105・106) 狭端部径は14.5~19.4cm、厚みは1.2~2.0cmと幅がある。14は比較的厚みがあり、凹面には糸切り痕が明瞭にのこる。15はやや細身で、凸面に縄タタキ目をわずかにのこす。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗青灰色あるいは灰色を呈すが、灰色のものは器表が摩滅している。

成形技法不明(29点) 狭端部径は13.8~15.8cm、16.5~19.4cm、厚みは1.2~2.0cmある。16はやや薄手で、径がおおきい。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好かやや軟質、色調は暗灰色あるいは器表が摩滅して灰色を呈す。

2) 玉縁凹面側縁面取(1点 図版106) 玉縁凹面の側縁のみを面取する。17は凸面にわずかに縄タタキ目がのこる。胎土には白色砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

3) 玉縁凸面側縁面取(10点 図版106) 成形技法は不明。玉縁凸面側縁を面取りする(図82)。狭端部径は14.2~16.2cm、厚みは1.7~2.2cmある。狭端部径や形態からみると、径14cm台と15cm台とに細分可能である。18は玉縁凸面端部も面取りする。凸面狭端部には縄タタキ目がのこる。胎土は精良、焼成は良好、色調は黒灰色を呈し、玉縁凸面の面

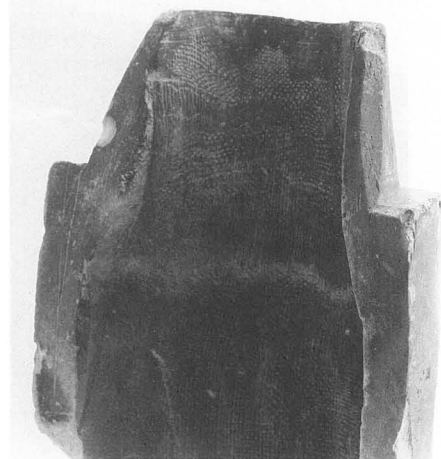


図82 玉縁凸面側縁面取

取り部分にはわずかながら光沢がある。

4) 筒部凹面側縁面取 (28点)

粘土紐成形 (7点 図版106)。側面のケズリ調整後、筒部と玉縁の凹面側縁を面取りする。粘土紐幅は4~5cm。19は筒部凹面側縁の面取り幅が広く、玉縁凹面端部や広端部凹面も面取する。凸面は縦位のタタキ後、ヨコナデ調整。玉縁凸面もヨコナデ。狭端部径は16.1~17.7cm、厚みは1.5~2.4cm。胎土は精良な例と砂粒を多く含む例があり、焼成は堅緻、色調は全体が暗青灰色の例、灰色を呈すが一部に暗青灰色の部分のをのこす例などがある。

粘土板成形 (28点 図版106・107)。筒部凸面のタタキ後にヨコナデ調整する。玉縁凸面もヨコナデ調整。狭端部径は12.8~18.5cm、厚みは1.3~2.2cmと差がおおきい。20は筒部径が小さい小型品。21は玉縁側縁の面取りが側縁の角を削り取るのにたいして、筒部側縁は側縁角から凹面にかけて平坦面をつくる。22は玉縁凹面の側縁や端部の面取り幅が広い例。23は小型で玉縁側縁の面取り幅が広い例。24は玉縁が長く凸面に斜位の縄タタキ目がのこる。25は玉縁凹面の端部、側縁、筒部凹面側縁を面取りする。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、焼成は堅緻、色調は暗灰色、暗青灰色を呈す。器表の残存具合により濃淡に差がある。

5) 筒部凸面側縁面取 (10点 図版107)

粘土紐成形 (3点) 粘土紐幅は3~5cm。26は側面をケズリ調整後、凹面側縁と筒部の凸面側縁を面取する (図83)。広端部凹面端部も面取り。面取幅には個体差がある。筒部凸面は縦位の縄タタキ後にヨコナデ調整。玉縁凸面もヨコナデ調整する。胎土はいずれも砂粒を含むがその含有量には個体差がある。焼成は堅緻、色調は暗青灰色、26は暗紫灰色を呈す。

粘土板成形 (4点) 玉縁、筒部の側面をケズリ調整後、凹面側縁、凸面側縁を面取りする。面取りの幅には差がある。27は筒部凸面を基本的にヨコナデ調整するが、一部に方向不定のナデを施す。28は狭端部凸面に段差があり、調整に使用した工具の痕跡と考えられる。玉縁凸面もヨコナデ調整。胎土に多量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗灰色、暗青灰色を呈す。

成形不明 (3点 図版107・108) 29は玉縁凹面端部もわずかに面取りする。筒部凸面側縁の面取りは幅がせまい。色調は暗青灰色。30は厚手で玉縁が長い。筒部凹面側縁の面取り幅が広い。灰色の一部に淡い暗青灰色の部分のをのこす。いずれも胎土にはほとんど砂粒を含まず、焼成は堅緻。



図83 筒部凸面側縁面取

B-2 タテナデ

筒部凸面を全面タテナデ調整する。玉縁凸面はヨコナデ、凹面は未調整。

側面未調整（5点）

粘土紐成形（1点 図版108） 粘土紐幅は4～5cm。31は筒部凸面を縦位の縄タタキ後にタテナデ調整し、その後に狭端部をヨコナデ調整する。凹面には布綴じ合わせ目がのこる。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は暗青灰色を呈す。

粘土板成形（4点 図版108） 32は凹面に粘土の合わせ目がみえる。胎土は微量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。

片面調整（2点 図版108） 33の筒部凸面は縦位の縄タタキ後にタテナデ調整するが、一部に幅2cm以上の板状工具の痕跡がある（図84）。タテナデ後に狭端部をヨコナデする。凹面には布綴じ合わせ目がある。胎土は微量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡い暗青灰色を呈す。

両側面調整（2点 図版108） すべて側縁を面取する。34は粘土紐成形で紐幅は約4cm。筒部凸面は縦位の縄タタキ後に幅2cm以上の板状工具でタテナデする。側面はケズリ調整後、凹面側縁を幅広く面取りする。胎土は緻密で、焼成は堅緻、色調は灰色を呈するが一部に淡い暗青灰色をのこす。35は紐幅5～6cm、筒部凸面には幅2cmほどの板状工具先端の痕跡がある。凹面は玉縁の端部、側縁、筒部側縁を面取りする。胎土は微量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

C 玉縁上の条線文

玉縁凸面に条線文を有する例があり、1条凹線、1条凸線、2条凸線の3類に大別できる。出土例のほとんどが玉縁のみで、筒部をとまなう例はごく少数に限られているため、条線文と筒部の成形や調整技法との関連を追究することは難しい。

1条凹線（7点 図版108）

36は断面U字形で幅1.0cmの凹線。凸面、側面の調整は不明。

1条凸線（35点 図版108）

37は横方向に幅3mm弱の凸線が1条めぐる。玉縁と筒部の凸面は摩滅しており調整は不明。

側面はケズリ調整のみで面取りはしない。

2条凸線（60点 図版108）

凸線の幅や間隔により5類に細分する。

1類（7点 図版108）

幅1～2mmほどの凸線が2条近接して施文される例。38は凸面をタテナデ調整、側面はケズリ調整のみ。

2類（5点 図版108）

幅5mm内外の凸線が2

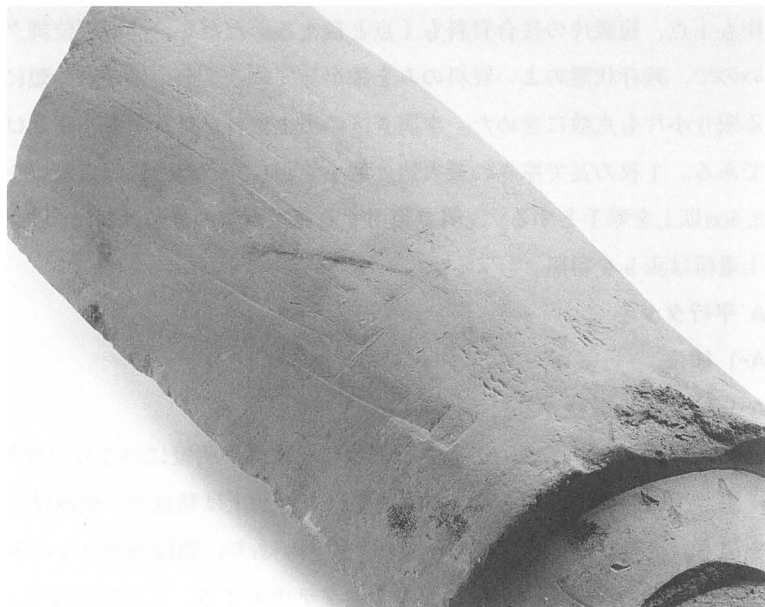


図84 板状工具によるタテナデ

表4 丸瓦の出土遺構と法量

図版	遺構番号	狭端径	広端径	全長	玉縁長	図版	遺構番号	狭端径	広端径	全長	玉縁長
104-1	SD3715	16.2			4.7	106-19	SD3715	16.2		38.1	7.2
104-2	SD3715	18.0	18.8	41.9	6.6	106-20	SD13006	12.7			3.7
104-3	SD3715	19.0			5.4	107-21		14.7			6.6
104-4	SD3715	(18.0)			6.8	106-22	SD3715	(15.0)			5.3
104-5	SD3715	(17.0)			5.6	107-23	SD13840	14.2			4.7
104-6	SD3715	16.9		38.5	6.2	107-24	SK11713	17.4			8.7
104-7	SD3715	(18.0)			5.3	107-25	SD3715	17.5			6.4
104-8		21.3	(胴部径)			107-26	SD3715	(18.0)	18.8	37.1	5.7
105-9	SD3715	15.1		31.7	4.7	107-27	SD13006			34.0	5.6
105-10		14.0			5.5	107-28	SD12495	19.7		36.4	6.6
105-11	SD3715	16.8	16.5	43.3	7.1	107-29	SD12998	18.9			6.5
105-12	SD3715	16.1			5.3	108-30		20.5			10.1
105-13	SD3715下層	17.0		38.4	6.5	108-31	SD3715	17.2			
105-14	SD13006	19.5		34.6	6.9	108-32	SD3715	15.2	(15.0)	33.4	5.6
106-15	SD13725	14.5		36.0	5.3	108-33	SD3715	15.4		36.1	5.7
106-16		19.6	(20.0)		6.3	108-34	SD13025	(17.0)		38.0	(筒部長)
106-17		17.9		40.9	5.6	108-35	SD3715	(16.0)			4.7
106-18	SD3715	15.4			6.0						

※単位はcm ()は復元径。36~42は小片のため省略。

条近接して施文される。39の凸面調整は摩滅により不明、側面はケズリ調整のみ。

3類(2点 図版108) 幅1mmの凸線で、2条の間隔は約9mm。40は凸面がヨコナデ調整、側面はケズリ調整のみ。

4類(34点 図版108) 2条の凸線のうち、下線は幅4mmほど上線が2mmほどで、両線の心心間の幅は1cmある。41の凸面は摩滅のため調整不明、側面はケズリ調整のみ。

5類(12点 図版108) 下線が幅4mmほど、上線が幅2mmほどだが、両線の間隔が1.2cmとやや広い。42は凸面がヨコナデ調整。側面調整は不明。

3-1-2-3-2 平瓦

粘土紐、粘土板、桶巻き、一枚作りといった第1次成形技法を確定できる資料は少ない。したがって、第2次成形技法である凸面タタキと凸面調整を分類の基準とし、凹面や側縁の調整は適宜記述する。第1次成形技法については確認できる場合のみ記す。各分類の出土点数は小片も1点、複数片の接合資料も1点と数える。ただし、凸面縦位縄タタキの瓦は出土比率が高いので、残存状態のよい資料のみを抽出している。そのほかの分類に属する資料は、確認できる限り小片も点数に含めた。本調査区の出土資料を見る限り、平瓦は厚みから3類に大別可能である。1枚の瓦で厚みの最大値と最小値が1.3~2.3cmに収まる例を薄手、2.0~2.7cmは中手、2.5cm以上を厚手とする。説明で使用する側縁調整の分類は図85、図版に示した資料の法量・出土遺構は表5を参照。

A 平行タタキ

A-1 横位

A-1-1 凸面未調整

凹面未調整(19点 図版109) 1は凹面に布端部が明瞭にのこり一枚作りである。凹面広端側に1辺2cm弱の突出部がある。側縁調整は3。胎土は精良で、焼成は堅緻、色調は淡い暗青灰色を呈す。このほかの資料にも一枚作りの例があり、側縁調整は1のみである。

凹面ナデ(22点 図版109) 凹面を全面タテナデする。2は側縁調整4。胎土は少量の白色砂粒

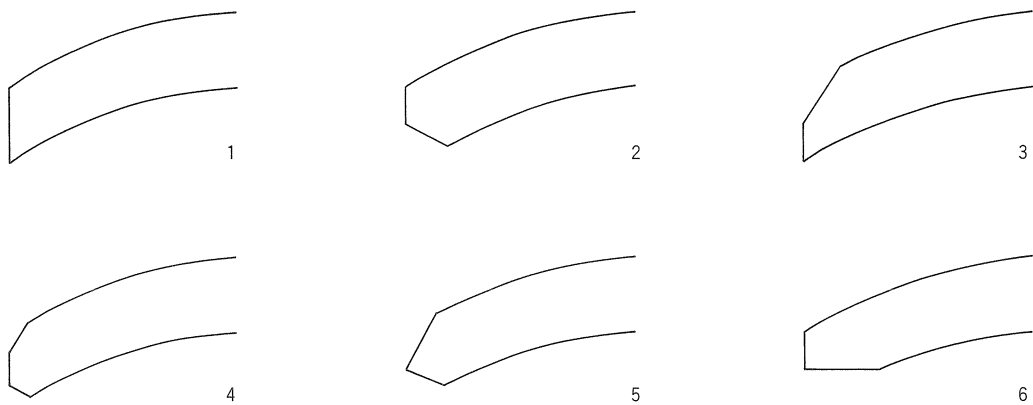


図85 平瓦の側縁調整

を含み、焼成は良好、色調は黄褐色を呈す。このほか側面調整は1～5までである。

A-1-2 凸面一部ナデ

凹面ナデ（2点 図版109） 3は凸面狭端側をヨコナデシタタキ目を擦り消す。凹面は全面タテナデ。側面調整は3。胎土は精良で、焼成は良好、色調は白色だが暗灰色部分をのこす。ほかに側面調整4の例がある。

A-1-3 凸面全面ナデ

凹面未調整（2点 図版109） 4はやや粗めのタタキ目で凸面を軽くヨコナデする。薄手で側縁調整は2。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は器表が摩滅し灰白色を呈す。

A-2 斜位

A-2-1 凸面未調整

凹面ナデ（33点 図版109） 5は凹面を全面タテナデする。中手で側縁は2。胎土は径5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。このほか側面調整は2、3、4がある。

A-3 交差

凸面未調整

凹面ナデ（9点 図版109） 6は凹面を全面タテナデし、側縁調整は1。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は器表が剥離し灰色を呈す。側面調整はほかに3、4がある。

B アミダ状タタキ

B-1 凸面未調整 原体は単一の可能性が高い。

凹面未調整（21点 図版109） 7は側縁が残存せず調整は不明。薄手で胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや軟質、色調は暗灰色を呈す。このほか薄手、中手があり、側縁調整は1、2、4、6がある。

B-2 凸面一部ナデ

凹面未調整（2点 図版109） 8は狭端側をヨコナデシタタキ目をナデ消す。側縁調整は3。砂粒を少量含む胎土で、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。

C 格子タタキ

凸面未調整 タタキの原体は数種類ある。

凹面未調整（10点 図版110） 9は目の大きいタタキで側縁調整は1。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は黒灰色。側縁調整は1、3、4がある。

凹面ナデ（6点 図版110） 10は目の細かいタタキで、凹面はタテナデする。側縁調整は3。胎土は精良で、焼成は堅緻、淡い暗青灰色を呈す。ほかに凹面に杵板痕跡を有するものがあり、側縁調整は3だがいくつか変化がある。厚みには薄手、中手がある。胎土は精良あるいは微量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は淡い暗青灰色を呈す。

D 縄タタキ

D-1 縦位

D-1-1 凸面未調整

凹面未調整（67点 図版110・111） 凹面に布端面がのこる一枚作りが比較的多い。縄の原体は数種類あり、広端や中央に指頭圧痕がみられる。凸面に離れ砂がのこる例もある。桶巻きや杵板痕跡のある例は側縁調整が1、2。そのほかは側縁調整1。厚みは薄手、中手、厚手がある。胎土は砂粒を微量あるいは少量含み、焼成は良好、色調は黒灰色あるいは明暗のこなる暗青灰色、灰色などがある。

11は粗い縄目で、側縁調整は6。胎土は少量の砂を含み、焼成は良好、色調は灰色を呈す。12は凹面中央部に指頭圧痕があり、一枚作りである。側縁調整は2。精良な胎土で、焼成は良好、灰色を呈す。13は広端側が残存するが凹面には杵板痕跡がのこり、側縁調整は1。径5mm以下の白色砂粒をやや多く含み、焼成は良好、色調は淡い暗灰色を呈す。14は凸面広端側の縄タタキ目がつぶれており、手で持った痕を粗くナデたようになっている。凹面広端側に布端面がのこり一枚作りである。側縁調整は1。15はタタキ目が細く、凸面に離れ砂がのこる。凹面広端側には瓦を持ったときの指痕がある。側縁調整は1。16は非常に細いタタキ目でその上に細かい離れ砂が付着する。また凸面の縁辺に沿って凹型成形台と思われる直線的な痕跡があり、端部には木目がみえる。側縁調整は6。17は正方形の平瓦で、側縁調整は6。胎土には砂粒を少量含み、焼成は堅緻あるいは良好、色調は灰色か暗灰色を呈す。

凹面ヨコナデ（32点 図版112・113） 一枚作りが含まれている。タタキの原体は数種類ある。厚みには薄手、中手、厚手がある。胎土は砂粒を微量または少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色、灰色に一部暗灰色がのこる例がある。側縁調整は1でわずかに3がみられる。

凹面のナデ方には広端面側をのこして凹面全体の2/3ナデと全面ナデとに分類できる。18は凸面に若干離れ砂がのこる。凹面は狭端側を全体の2/3ほどヨコナデし、側縁調整は1。19は18より厚みがあり、同様に狭端側をヨコナデ、未調整の広端側には布端がのこる。側縁調整は3。2例とも少量の砂粒を含む胎土で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

全面ナデのうち、20は凸面縄タタキ後、ハケメ調整を加える。凹面は全面ヨコナデするが、布端がのこり一枚作りとわかる。側縁調整は1。広端角を縦4.5、横11.5cm角で焼成前に割り欠く（図86）。21はやや粗めのタタキで側縁調整2、焼成は堅緻で黒灰色を呈す。22は凸面広端側を粗くナデ、全体に離れ砂がのこる。凹面はヨコナデ、側縁調整は1。全体に厚みがあり、焼成は堅緻、灰色を呈す。そのほか側縁調整はほとんど1で、3が1点だけある。

凹面タテナデ（24点 図版113） タタキ原体には数種類ある。厚みは薄手、中手、厚手に大別できる。側縁調整は基本的に1で、2が1点ある。また凸面の側縁に直線的な段差があり凹形面の痕跡と考えられる。このほか少数だが凹面側縁と端部を面取りする例がある。23は厚手で、凹面全面タテナデ、側縁調整は1、少量の砂粒を含む胎土で、焼成は良好、色調は黒灰色を呈

す。

凹面ハケメ（3点 図版114） 凸面タタキの原体、凹面ハケメの原体は数種類ある。24は縦位のハケメで、側縁調整は2、胎土には砂粒を少量含み、焼成は堅緻あるいは良好、色調は暗灰色である。

D-1-2 凸面一部ナデ

凸面の狭端側を部分的にナデ調整する例。凹面の調整によって3類に細分できる。

凹面未調整（3点 図版114） 凸面狭端側を1/3ほどヨコナデする。中手、厚手があり、側面調整は1と2がある。25は凹面に一部粗いナデがみられるが、布目がのこる。側縁調整は1。胎土は微量の砂粒あるいは砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は灰色を呈す。

凹面ナデ（3点 図版114） 縄タタキの原体は同一かとおもわれる。凸面のナデ部位は全長の1/3ほどを占める。26は縄タタキとナデ部位の境界に刻線を引き狭端側1/3をヨコナデする。凹面は全面ヨコナデ、側縁調整は1。砂粒を微量に含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。27は凸面狭端側を1/2ヨコナデし、凹面は全面ヨコナデ、側縁調整は不明。胎土は精良、焼成は良好、部分的に暗青灰色を残す。厚みには薄手、中手と厚手がある。側縁は1のみ。

凹面縄タタキ（7点 図版115） 28はかなり厚みがあり、凸面は狭端側を1/3ほどをヨコナデする。凹面は布目の上に間隔をあけた縄目が縦位、横位あるいは交差する形で見られる。側縁調整は1。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。ほかの資料も厚手で側縁調整は1のみである。

D-1-3 凸面全面ナデ

凹面未調整（15点 図版115） 粘土紐で枳板痕跡をのこし桶巻き作りとわかる例がある。厚みは薄手、中手、厚手がある。29は凹面に粘土紐の接合線と枳板痕跡がある。側縁調整は6。胎土は砂粒を少量含み、焼成は堅緻、暗灰色を呈す。側縁調整は1で凹面は未調整。胎土は精良あるいは砂粒を多く含み、焼成も堅緻、良好と差があり、暗灰色、暗青灰色を呈す。

D-1-4 凸面一部ハケメ

凹面未調整（3点 図版115・116） 端部を幅5cmほどヨコハケ調整するもの、全体の1/3、2/3ほどハケメ調整する例がある。30は凸面狭端側を幅5cmほどハケメ調整する。側面調整は1

で、胎土に砂粒はほとんど含まず、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。31は凸面狭端側1/3ほどをハケメ調整する。側縁調整は1。胎土や焼成は30と同様、色調は暗灰色を呈す。32は凸面

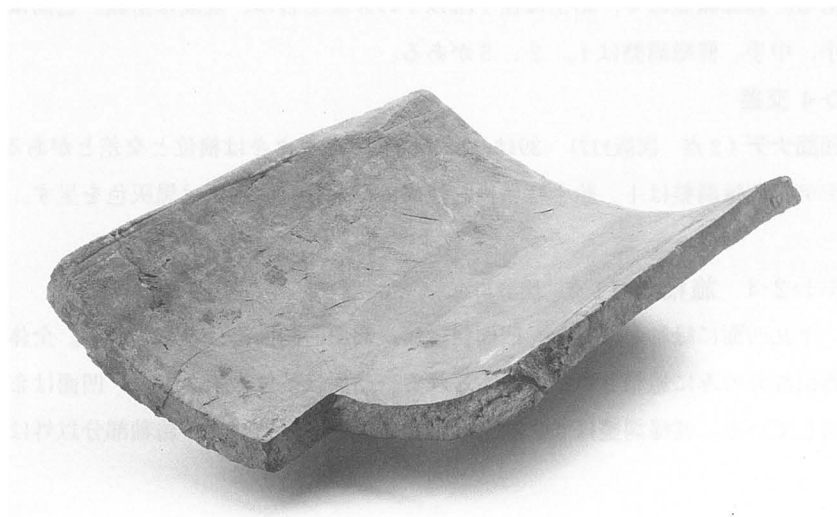


図86 広端角割り欠き

のハケメ調整が弱く縄タタキ目がのこる。また調整の範囲も狭端側、広端側にもおよび、広端側に重点が置かれているようである。側縁調整は6。砂粒を少量含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色を呈す。

D-1-5 凸面全面ハケメ

凹面未調整 (48点 図版116) 33は横位と交差するハケメ調整をおこなう。凹面には杵板痕跡がのこる。側縁調整は不明。少量の砂粒を含む胎土で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。34のハケメは3cm四方に20~24条ある密なハケメで、凸面側辺側には直線的な段差があり、凹型成形台の痕跡とおもわれる。凹面には粘土紐の痕跡がある。側縁調整は1。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。

D-1-6 指ナデ施文 (1点 図版116)

35はタタキ後に指頭で凸面を斜位にナデ、その凹線を交差させ文様風にする。凹面は未調整で、凹面には幅4cm前後の粘土紐の接合痕跡があり、杵板の痕跡がのこる。側縁調整は6。少量の白色砂粒を含み、焼成は良好、色調は全体に灰色だが一部に暗灰色をのこす。

D-1-7 板ナデ (1点 図版117)

36は凸面を幅4cmほどの板状工具で縦位にナデ調整し、板目の痕が明瞭にのこる。凹面は未調整。側面に破面があることから桶巻き作りである。側縁調整は1。胎土には少量の砂粒、焼成は良好、色は暗青灰色を呈す。

D-2 横位

凹面未調整 (63点 図版117) 一部に布端が認められ一枚作りの例がある。タタキ原体は数種類ある。厚みは薄手、中手、側縁調整は1がほとんどだが、側縁調整2と5がわずかにある。37は凹面の側縁側に布端がのこる。凹面に部分的にハケメを施す。側縁調整は不明。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は灰白色を呈す。

凹面ナデ (10点) タタキ原体も複数ある。側縁調整は2で、凹面は全面ヨコナデ調整する。胎土は精良か砂粒を少量含み、焼成はやや軟質なものが多い。色調は暗灰色である。

D-3 斜位

凹面未調整 (20点 図版117) 38の凸面は比較的細いタタキ目で未調整。凹面には杵板の痕跡がある。側縁調整は4、胎土は径1cm以下の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は暗灰色。厚みは薄手、中手。側縁調整は1、2、5がある。

D-4 交差

凹面ナデ (2点 図版117) 39は凸面未調整で縄タタキは横位と交差とがある。凹面は全面ヨコナデ、側縁調整は1。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は黒灰色を呈す。

3-1-2-4 施釉瓦 (1点 図87)

平瓦凹面に緑釉が残存し、凹面側縁側、側面、凸面にはみられない。全体の観察から凹面の露出部分のみに施釉されたと考えられる。凸面は縦位の縄タタキ、凹面は布目を部分的にナデ消している。側縁調整は6。胎土は精良で、焼成は良好で、施釉部分以外は淡褐灰色を呈す。

表5 平瓦の出土遺構と法量

番号	遺構番号	狭端幅	広端幅	全長	最大厚	最小厚	番号	遺構番号	狭端幅	広端幅	全長	最大厚	最小厚
109-1					2.4	2.1	113-21	SD3715	23.2		34.6	2.1	2.0
109-2					2.2	2.1	113-22			26.0		2.8	2.4
109-3	SD12998				1.7	1.5	113-23	SD3715	27.2	31.4	37.5	3.1	2.1
109-4	SD13840	23.2			1.7	1.3	114-24					2.1	1.9
109-5					2.2	2.1	114-25	SD3715				2.9	2.6
109-6					2.5	2.1	114-26	SD3715		27.6		2.2	1.8
109-7	SX13930				2.2	1.9	114-27				36.9	2.4	2.3
109-8	SD3715				2.1	2.0	115-28	SD3715	25.3	25.3	35.1	3.1	3.1
110-9					2.8	2.5	115-29	SD3715	24.1		36.4	1.8	1.3
110-10	SD3715				3.1	2.4	115-30					2.7	2.2
110-11		22.0		32.0	1.9	1.6	115-31	SD3715	29.6				1.9
110-12	SD13006	20.2		33.4	2.2	1.7	116-32	SD3715	26.0	30.3	38.3	2.4	1.8
110-13			29.7		2.4	1.8	116-33	SD3715				1.9	1.7
111-14	SD3715			33.8	2.9	1.6	116-34					2.4	2.1
111-15			25.7	33.8	2.5	1.9	116-35					2.1	1.8
111-16				33.0	1.8	1.4	117-36						2.0
111-17		24.1		24.2	2.7	1.8	117-37	SD3715		25.7 +	34.6	2.8	2.6
112-18	SD3715	22.0		35.9	2.2	1.3	117-38	SD3715				3.0	2.5
112-19	SD3715		28.5	36.2		2.3	117-39					2.5	2.4
112-20	SD3715	25.0		32.2	2.1	1.8							

※単位は cm

3-1-2-5 文字瓦

ヘラ書き瓦 (図版118)

総数9点、うち丸瓦4点、平瓦4点、熨斗瓦1点である。いずれも焼成前に先端の尖ったヘラ状工具で書き付けている。

1は熨斗瓦の凸面に刻まれている。調整などの詳細は熨斗瓦の項で記述する。2は平瓦端面に刻まれた二重の弧線。凸面は粗い縦位の縄タタキ目、凹面は未調整、側縁調整は1。中手の平瓦である。灰白色を呈す。SD3715出土。3は丸瓦凸面に少なくとも4文字みとめられる。

「廿人女□」か。凸面は縦位の縄タタキ後にヨコナデ調整する。凹面は未調整、側面は平坦に仕上げる。暗灰色。4は丸瓦で玉縁凸面右よりに「米」と「十」字に近い符号があり、筒部凸面右よりに「十」字形の符号がある。玉縁凸面はヨコナデ、筒部凹面は縦位の縄タタキ後、狭端部側をヨコナデ調整する。凹面は未調整。黒灰色を呈す。

5～9は「十」字形を記す。計5点、内訳は丸瓦2点、平瓦3点である。5、6、9は平瓦で、すべて凹面に記す。5は器表が摩滅しているが厚手の瓦で、6は凸面が摩滅していて調整不明。9の凸面は縦位の縄タタキ後全面をナデ調整する。凹面は未調整で側面調整は1。暗灰色を呈す。7、8は丸瓦で、17はナデ調整された凸面に符号がある。8は未調整の凹面に記す。A13020の柱抜取穴出土。

刻印瓦 (図版119)

刻印の分類は『基準資料V 瓦編5』³⁾に従い、その後の新形式については山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」⁴⁾によって補足する。

「行」(1点) 1は分類aで平瓦端面に刻印。調整などは不明。

「修」(2点) 2は分類aで丸瓦凸面狭端部近くに刻印される。暗灰色で、側面は平坦に調整する。SD13742出土。

「矢」(1点) 3は平瓦端面に刻印。分類cに近いが印の輪郭と字の間隔に違いがあり、新分類



図87 施釉瓦(凹面)

の可能性もある。暗灰色で焼成は堅緻。

「王」(2点) 4は丸瓦広端面に刻印、字画の太い分類 a に当たる。調整は不明、色調は黒灰色。5は平瓦端面に刻印。字画の細い分類 b にあたり、淡い暗灰色を呈す。

「田」(2点) 2点とも分類 a である。6は平瓦端面に刻印。凸面は縦位の縄タタキ、黒灰色。もう1点は丸瓦広端面に刻印。暗灰色を呈す。

「伊」(1点) 分類 a。7は平瓦端面に刻印、暗灰色。調整は不明。

「井」(2点) 分類 a。8は平瓦凹面に刻印。調整などは不明。別の1点は丸瓦凸面に刻印。

「目」(3点) 1点は丸瓦広端面、2点は平瓦端面に刻印する。いずれも字画のしっかりした分類 b にあたる。9は平瓦で、調整などは不明。

「里」(2点) 分類 a、2点とも平瓦の端面に刻印。10は凸面縦位の縄タタキ、凹面は未調整、側縁調整 1。色調は側面と側縁のみ青灰色で凸面、凹面は灰色、焼成も堅緻である。

3-1-2-6 道具瓦

3-1-2-6-1 鬼瓦 (図版120)

分類は毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」に従⁵⁾う。

I A (2点) 左半分が残存。眉間には方形の釘穴がある。胴部中央にも方形釘穴の左内面が残存する。側面と外縁、下端面、削り面はヨコナデ、裏面はタテケズりする。高さ37.2cm、胎土は精良、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。別の1点は裏面がすべて剥離し、外縁もほとんど残存しない。包含層出土。

II A 2 (4点) 完形品で高さ40.3cm、幅43.1cm、削り高さ8.3cm、削り幅18.4cm。額の中央には直径1.3cmの円形釘穴がある。脚部下端には幅2.5cmほどの無文部分があり、文様部分との間に縦にはしる数条の範傷らしき条線がみえる。右脚部無紋部分の右隅には脚下端に平行する明確な段差があり、ここにも範傷が数条縦にはいる。外縁内側下端と文様部平坦面との間にはわずかな隙間があることから、範詰めの際にまず外縁部分の粘土を詰め、その後に平坦部分の粘土を貼り足したことがわかる。側面頂部には稜線があり、稜の右側には幅1cmほどの範端痕跡がのこる。側面はケズリ調整し、頂部をのぞく外縁外側は幅1.5~2.0cmほど面取りする(図版120)。削り面は横方向の調整を施す。胎土は径5mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。SB13740の礎石据付掘形から出土した。

II B 1 (10点) 右半部が残存し文様の残りもよい。高さ26.2cm、削り高さ8.2cm、厚み4.0cmと全体に小型の鬼瓦である。外縁は圏線のみで突出しない。眉間に円形の釘穴痕跡がある。裏面はすべて剥離し、器表、側面も摩滅のため調整は不明。径1cm以下の砂粒を多量に含む胎土で、焼成は良好、色調は淡い暗灰色を呈す。SD13005出土。別の1点は眉間の円形釘穴がよくのこり径1.4cmある。側面は裏面に向かって内傾するため、鬼瓦の幅は器表より裏面のほうがやや狭い。器表は摩滅のため調整は不明。色調は黒灰色を呈す。SD13725出土。

IV A (2点) 前歯の右半部と上下牙の先端部が残存している。鼻の中央にある方形釘穴の一部や削りの上部湾曲面の一部も残存している。裏面は剥離し、器表もすべて摩滅しているため調整は不明。胎土は精良で、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。

無文(3点) 無文1は表裏とも無文で、最大厚3.9cmの平坦な板状を呈す。本体中央部に1辺

3.0cm四方の方形釘穴があり、下方には明確な削りが見られる。脚下端幅は6.7cmある。器表は摩滅のため調整不明。胎土には径5mm以下の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は淡茶灰色を呈すが、破面にみえる胎土部分は黒灰色を呈す。同一型式と思われる破片がもう1点出土している。

無文2は脚部のみ残存する。脚部下端に幅1cm前後の突帯があるが、これが鬼の外縁かどうかは判断できない。脚部内側には削り方の曲線部分がのこる。裏面は剥離しているが、無文1より厚みがある。器表は摩滅し調整は不明。精良な胎土で、暗灰色を呈す。

3-1-2-6-2 隅切平瓦 (13点 図版121)

いずれも小片で、隅切部が狭端側か広端側かは不明。隅切部は直線的に切り落とすものと内湾状を呈する例がある。凸面は縦位の縄タタキ目がのこり、凹面は未調整かナデ調整する。色調は黄褐色、灰色、暗灰色がある。SB13740の礎石抜取穴から1点、SD3715から4点出土した。

3-1-2-6-3 熨斗瓦 (5点 図版121)

熨斗は平瓦状の瓦を所要の幅に裁断して製品を得るが、半裁の方法により3種に分類する。焼成前に裁断し裁断面を丁寧にととのえる切熨斗、平瓦に切り込みを入れてから割る切割熨斗、焼成後直接割る割熨斗がある。このうち切熨斗は切割熨斗の方法で分割したのち側面を調整した場合も含まれる。また熨斗は破片になると本来平瓦であったのか、熨斗であったのかが判断しにくい。実際は平瓦の破片中に熨斗が混入していることを考慮する必要がある。

切熨斗 2点出土した。1は端部幅10.3cmあり、最大厚1.7cmと薄手である。凸面は縦位の縄タタキの後、端部側を5cmほどナデ調整する。凹面は摩滅しており調整不明。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好、色調は黒灰色を呈す。別の1点は幅14.0cm、最大厚2.0ある

切割熨斗 2は狭端幅14.7cm、最大厚2.5cmの中手である。凸面は縦位の縄タタキ後にヨコナデを施す。凹面は未調整で布目と杵板痕跡がのこる。側面調整は1。胎土は精良、焼成は堅緻、色調は黒灰色を呈す。側面の破面にも暗灰色が見られることから、焼成前に割っていることがわかる。また凸面にはヘラ書きがある(図版118-1)。

切り込みを入れたまま分割せずに焼成した破片がある。凹面にある切り込みは深さ7mmある。胎土は精良、焼成は堅緻で、黒灰色を呈す。SD3715から出土。

割熨斗 3は全長32.0cm、広端部13.6cm、狭端部10.9cm、最大厚1.8cmある。凸面は縦位の粗い縄タタキで、広端面側に指頭圧痕がのこる。凹面は未調整で広端縁と側縁に布端部の痕跡があることから一枚作りの平瓦を分割したと考えられる。

3-1-2-6-4 面戸瓦 (12点 図版121)

かぶせ面戸と舌部のみ例がある。鯉面戸(登り面戸)と確認できる例はない。

かぶせ面戸 (6点) 舌部と胴部からなる逆凸形の面戸で、丸瓦に覆い被さる湾曲部分が特徴である。1と3は胴部のみ残存し、左側端は丸瓦の狭端部を利用している。玉縁をケズリ落とした後、舌部に向かう湾曲部分を削り、凹面側を面取りする。凸面は摩滅して調整不明、凹面は未調整で布目がのこる。面戸瓦の上縁は丸瓦の側面をそのまま利用し、丸瓦分割の際の破面と裁面がのこる。胎土は5mm以下の砂粒を少量含み、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈す。ほか4点は湾曲部のみでいずれも凹面側を面取りする。

舌部のみ (6点) 2、4、5、6は凹面側をすべて面取りする。胎土は少量の微細な砂粒を含み、焼成は良好、色調は暗灰色、灰色を呈す。

3-1-2-6-5 隅木蓋瓦 (1点 図版122)

分類は千田剛道「平城宮の隅木蓋瓦」に従う⁶⁾。

B型式 前方部分が残存しており幅37.1cmある。上面の中軸線上には稜線がとおり、その稜線上に約1cm四方の方形釘穴がある。釘穴後方には燕尾状の削りの一部が残存する。釘穴の周囲には穴を囲むように菱形の突帯があり、燕尾状削りの縁には幅1.3cmほどの突帯をつくる。前面、側面は無紋。下面には前辺側幅7cm、側辺側幅6cmで高さ1cmほどの突帯を作り出し、その中央に幅1cm前後の水切り溝を巡らす。器表は摩滅しており調整は不明。胎土は径5mm以下の暗灰色の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗灰色を呈す。SX13727出土。

3-1-2-6-6 磚 (図版122)

出土総重量は147kg。完形品は2点のみで、ほかはすべて破片である。破片のうち長さ、幅、厚みのいずれかがわかるもののみを分析対象とした(17点)。この結果、幅と厚みから5類に大別が可能である(図88)。1類幅12cm台、2類15~17cm台、3類20cm、4類22cm前後、5類22cm台である。2類に完形品があり長さが31.0と31.1cmある。2類は幅に約2cmの差があるが、点数が多いことと、厚みの差が1cmほどに収まるため一括した。4類と5類は幅に差がほとんどないが、厚みに2cm以上の差があることから分類した。

破片の断面をみると、任意の大きさの粘土塊を何度か重ね併せて成形している。器表は丁寧になで調整する。胎土は精良なもの、少量の砂粒を含むものがある。特に3類と4類は精良な粘土を用いている。焼成は良好で、堅緻な例が少数ある。色調は3類は暗青灰色、4類は黒灰色、そのほかは暗灰色、暗青灰色を呈す。

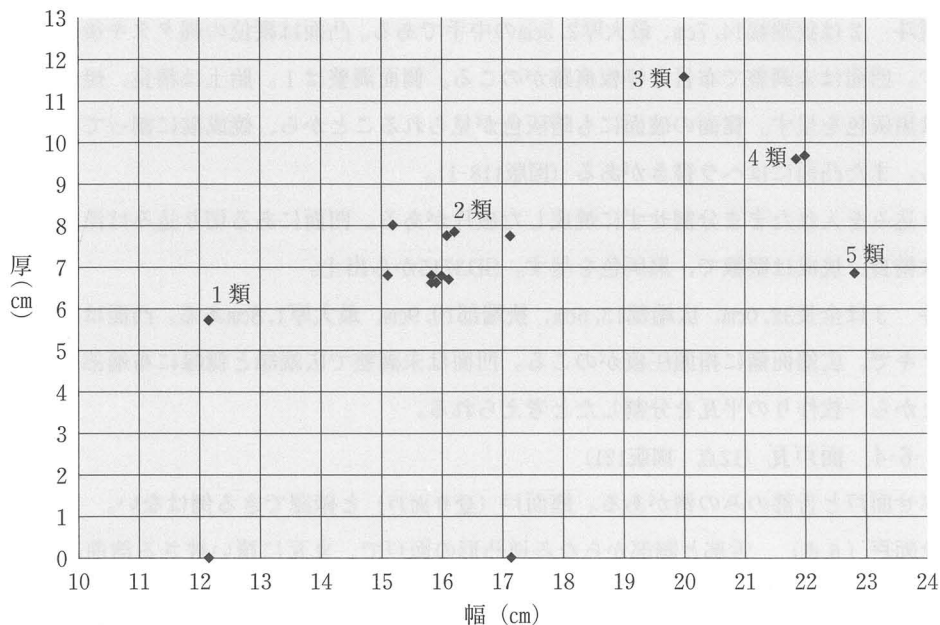


図88 磚の法量散布図

- | | |
|---|--|
| <p>1) 奈良国立文化財研究所1991「第VI章考察1屋瓦」『平城宮跡発掘調査報告XIII 奈良国立文化財研究所学報第50冊』。年代観はp196注2</p> <p>2) 点数は破片も1点、複数の破片が接合した資料も1点で計算した。</p> <p>3) 奈良国立文化財研究所1977『奈良国立文化財研究所基準資料V 瓦編5』。</p> | <p>4) 山崎信二2002「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢III』。</p> <p>5) 毛利光俊彦1980「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」『研究論集VI 奈良国立文化財研究所学報第38冊』。</p> <p>6) 千田剛道「平城宮の隅木蓋瓦」1999『奈良国立文化財研究所年報1999-I』。</p> |
|---|--|

3-1-3 土器類

調査区全域から、弥生時代から近世にいたる各時代の土器類が出土した。奈良時代の遺構でとくに土器が多数出土したのは基幹排水路SD3715である。また、平城宮造営以前の弥生時代や古墳時代の遺構からも、各時代の土器が出土している。とくに竪穴住居などから出土した弥生時代前期新段階の土器や、井戸から出土した古墳時代中期の古式土師器類は良好な一括資料である。遺物包含層から出土した土器は、全体的に奈良時代のものが多いが、古墳時代の土器は調査区の西寄りに、弥生時代の土器は東寄りに多い傾向にある。ここでは奈良時代の土器類を報告し、平城宮造営以前のものは3-2で報告する。

出土土器類
の時期

3-1-3-1 土器(土師器・須恵器)

奈良時代の土器の器種名称および年代は、基本的に既刊の『平城宮報告』に従う。平城宮の土器の大別と略年代については、その後の遺物整理の成果を経て、変更を加えたものを表8にまとめた¹⁾。また、奈良時代の土師器、須恵器の器種分類および器種名については、これまでの報告書による分類を整理し、図89・90にまとめたので参照されたい。

記述の凡例

土師器供膳具の調整方法は、これまでの報告でも記号化がはかられてきた。ナデおよびヘラケズリによる調整と、ヘラミガキによる器表面の調整の有無を記号化し、組み合わせて土師器

調整手法

- ・ a 手法-口縁部外面をヨコナデし、底部は未調整のもの。
- ・ b 手法-口縁部外面をヨコナデし、底部はヘラケズリで調整するもの。
- ・ c 手法-口縁部以下の外面全体をヘラケズリするもの。
- ・ e 手法-口縁部以下を幅狭くヨコナデし、それより下は未調整のもの。
e 手法のように口縁部以下を幅狭くヨコナデした後、外面全体をヘラケズリするが、外反する部分にはヘラケズリが及ばないものを、e-c手法とする。

土師器の
調整手法

器表面の調整手法

- ・ 0 手法-ミガキ調整を施さないもの。
- ・ 1 手法-口縁部のみミガキを加えるもの。
- ・ 2 手法-底部のみミガキを加えるもの。
- ・ 3 手法-口縁部から底部にかけてミガキ調整を施すもの。

土師器の群別：土師器は胎土により2群に分類する。

- ・ I 群-淡灰橙色を呈し、胎土にほとんど砂粒を含まないもの。
- ・ II 群-灰褐色から暗赤褐色を呈し、胎土の微細な砂粒を含む。

土師器の
群別

須恵器の群別：須恵器は胎土により6群に分類する。

- ・ I 群-青灰色から淡灰色を呈し、黒色や白色の微細な粒子を含む。
- ・ II 群-黒色粒子を比較的多く含み、ナデやケズリによって黒色粒子が墨を流したように軌跡を帯びる。
- ・ III 群-花崗岩の母石に近い粘土を用い、焼成が堅緻なもの。
- ・ IV 群-大粒の長石や微細な白色砂粒を含む。
- ・ V 群-やや砂質の胎土で、微細な黒色粒子を含み、橙色から赤みを帯びた暗褐色を呈する。
- ・ VI 群-明灰色を呈し、比較的焼き締まりが悪く、表面がざらざらする。

須恵器の
群別

表6 土師器 器種分類表

器種名	番号	器種説明	備考
杯A	1	広く平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚するものが多く、丸くおさまるものもある。	
杯B	3	杯Aに高台を付したもので、蓋を伴う。	
杯B蓋	2	ボタン状のつまみが付く平坦な頂部となだらかに彎曲する縁部からなる。	II, IV, VI—蓋A
杯C	4	小さな平底ないし丸底と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁端部が内傾するのが特徴である。 aないしb手法を基本とする。	II, VI—皿A
杯E	5	金属器を模倣したもので、平底で口縁部が内彎する器形。表面を丁寧に磨くものが多い。把手を持つものもある。	
杯F	6	杯Eに高台を付したもの。	
皿A	7	広く平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部からなる。奈良時代後半はc手法が主体的になる。	
皿B	9	皿Aに高台を付したもので、蓋を伴う。	
皿B蓋	8	平らな頂部となだらかに彎曲する縁部からなり、奈良時代全期を通じて外面にはヘラミガキがみられる。	II, IV, VI—蓋A
皿C	10	手づくねの小型(口径10cm未満・器高2cm未満)の皿で、厚手である。e手法で調整され、口縁部上部が外反するものとしらないものがある。灯火器の痕跡をもつものが多い。	II—蓋B, IV—皿A
椀A	11	丸底に近い小さな平底と内彎する弧を描いて、斜め上に大きく開く口縁部からなり、底部から口縁部の立ち上がりは緩やかである。	
椀C	12	丸底に近い平底から屈曲しながら外反し、口縁部が立ち上がり、端部近くで小さく外反する。e手法を特徴とし、口縁部のよこなで以下には成形時の凹凸をとどめ、外面に粘土紐の痕跡を残すものが多い。	
椀D	13	椀Aをやや浅くした形態で、口縁端部が丸くおわるものと、内傾するものがある。椀Cと同様にe手法を特徴とする。	VI—鉢C
壺A	15	高台を付した平底と肩の張った胴部と直立する短い口縁部からなる。上方に強く折り曲げた三角形把手を肩部に付す。いわゆる壺蓋形。	
壺A蓋	14	ボタン状あるいは扁平板状のつまみをもち、平坦な頂部から外方に開き気味に折れる縁部からなる。壺Aの蓋。	II・VI—蓋B
壺B	16	平底に近い丸底と球形に近い胴部と外反する短い口縁部からなる広口の壺。肩部付近に上きの把手ないしボタン状をした粘土を貼付ける例もある。胴部はハケ目調整を施さず、粘土紐の痕跡を残すものが多い。人面が墨書された例も多い。	VI—鉢C(SD650) VI—小型壺(SD485)
壺D	17	蓋受けのような短い口縁部と丸く膨らむ胴部をもつ広口の壺。	
壺E	18	蓋受けのような短い口縁部と直線的に広がる胴部をもつ広口の小型壺。	II, IV, VI—蓋B
鉢A	19	丸底ないし尖底に近い丸底から内彎ぎみに開く口縁部が端部近くで内傾する。いわゆる鉄鉢形。	
鉢B	20	平底に近い底部と、外傾ないし直立する口縁部からなる。口縁端部が内側にかかる巻き込むものと内傾するものがある。	VI—鉢A
鉢C	21	鉢Bに高台を付したもの。	
鉢E	22	底部は平底に近い丸底で、口縁部を一部残し、他の部分はヘラケズリする。口縁部上端がやや外傾する。粗製で厚手のものが多い。	
高杯A	23	ラッパ状に開く裾部と、ヘラで多面体に面取りした脚部に大きく外に開く浅い杯部を付す。脚部と杯部の接合法には、杯部外面に直接粘土紐巻き上げないし輪積みにより脚部を作る方法(円筒手法)と、芯棒の上に粘土紐を巻き上げて脚部を作る方法(芯棒接合法)がある。	
高杯B	24	口縁部が内彎する杯部と面取りのない脚部からなる。奈良時代前半で姿を消す。	
盤A	25	平たい底部と斜め上に大きく開く口縁部からなる。体部に把手がつくものもある。	
盤B	26	盤Aに高台をつけたもの。Aと同じく体部に把手がつくものもある。	
大型蓋	27	深い笠形の大型土器で、頂部に半環状の把手をつけ、把手の主軸に直交する二方向の頂部中央からやや下がったところに円孔をあける。把手付双孔大型蓋。火舎あるいは盤の蓋か。	
甕A	28	半球に近い胴部とつよく外反する口縁部からなる広口の甕。	
甕B	29	甕Aとほぼ同じ形態で、相対する二方の肩に把手を付したものの。	
甕C	30	頭部でややすばまる長手丸底の器体に斜め上にひらく口縁部をつける。	
鍋A	32	半球形に近い体部に外傾する口縁部がつくもの。	
鍋B	33	鍋Aの体部の両側に把手を付すもの。	
甌	31	底部のすばまった円筒形の体部の両側に把手のつくもので底を大きく開ける。	
甗	34	截頭砲弾形の側面を大きく切り取り、その切開部の周辺に底をつける移動式の甗。	

*本報告書における土器の器種呼称は、基本的に『平城VII』、『平城XIII』、『学報54』に従う。既刊の報告書と呼称がことなるものは備考欄に掲げた。ローマ数字は『平城宮発掘調査報告』の号数である。

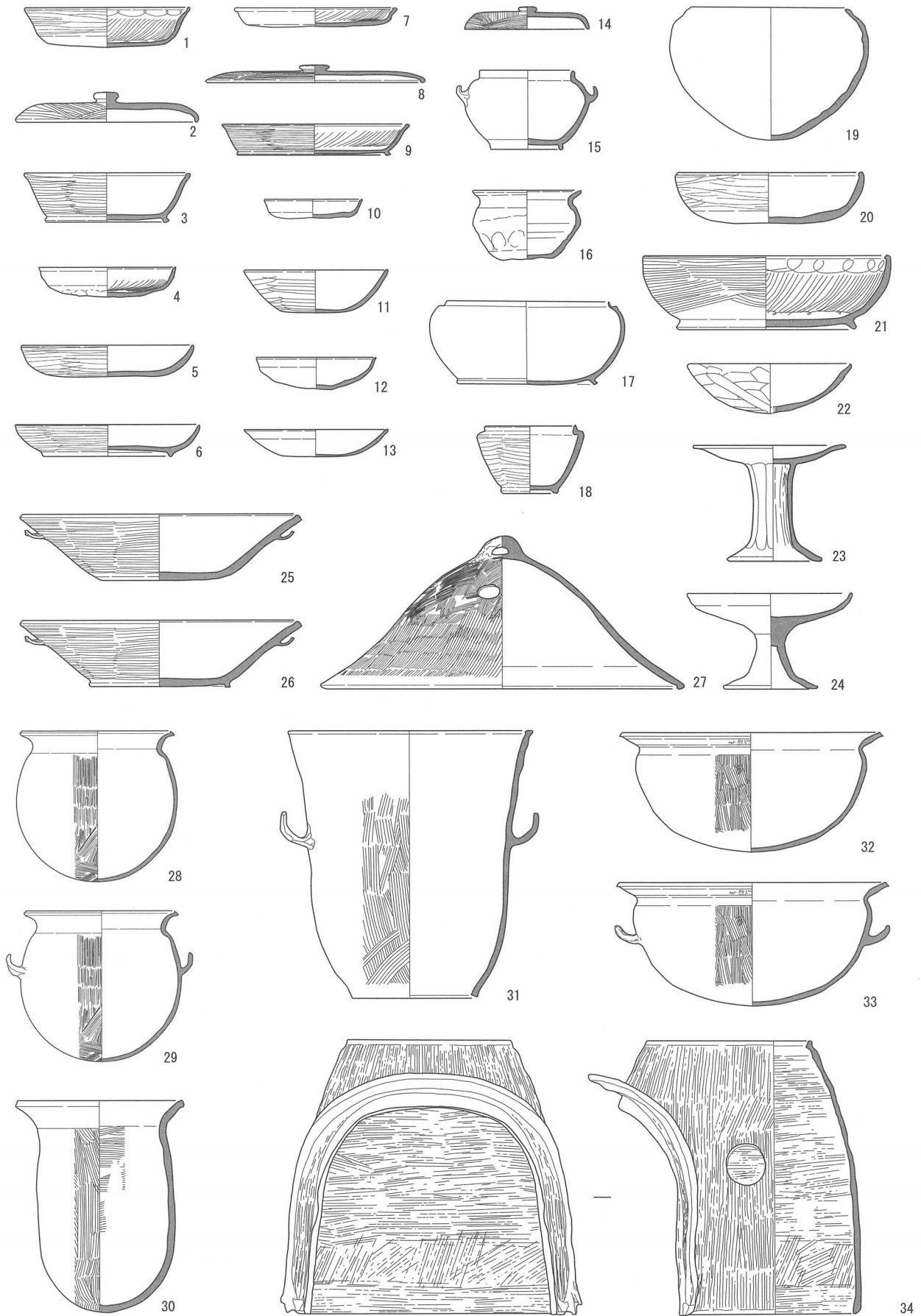


図89 土師器の器種

表7 須恵器 器種分類表

器種名	番号	器種説明	備考
杯A	1	平坦な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。	
杯B	3	杯Aに高台を付した形態をそなえ、蓋を伴う。	
杯B蓋	2	杯Bに伴う蓋。頂部が平らで縁部が屈曲するものや、頂部が丸く笠形を呈するものがある。	II一蓋A・B・C IV, VI一蓋A
杯C	4	土師器杯Aに類する形態で、平底と斜め上に開く口縁部からなり、口縁端部は内側に巻き込む。	
杯E	5	銅椀に類する形態で、平底と内彎する口縁部をもち、口縁端部は内傾する。	VI一椀A
杯F	6	磁器ないし金属器に類する形態で、底部から口縁部の立ち上がりは緩やかで、端部は外反する。	
杯L	7	佐波理稜椀に類する形態で、体部に稜をもち、口縁端部は外反する。	
皿A	8	扁平な底部に短い口縁部をそなえた形態で、口縁端部は丸くおさまる。	
皿B	10	皿Aに高台を付した形態をそなえ、蓋を伴う。	
皿B蓋	9	皿Bに伴う蓋。頂部が平らで縁部が屈曲するものや、頂部が丸く笠形を呈するものがある。	II一蓋A・B VI一蓋B(SD485)
皿C	11	広く平らな底部と斜め上にひろく短い口縁部からなる。口縁端部は平坦で外傾するものもある。	
皿D	12	皿Cに高台を付した形態をそなえる。	
皿E	13	平底と斜め上に開く短い口縁部からなる小型の皿。口縁端部は外に薄く引き出される。灯火器。	
椀A	14	平坦な底部と、ほぼ真直ぐに立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。	VI一杯A
椀B	15	椀Aに高台を付した形態。	
椀C	16	杯Eに高台を付した形態。	VI一椀B
鉢A	17	いわゆる鉄鉢形。内彎しながら立ち上がる口縁部と尖底ないし丸みを帯びた平底からなる。	II一鉢A
鉢D	18	外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。高台を付す例もある。	
鉢E	19	平底で、長い口縁部がまっすぐに立ち上がるバケツ状の形態。	II一鉢C
鉢F	20	円盤状を呈す底部と斜め上に開く口縁部からなる。底部外面には焼成前に工具で刺突した多数の穴をもつ例が多い。口縁部の一部が片口になる例もある。	II一鉢A・摺鉢
高杯	21	ラッパ状に開く脚柱部と外反する口縁部をもつ平坦な杯部からなる。	
盤A	22	平底から直線的に立ち上がる長い口縁部をもつ洗面器状の形態。体部に三角形を上折り曲げた把手や半環状把手をもつ例もある。	
壺A	24	いわゆる薬壺形。高台を付した平底、肩の張った体部、直立する短い口縁部からなる。角状ないし耳状の把手を肩部に付す例もある。	
壺A蓋	23	平坦な頂部と直角に折れ曲がる縁部からなる。宝珠あるいは扁平ボタン状のつまみを付す。法量によって壺Dや壺Mに伴うものもある。	II一蓋D VI一蓋C(SD485)・蓋D(SD650)
壺B	25	平底で斜めうえに立ち上がる体部、比較的平坦な肩、短く直立する口縁部からなる。高台を付す例、肩部に耳状のつまみを付す例もある。	VI一壺D・F
壺C	26	肩部が稜角をなす胴長の体部に、直立する短い口縁部をもつ平底の器。高台を付す例もある。	VI一壺A
壺D	27	直立する短い口縁部をもつ扁平な体部に高台を付すもの。	IV一壺G
壺E	28	内彎ぎみに斜め上に開く体部と、狭い肩部に外傾する短い口縁部を付した広口の壺。高台を付す例もある。	
壺G	32	細長い体部に、太くて長い頸部を付す形態で、轆轤水挽き成形で作られる。	
壺H	29	幅の狭い肩に稜をもつ扁平な体部に、直立する比較的長い頸部と大きく外反する広口の口縁部からなる小型の器。底部に低短な高台を付す。	
壺K	33	細長い頸部と肩が張り稜角をもつ体部からなる長頸壺。平底で高台を付す例が多い。	VI一壺B
壺L	31	卵形の体部に口縁部が外反する頸部をもつ。口縁端部を丸くおさめるものと、屈曲してやや幅広の凹帯をなすもの、高台を付す例もある。	II一壺、IV一壺E・F VI一壺H
壺M	30	平底の丸い体部に外反する頸部を付す小型の器である。口縁端部は丸くおさめる。高台を付す例もある。轆轤水挽き成形で作られる。	VI一壺E
壺N	34	平底で卵形の体部に直立する頸部を付す。肩部に耳状の把手を付す。さら体部下半の相対する位置にも同様の耳状把手を付す例もある。	
壺P	35	いわゆる徳利形。底部径が大きく、筒形の体部に外反する頸部をもつ。肩部に稜をもつ例もある。	
壺Q	36	肩部に稜をもつ体部に、大きく外反する広口の頸部と外傾する高台を付す。	IV一壺D、VI一壺C
平瓶	38	平底で扁平な体部に器軸からずらした広口の頸部を付す。把手をもたない例、高台を付さない例、体部に稜をもたない例もある。	
水瓶	39	金属器を模したもので、卵形の体部に細長い頸部をもつ。頸部、体部に沈線をもつ例もある。	
浄瓶	40	金属器を模したもので、卵形の体部に細長い頸部、ろうと状に開く注口をもつ。	
横瓶	37	横長の俵形の体部をもち、中央に外反する口縁部を付したもの。両側面が尖る小型の例もある。	
甕A	41	卵形の体部に外反する口縁部を付したもので、口縁部は肥厚し、外傾する面をなす。	II一甕C VI一甕B(SD650)
甕B	42	卵形の体部に内彎ぎみの口縁部を付したもので、口縁端部を丸くおさめる例、内傾する例がある。肩部に耳状の把手を付す例もある。	VI一甕C(SD485)
甕C	43	肩の張った広口短頸の甕。肩部径が器高をしのぐ例が多い。高台を付す例、肩部4ヶ所に耳状の把手を付す例もある。	II一甕B VI一甕D・E

*本報告書における土器の器種呼称は、基本的に『平城VII』、『平城XIII』、『学報54』に従う。既刊の報告書と呼称がことなるものは備考欄に掲げた。ローマ数字は『平城宮発掘調査報告』の号数である。

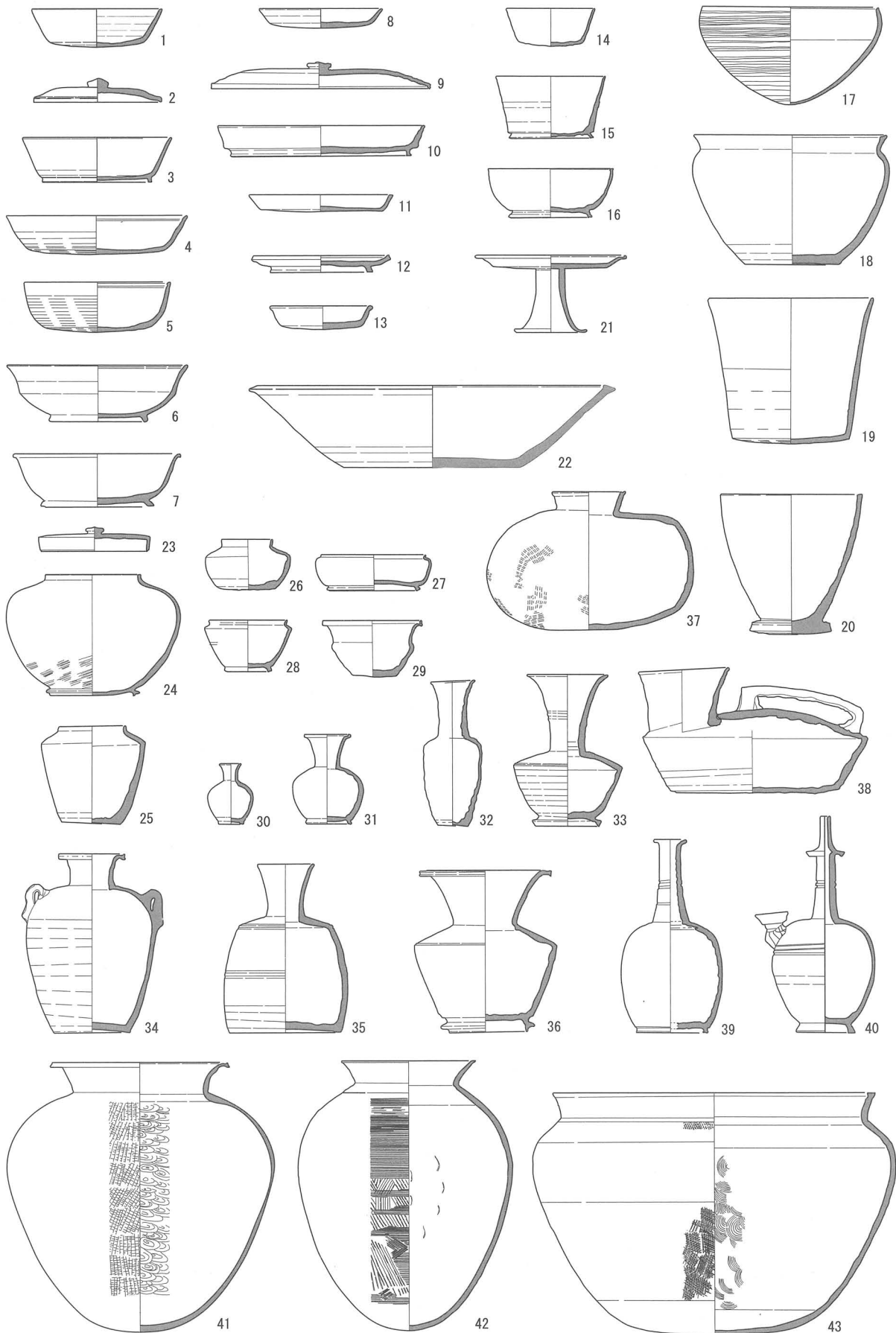


図90 須恵器の器種

の調整方法を示すものである。須恵器の群別は、生産地の差を示すと考えており、I群・II群は和泉陶邑窯、IV群は生駒東麓窯、V群は尾張猿投窯、VI群は美濃須衛窯の製品とみられる。III群については播磨産の製品と推定している。

報告番号 なお、土器に付した報告番号は、実測図、写真図版ともに共通である。1～500番代は奈良時代の土器、600番以降は弥生時代と古墳時代の土器である。

表8 平城宮土器の大別と略年代

時期区分	主要な遺構	調査回数	報告	年代推定の根拠*
平城宮 I ca. 715	宮 SD1900下層	16・17	『平城IX』	SD1900は下ツ道側溝。 宮造営時に埋め立てられる
	宮 SD3765下層	41	『平城XI』	木簡 和銅(708-715)
	宮 SD8600	104	未報告	木簡 和銅2年(709)～和銅8年(715)
平城宮 II ca. 716-734	宮 SD3035下層	22	未報告	木簡 霊亀2年(716)～神亀2年(725)
	薬師寺 井戸SE47		『学報45』	木簡 霊亀2年(716)
	京 SD485	55・56・57	『平城VI』	木簡 神亀5年(728)～天平元年(729)
	宮 整地土(木屑炭層)	177	『概報S61』	木簡 養老2～4・6年(718～720・722)
	宮 SK2102	22	『平城VII』	木簡 神亀5年(728)～天平元年(729)
	京 SD1250	122	未報告	木簡 神亀4年(727)～天平6年(734)
	京 SE4770	186	『学報54』	木簡 養老元年(717)
京 SD4750	193E・F	『学報54』	木簡 和銅4年(711)～霊亀2年(717)	
平城宮 III ca. 730-750	京 SD4699	178	『学報54』	木簡 天平2年(730)
	京 SD5100	193B・197・200・200補	『学報54』	木簡 神亀2年(725)～天平11年(739) 墨書土器 天平12年(740)
	京 SD5300	198B・204	『学報54』	木簡 神亀5年(728)～天平8年(736)
	京 前川遺跡		奈良市**	(cf. 紫香楽宮の土器)
	宮 SK820	13	『平城VII』	木簡 天平17・18年(745・746)……14点
京 SK2101	22	『平城VII』	木簡 天平18年(746)・天平勝宝2年(750)	
平城宮 IV ca. 753-767	京 SB7802柱拔取穴	77	『平城XI』	木簡 天平勝宝5年(753)
	西隆寺 SD110	306	奈良市***	平城京右京二坊坊間西小路の西側溝。 西隆寺の造営(767)時に埋め立てられる
	宮 SK219	5	『平城IV』	木簡 天平宝字6年(762)
平城宮 V ca. 762-784	宮 SD3236C	104	未報告	木簡 天平神護2年(766)～宝亀6年(776)
	宮 SK2113	20	『平城VII』	
	宮 SK870	20	『平城VII』	木簡 「左衛土府」天平宝字6年(762)
	宮 SE6166	52	『平城XII』	墨書土器「主馬」天応元年(781)～延暦3年(784)

*略年代は、主要な遺構から出土した年紀のうち、最も新しい年紀に基づき、それらの時間幅から推定した。

**奈良市教育委員会1974『平城京朱雀大路発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所編

***奈良市教育委員会2001『西隆寺跡発掘調査報告書』奈良文化財研究所編

3-1-3-1-1 SD3715出土土器

兵部省の西側、中央区朝堂院地区と東区朝堂院地区の間を流れる基幹排水路 SD3715から出土した土器は、奈良時代末(平城V)を中心とする。SD3715の上流でも奈良時代中頃から後半の土器が出土しているが、とくに兵部省西側の一带から出土した資料は、奈良時代末²⁾にまとめて投棄された様相が強い。

ここで報告する土器は、SD3715のうち南面大垣と交差する地点から北33mにわたる部分から出土したものである。遺構の詳細については、2-2-2を参照されたいが、3期にわたる変遷が確認されている。これら土器はSD3715Bの埋土で多量に遺物を含む土器溜および暗褐色粘質土から出土したものである。出土状況からみて、SD3715Bの廃絶時に瓦や凝灰岩などとともに投棄されたのであろう。また、土器の内容からみても「式」や「内大炊」、「内木工所」など官衙に関連する墨書土器を含み、転用硯が目立つなどの点から、長岡京への遷都にあたって周辺の官衙から投棄された可能性が高いとみられる。

接合検討を経た後でも、その破片点数は約6000点を数える。古墳時代の須恵器や奈良時代前半にさかのぼる暗文をもつ土師器なども含むが少数である。

須恵器と土師器の破片数は、土師器のほうが若干多い。平城Vの基準資料³⁾であるSK2113をみると、個体数で土師器313個体に対し、須恵器は112個体と土師器が多い。それに比べ、SD3715出土土器は須恵器の割合が高いことが指摘できよう。須恵器のなかで、尾張猿投窯とみられるV群の須恵器の比率が高いことも注目される。杯A、杯B、

表9 SD3715 出土土器の器種構成

土師器 (％は土師器の破片総数に対する比率)			
	器種	破片数	％
供膳具 2707 85%	杯A	61	1.9
	杯B	4	0.1
	杯C	109	3.4
	杯	1	0.03
	皿A	187	5.9
	皿C	2	0.06
	皿	1	0.03
	碗A	77	2.4
	碗C	19	0.6
	杯または皿	2198	69.5
	高杯	16	0.5
杯B蓋	26	0.8	
盤	6	0.2	
貯蔵具 煮炊具 457 14%	壺	6	0.2
	甕類(胴部)	398	12.6
	甕(口縁部)	58	1.8
	鍋	1	0.03
合計		3164	100.05

資料の性格

周辺官衙からの投棄

須恵器 (％は須恵器の破片総数に対する比率)			
	器種	破片数	％
供膳具 1910 68%	杯A	140	5.0
	杯B	162	5.8
	杯C	1	0.04
	杯L	1	0.04
	皿A	4	0.1
	皿B	9	0.3
	皿C	19	0.7
	皿D	3	0.1
	皿	4	0.1
	碗A	1	0.04
	杯または皿	473	17.0
	高杯	3	0.1
	杯(皿)B蓋	582	20.2
	皿B蓋	44	1.6
杯B I 蓋	28	1.0	
杯B II 蓋	227	8.2	
杯B III 蓋	174	6.3	
杯B IV 蓋	37	1.3	
貯蔵具	壺類	99	3.6
	壺蓋	3	0.1
	平瓶	3	0.1
	横瓶	1	0.04
	甕(胴部のみ)	664	23.9
865 31%	甕A	74	2.7
	甕B	3	0.1
	甕C	19	0.7
合計		2778	100.04

須恵器と土師器の比率

その他 (％は全破片総数に対する比率)			
	器種	破片数	％
その他 38 0.6%	古墳時代須恵器	32	0.5
	埴輪	3	0.05
	不明	3	0.05
合計		38	0.6

甕にもV群の須恵器が含まれるが、とくに杯B蓋はV群が占める割合が4割弱にもおよぶ。

器種の比率 表9は各器種の出土量を破片数で数えたものである。接合した破片は1点と数えた。器種がわかる破片は、小片でも1点と数えたため、甕など器種によっては個体数を反映していない可能性がある点は留意されたいが、供膳具のなかでの数量的傾向を指摘することはできよう。

須恵器杯Bが162点であるのに対し、杯B蓋は1092点を数え、圧倒的に多い点も注目される。杯B蓋のなかには転用硯として使われた痕跡を持つものも多いが、杯B蓋1092点中、転用硯は131点(12%)であり、身に対する蓋の多さは説明しきれない。しかし、転用硯の存在が、須恵器杯B蓋が多いひとつの要因であることは指摘できよう。須恵器甕類も非常に多いが、甕胴部664点中に41点の転用硯を含む。また、須恵器壺類が少ない点も特徴として指摘できるが、そのうち4点は漆が付着する。

土 師 器 土師器

杯 A 杯A(図版123 13-18) 杯Aは61点。いずれも口径16~19.5cmの杯A I。口縁端部が内側に折り返されて肥厚し、丸くおさまるものものがほとんどであるが、端部の肥厚は概して小さい。いずれも口縁端部までケズリを施すc手法であるが、13、14は口縁が外反するため、口縁の下をケズリ残す。15-17は、いずれもc0手法でII群土師器。118はケズリの後、ミガキを加えるc3手法、II群の土師器。

杯 B 杯B 杯Aに高台を付す杯Bは、4点を確認したが、いずれも小片である。

杯 C 杯C(図版123 12・23-30) 口縁端部が内傾する杯Cは109点を数え、その数は杯Aの2倍にあたる。いずれも口径16~17cmの杯C Iで、口縁部下をヨコナデし、底部に指頭圧痕を残すa0手法。12は器高が高く、内面に暗文をもつもので、やや古いタイプの杯C。1点のみ出土した。

碗 A 碗A(図版123 1-11) 小さな平底から口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、細い口縁端部をもつ。碗Aは77点のうち、口径12.5~15.5cm、器高3.8~4.8cmのやや大きい碗A I(1-6)と、口径9.5~11.2cm、器高2.8~3.8cmの碗A II(7-11)がある。おおむね、外面はヘラケズリの後にミガキを施すc3手法であるが、9はミガキを施さないc0手法、11はヘラケズリが認められないa3手法で調整する。

碗 C 碗C(図版123 19-22) 口縁部がまっすぐ立ち上がり、端部が内傾する。19点を確認した。いずれも口縁部をヨコナデし、外面下半は指頭圧痕を残す。19・20は器壁がやや薄く、口径に対して底径が小さく、底部がすぼまる。ほとんどの碗Cは、このタイプである。19は口縁部が内彎しながら立ち上がり、胎土に砂をやや多く含む。それに対し、21・22は平底にちかい。器壁が厚く、白っぽい淡橙色の胎土で、灯火器の痕跡をもつ。

皿 A 皿A(図版123 30-55) 皿Aは供膳具のなかで最も多く、187点を確認した。ほとんどがII群土師器で、b0手法およびc0手法で調整されるものが多い。法量から口径15~17cmの皿A II(34・35)、口径18~25cmの皿A I(31-33・36-55)に分けられるが、皿A Iはやや法量がばらつく。個体数では皿A Iが圧倒的に多い点も指摘できる。31から

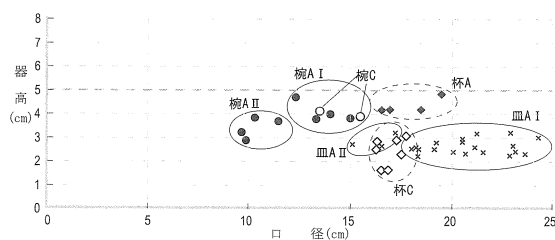


図91 SD3715 土師器供膳具の径高指数

33はa0手法の皿A I。いずれも口縁部をヨコナデし、底部に指頭圧痕を残す。41・44-51はb0手法の皿A I。口縁部が外反するもの(41・45・50)がある。36-43・52-55はc0手法の皿A I。端部まで丁寧に削るものが多いが、なかには端部まで達しない部分をもつもの(36・37・42・43)がある。55は口縁部外面を幅のせまいヘラケズリで調整する。34・35はやや小さい皿A II。c0手法で調整する。34は灯火器の痕跡を残す。

杯B蓋(図版123 56) 26点を確認した。56は橙褐色を呈し、頂部外面に丁寧にミガキを施す。杯B蓋
高杯(図版123 58・59) 16点が出土した。58は杯部のみ残存する。赤褐色の胎土で、焼成は堅
緻である。外面に細かいミガキを施すが、内面に暗文はない。59は脚部と杯部の一部が残る。
脚部は9面に面取りを施す。

壺B(図版123 57・図版124 60) 壺類は6点を確認した。57は小型の丸底壺。胴部から底部
は指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデの後、ハケ目調整を施す。60は表裏に人面が描かれた壺
B。ほぼ完形に復する。

甕A(図版124 61-68) 甕類の破片は456点を数えるが、このなかには小片も多いため、把手
のある甕Bや鍋の破片を含む可能性がある。図化できたものは、いずれも丸みを帯びた胴部を
もつ甕A。大きさから口径30cm前後の甕A I(66-68)、口径23~27cmの甕A II(62-65)、口
径17cm前後の甕A III(61)に分かれる。胴部外面をハケで調整し、口縁部の内面にもハケ目を
残すものがある。61・66・68は外面に煤が付着し、使用痕をとどめる。

鍋A(図版124 69) 1点のみ確認した。丸みを帯びる胴部に、外傾する口縁部をもつ。外面は
ハケ目調整を施し、内面はナデ調整がみられるが、下半は指頭圧痕を残す。

須恵器

杯A(図版125 101-114) 杯Aは140点を数える。口径18cm、器高6cm前後の大型の杯A
Iと、口径10~15cm、器高3~4cmの杯A IIIがあり(図92)、杯A IIIが圧倒的に多い。また、
杯A Iは杯A IIIに比べ、径高指数がやや高い。

101から108はI群の須恵器。灰白色から暗青灰色を呈し、外面に重ね焼きの痕跡(101・104・
106)や降灰(108)を持つものが多い。102・103は灯火器の痕跡を残す。109から113はV群の杯
A III。胎土は精良で、淡橙灰色から暗赤褐色を呈する。淡橙灰色のものの中には、やや白色を帯
びた粒が斑紋状に伸びるのが観察できる。口縁部はロクロ目を残し、底部外面は轆轤ケズリで
調整するため、底部から口縁部が立ち上がる屈曲点に面を持つもの(110・112・113)もある。こ
ういった器形の特徴は、尾張猿投窯折戸10号窯や黒笹3号窯などにみられる。

114は口径18.2cm、器高6.1cmの杯A I。この大きさの杯Aは1点のみ。灰色を呈するI群
の須恵器。器壁が厚く、粘土紐が接合する体部中央が強くナデられてくぼむ。口縁部外面に降
灰、底部内面には高温のためと見られる焼成時の付着物がある。

杯B(図版125 115-137) 杯Bは162点確認した。法量から4種類に分類できる(図92)。口径
18~21cmの杯B I(130-137)、口径16~18cmの杯B II(124-129)、口径11~16cmの杯B III
(117-123)、口径9~11cmの杯B IV(115・116)。

杯B Iと杯B IIの分化は明瞭でないが、口径19cm以上を杯B Iとした。130~135はI群の杯
B I。いずれも底部外面は轆轤ケズリの後、ほぼ全面にナデ調整を施す。131は口縁部内面に爪

状圧痕が残り、131・133・134は外面に降灰がかかる。134は口縁部内面に重ね焼きの痕跡と、底部に径約8cmの重ね焼き痕を持つ。136は細かい砂粒を多く含む灰色の胎土で、高台が内側に入るなどの点で備前産の可能性はある。底部外面は轆轤ケズリの後、ナデ調整を施さない。137は灰白色を呈するが、口縁部外面は灰褐色に変色し、重ね焼きの痕跡を残す。胎土はI群とみられるが、口縁部外面の下方に細かいミガキを施す。

杯 B II 杯B IIは、とくに器高のばらつきが大きい。125・126は杯B IIのなかでも器高が高く、口縁部が直線的に立ち上がるもの。V群須恵器。125は外面に墨痕が付着する。127はVI群の須恵器。細かい砂粒が多い灰色の胎土で、底部から口縁部の屈曲点より高台が内側に入る。内面に黒褐色の付着物がある。灯火器の痕跡であろう。128・129はI群の杯B II。

杯 B III 杯B IIIのうち、117・119はV群で暗赤褐色を呈し、幅広で内傾する高台を持つ。119は体部中央にヘラ描きがある。118・120・123はI群。118は口縁部が直線的に立ち上がるが、120・123は端部が外反する。121は1～3mmの白色の砂粒を多く含み、底部から口縁部への屈曲部分が厚く、その上に工具を当てたような沈線が入る。底部外面には墨痕が残る転用硯である。122は器高が低く、丸みを帯びた高台を付す。器表面は丁寧にナデ調整が施され、灰色の胎土に降灰がかかり、III群の可能性はある。

杯 B IV 杯B IVの115・116はV群の須恵器で、高台貼付けナデの内側に回転糸切りの痕跡を残す。

杯 C 杯C(図版125 146) 146の1点のみ確認した。土師器杯Aを写した器形で、口縁端部が内側に巻き込み、丸く肥厚する。体部下方から底部を丁寧に削り、黒色粒子が墨をぼかしたように伸びるII群の須恵器。

杯 L 杯L(図版125 147) 147の1点のみ。佐波理棹を模したもので、体部に棹をもち、口縁は外反しながら開く。高台より内側の底部を欠くが、口縁部は8割ほど残存している。青灰色を呈するI群須恵器。外面全体に降灰が観察できる。底部外面に墨痕があり、転用硯と思われる。

椀 A 椀A(図版125 145) 器高が高い椀Aは145の1点のみ出土。I群の須恵器。

皿 A 皿A(図版125 151-153) 口縁が細く、まっすぐ伸びる皿Aは4点確認した。皿Cに比べ、やや器高が高い傾向にある(図92)。図化したものは、いずれも淡灰色を呈するI群の須恵器。152・153ともに、口縁部外面にうっすらと重ね焼きの痕跡を残し、底部外面はヘラ切り後、未調整でヘラ切り痕が残る。

皿 B 皿B(図版125 148-150) 皿Bは13点出土した。いずれも器高の低い皿Bで、口縁端部が幅広

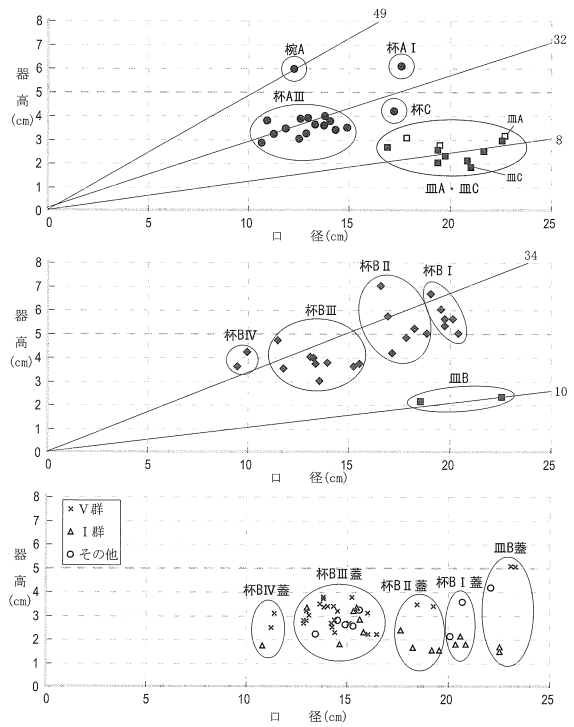


図92 SD3715 須恵器供膳具の径高指数

い特徴をもつ。暗灰色の精良な胎土でⅡ群須恵器。148は高台内側の底部外面に、149は底部外面から口縁部外面にミガキ調整を施す。口縁部上半の内外面に重ね焼き痕がある。150は丸みを帯びて膨らむ底部と、底径に対して小さい高台からなる。やや砂の多い灰色を呈し、器表面がざらつく胎土で、備前産の可能性もある。このほか、皿BにはⅠ群、Ⅴ群(図版130 250)がある。

皿C(図版125 138-144) 口縁端部が面をもつ皿Cは、19点を数える。口縁端部の形状は肥厚するかたちで内面の直下に沈線ができるもの(139・142)や、外反するもの(144)もある。全面にナデ調整を施すが、底部はヘラ切り後、未調整のもの(138・143・144)もある。141・142は口縁端部と外面に重ね焼き痕をもち、140は口縁端部の内外面ともに約5mm幅の重ね焼き痕をもつ。144は底部外面から口縁部外面と端部に降灰がある。また、140・144は底部内面を硯面にした転用硯である。

皿 C

杯B蓋(皿B蓋)(図版126 154-213) 法量より皿B蓋、杯BI蓋、杯BII蓋、杯BIII蓋、杯BIV蓋に分類でき、その法量分化は杯B、皿Bの法量に対応する(図92)。とくに杯BI蓋、杯BII蓋の差異が明確でないが、口径21~24cmを皿B蓋(205-213)、口径20~21cmを杯BI蓋(189・190・197-204)、口径17.5~20cmを杯BII蓋(192-196)、口径12.5-17.5cmを杯BIII蓋(157-188)、口径10~12.5cmを杯BIV蓋(154-156)とする。

杯 B 蓋
(皿 B 蓋)

皿B蓋は44点が出土し、うち転用硯は4点である。全体的に、Ⅴ群は器高が高く、Ⅰ群は低い傾向を指摘できるが、大型のものほど、その傾向は顕著になる。とくにⅤ群の皿B蓋(205-208)は、縁部の折り返しが幅広く、器高が高いのに対し、Ⅰ群の皿B蓋(210-213)は概して器高の低いものが多い。211や212のように、とくに器高が低いものは、頂部外面のやや高くなる縁部付近3cm前後のみに轆轤ケズリを施すものが多い。212はやや器高が高く、頂部外面のほぼ全体を轆轤ケズリする。213は特に口径が大きいもので、頂部が笠形を呈する。頂部外面は縁部付近までを轆轤ケズリする。灰白色を呈するが口縁部内外面は黒色で、重ね焼きの痕跡を明瞭に残す。212・213は頂部内面を硯面にした転用硯。

皿 B 蓋

杯BI蓋は28点が出土した。189・190は器高が高く、頂部外面は縁部の屈曲部付近まで轆轤ケズリを施すもの。Ⅰ群須恵器と思われるが、やや古い時期のものであろう。189は頂部内面を硯面にした転用硯である。197-199は器高が低いタイプのⅠ群。縁部がゆるやかに屈曲し、端部は外傾する。頂部外面は全体を轆轤ケズリするものと、縁部に近い部分のみ轆轤ケズリするものがある。いずれも灰白色から暗灰色、暗青灰色を呈する。重ね焼きの痕跡をもつもの(198)もある。200・201は器壁が厚く、筒状の特徴的なつまみをもち、頂部は平らで、縁部は緩やかに折り返す。砂が多い胎土で暗灰色を呈するⅢ群の須恵器。201は頂部内面に同心円の当て具痕が残る。いずれも頂部内面を硯面とし、よく研磨された転用硯。202-204はⅤ群で、器高が高いが、皿B蓋ほど縁部の折り返しが幅広くない。

杯 B I 蓋

杯BII蓋は227点ときわだって多く、口径がわかる杯B蓋のなかで半数近くを占める。192-194はⅠ群で、いずれも器高が低く、縁部はゆるやかに屈曲する。194は頂部外面の端部付近のみ轆轤ケズリを施すもの。195・196はⅤ群で、口縁部付近は轆轤ナデの跡が強く残り、端部の折り返しもやや幅広い。宝珠つまみの先端に工具があたってつぶれたような痕跡がある。

杯 B II 蓋

杯BIII蓋は破片点数が174点、その半数近くがⅤ群で、2割弱は転用硯である。159-176はⅤ群の須恵器。いずれも器高が高いが、頂部が直線的なものと、丸みを帯びるものがある。胎土

杯 B III 蓋

はやや砂っぽく、焼成は堅緻、色調は淡橙灰色から暗褐色を呈するものが多い。いずれも器高が高く、頂部外面を轆轤ケズリし、縁部付近は轆轤ナデする。内外面に直径約10~11cmの重ね焼き痕を残すものが多い。158は内面に火ぶくれをもつ。166は頂部内面に溶着が残り、つまみに工具が当たった痕跡がある。175・176は頂部内面に「×」のヘラ描きをもつもの。163・165は頂部内面を硯面にした転用硯である。177-182はI群の須恵器。いずれも頂部外面に轆轤ケズリの後、轆轤ナデ調整を加える。177は頂部外面に自然釉が厚くかかり、頂部内面に水銀朱が残る転用硯。181も頂部内面を硯面にした転用硯で、頂部外面に墨痕が残る。183は淡褐色の砂っぽい胎土で、頂部外面に黄緑色の自然釉がかかる。VI群の可能性もある。184-187は灰白色を呈し、表面がざらつく胎土でVI群。やや口径に対して大きく扁平なつまみを持つ。頂部外面を轆轤ケズリした後、縁部付近のみ轆轤ナデ調整を施す。188は灰色で砂を含む胎土で、頂部外面は轆轤ケズリが施されないため、粘土紐の接合線が残り、縁部付近のみナデ調整が施される。備前産の可能性もある。頂部内面はよく研磨され、墨痕が厚く残る。

杯 B IV 蓋 杯 BIV 蓋は37点。154は器高は低く、平らな頂部をもつ I 群の須恵器。155・156は直線的な笠形の頂部をもつ V 群のもの。頂部は轆轤ケズリし、縁部付近のみ轆轤ナデを施す。155はつまみから頂部外面は降灰のため、白色に近い。156は縁部内外面に重ね焼きの痕跡をもつ。

また、環状つまみの杯 B 蓋は 1 点出土した。灰色の堅緻な胎土で、つまみから頂部にかけて降灰がかかる。I 群の須恵器で、これも頂部内面に墨痕が残る転用硯。

高 杯 **高杯** (図版127 214-217) 高杯は 7 点を確認した。214-217は、いずれも灰色から暗青灰色を呈する I 群の須恵器。214・215は脚部の上半から杯部外面にかけて降灰がみられる。

壺 類 **壺類** (図版127 218-222・224) 壺類は99点。218・219は壺 G の底部。218は底部に糸切りの痕跡を残す。胴部下方はヘラケズリで調整する。219は胴部下方を轆轤ケズリし、底部も轆轤ケズリで調整する。220も底部から胴部下方を轆轤ケズリで調整する。内面に広く降灰がかかることから、広口壺の底部であろう。221・222は壺 L の底部。222はやや深い緑色の自然釉が滴下している。224は壺 A の口縁部から肩部。青灰色を呈する堅緻な胎土で、I 群須恵器。肩部に降灰がみられるが、頸部のつけ根付近1.5cm 幅で降灰のない部分があり、重ね焼きの痕跡を残す。

壺 A 蓋 **壺 A 蓋** (図版127 223) 壺 A 蓋は 3 点確認した。いずれも I 群の須恵器。223は頂部外面に降灰がみられる。

横 瓶 **横瓶** 横瓶は 1 点出土した。赤茶褐色を呈し、器壁が厚い。

平 瓶 **平瓶** 平瓶は提梁部分のみ 3 点出土した。

甕 A **甕 A** (図版127 228・図版128 229-237・図版129 240-243) 甕の破片は、胴部の破片数で760点を数えるが、胴部の破片では甕 A、甕 B の区別がつかず、1 個体から生じる破片数が多いため、個体数を反映しているとは考えられない。しかし、口縁部の破片から甕 A と判断できるので74点を数える。口縁端部に面をもつ甕 A には、頸部の長いものと短いものがある。頸部が長いものは、粘土紐 3~4 段に輪積みした接合面が、ゆるやかな凹凸として残る。口縁端部を下に折り返すもの (228・229・236) と上に折り返すもの (230-235・239) がある。口縁端部の形状の差は、産地による製作技法の差であろう。228は口縁端部を下に折り返す V 群の甕 A で、口縁端部に鉄分を多く含む泥しょうを塗布し、暗赤褐色に焼きあげる。頸部には 3 条のヘラ描きがあり、底部外面には木の葉圧痕を残す。外面は平行線叩き目が残る、内面は当て具痕をナデ

消す。完形で出土した。229は淡灰色の胎土でV群。口縁端部を下に折り返す。230-235・239は、いずれも灰色から淡褐灰色を呈し、やや砂が多い胎土で黒色粒子を多く含む胎土でVI群の可能性が高い。とくに234・239は非常に器壁が薄く、細かい同心円状の当て具痕をもつ。235・236は頸部が短い甕A。235はやや青みを帯びた灰色の精良な胎土でI群。口縁端部を上を折り返す。体部外面の叩き目は部分的に残るが、ナデ消されている。236は淡灰色の胎土でV群。口縁端部を下に折り返して肥厚する。頸部外面に黄土を塗布した痕跡をもつ。243は口縁端部を欠くが、甕Aであろう。青灰色の胎土でI群。球形の体部にやや短めの頸部をもつ。欠損しているが、頸部にヘラ記号が残る。241は大型の甕で、V群。やや外彎ぎみの頸部をもち、口縁端部は肥厚せず外傾することで面をもつ。頸部の上半は沈線と9本の櫛状工具による列点文で施文する。肩部外面に平行線叩き目が残るが、内面の当て具痕はナデ消す。242と243は非常に薄手の甕で、口縁部を欠くが、甕Aであろう。底部外面に木の葉痕が残る。体部外面は平行線叩き目が残るが、内面の当て具はナデ消し、内外面に黄土が塗布される。V群須恵器。

甕B (図版128 238・239) 頸部が直線的に立ち上がる甕Bは口縁部の破片で3点を確認した。甕 B
238・239は、いずれも短頸で粗い平行線叩き目と当て具痕をもつ。黒色粒子を多く含む胎土で、
群別は不明。

甕C (図版127 225-227) 肩が張り頸部が短い広口の甕Cは19点。いずれも頸部から口縁部、甕 C
体部内面はナデ調整、体部外面はケズリ調整が施される。227は灰色の胎土でII群須恵器。

墨書土器 (図版130・131 244-282)

墨書土器

SD3715から出土した墨書土器は116点にのぼる。⁴⁾各資料の出土地区、釈文、器種名、墨書箇所などは一覧表にまとめ、表10-12に掲げる。墨書された土器の様相は、土師器、須恵器全般の様相とほぼ同じ内容で平城Vの時期が中心である。

須恵器と土師器の内訳は、土師器19点(16%)に対し、須恵器が97点(84%)と圧倒的に多い(図93)。2000年度までの平城宮の調査で出土した3000点をこえる墨書土器の内訳は須恵器65%、土師器35%であり⁵⁾、平城宮全般の傾向と比べても、須恵器が多いことがわかる。

器種別の内訳をみると、SD3715の墨書土器には須恵器杯蓋類が占める比率が高く、出土した須恵器全体の傾向に一致する。なお、杯B蓋61点中、転用硯は7点である。墨書の内容は、釈読できた範囲で官衙名、人名が多い傾向にあり、内容物を示す例(269・274)、警告を記す例(266)、習書(271)などがある。

244-246は式部省に関連すると思われるもの。いずれもI群の須恵器杯B蓋の頂部外面に「式」や「式曹」と墨書する。247-249は内木工所関連、250-253・255-260は内大炊関連のもの。253に「大炊「木工足木」」とあることから、内木工所と内大炊は一連の可能性もあるが、官衙の具体的な性格は明らかでない。また、254・261は「衣」に関連する官衙名の可能性があるもの。249は砂が多い胎土で、底部に糸切りの痕跡を残すV群の杯BⅢ。250はV群の須恵器ⅢB。251・254は灰白色を呈する杯Bで、断面半円形に近い丸みを帯びた高台をもつ。群別は不明。252・253はI群の須恵器杯BⅢ蓋で、口縁部に重ね焼きの痕跡をもつ。255は淡橙灰色を呈するV群の須恵器杯BⅣ蓋。256もV群の須恵器で、暗赤褐色を呈する杯A。底部は轆轤ケズリで調整する。257もV群の須恵器杯BⅣ蓋で、黒褐色を呈する。258は土師器杯またはⅢの底部。259

はI群の須恵器杯BIV。267は頂部外面に「女孺」と記されたI群須恵器の杯B蓋。270は須恵器杯BIII蓋で、口縁部に重ね焼きの痕跡がある。I群の須恵器。271は頂部外面に習書された杯BIII蓋。内面がよく研磨された転用硯で、墨が厚く残る。272はI群の杯BIII蓋。頂部外面に墨痕がのこる。273はI群の須恵器皿B蓋。274は底部外面に「真魚」と墨書された杯A。底部外面を轆轤ケズリし、底部に稜をもつ。明橙色を呈するV群の須恵器。275はI群の杯B。276もI群の杯BI蓋。277はb0手法の土師器皿AII。278は淡橙色を呈し、底部を轆轤ケズリで調整するV群の杯A。279は断面が三角形に近い高台をもつ杯B。体部上半を欠くが、金属器模倣の可能性もある。I群であろう。280はI群の須恵器杯BIII。281も灰白色を呈する群別は不明の杯B。断面半円形に近い丸みを帯びた高台をもつ。282は口縁部を欠くが、底部外面に糸切りの痕跡を残すV群須恵器で、底部外面に「秋成」と記す。

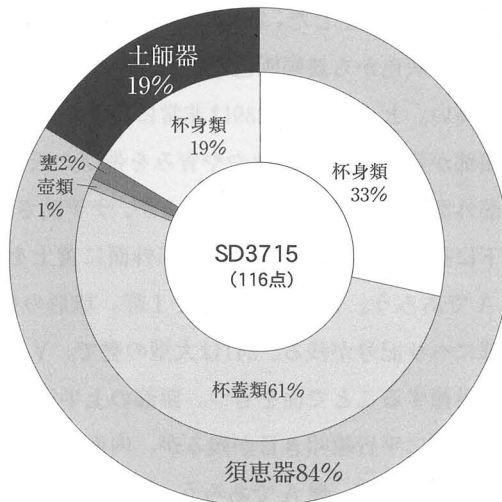


図93 SD3715 出土墨書土器の種類別比

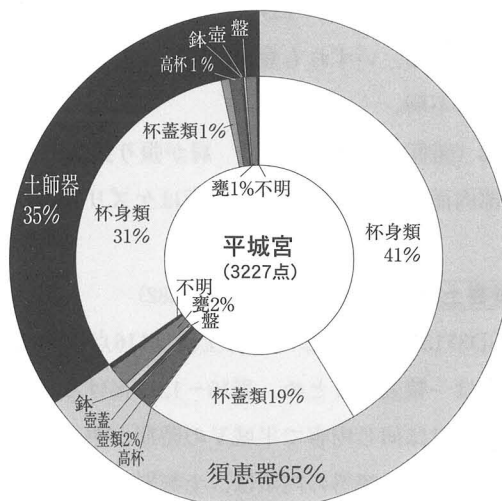


図94 平城宮出土墨書土器の種類別比
(%の表示がないものは、1%未満)

3-1-3-1-2 その他の遺構出土土器

SE13774 SE13774 (図版132 401-417) 土師器には杯A I、杯A II、皿A I、椀A Iがある。各個体の残存率は高いが、土師器の器表面の摩滅が著しく、観察が難しい。土師器杯A II (401)は口縁端部の巻き込みが細い。402-404は杯A I。405-408は皿A I。407はかろうじて底部にヘラケズリが観察できる。409・410は椀A I。c0手法とみられる。いずれもII群の土師器。

須恵器には杯A V、杯B I、杯B V杯B I蓋、皿C IIがある。411・412はI群の杯A V。底部にはヘラ切りの痕跡を残す。413は杯B V、414は杯B IIで、いずれもI群。415は杯B I蓋。頂部外面は粘土紐の痕跡が残り、ナデ調整のみ。416・417は皿C。417は底部が丁寧にヘラケズリされ、丸みを帯びる。

SD13929 SD13929 (図版132 418-426) 西面築地SA13030の東雨落溝の西側側石抜きSD13929から出土したもの。418-420は同じ地点から出土した須恵器杯B V蓋。いずれも完形に近い転用硯である。421はa0手法の土師器杯C I。422は須恵器皿A II。やや軟質で摩滅する。423は杯B II蓋。424は須恵器杯A I。425は皿X。底部外面を轆轤ケズリし、底部に段を持つ。426は須恵器皿A I。

表10 SD3715出土墨書土器 (1)

No.	出土地区	積文	土器の種類	器種	墨書部位	備考
244	DG34	式曹	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1066
245	DD34	式	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1068
246	DE34	式	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1069
247	DK35	内木工所/充足杵	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1051
248	DK35	□〔内カ〕/□足杵	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1052
249	DK35	内木工所/充足杵	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1050
250	DK35	内大炊秋人	須恵器	皿B	底部外面	『集成Ⅱ』1047○
251	DK35	□〔内カ〕大炊	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1042
252	DK35	内大炊	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1044
253	DB35	大炊「木工足木」	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1118
254	DK34・DK35	内□衣/中	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1048
255	DK35	□/□大炊	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1038
256	DK35	□□□〔内大炊カ〕	須恵器	杯A	底部外面	『集成Ⅱ』1110
257	DC34・DK35	□大□□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
258	DJ34	内大炊	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1041
259	DK35	内大	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1043
260	DH34	内大	須恵器	杯A	底部外面	『集成Ⅱ』1036
261	DL33	□衣	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1049
262	DK35	□五番	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1106
263	DJ35	鈿	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1107
264	DI34	菜	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1099
265	DJ34	□〔舞カ〕	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1092
266	DK35	□莫取	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
267	DK35	女孺	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1035
268	DH34	八番/[]	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1109
269	DK35	味物料理	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1084○
270	DI34	□上廣	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1074
271	DE34	瀬瀬	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1083○
272	DK35	(内面) □〔中カ〕 (外面) □/[]	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1105○
273	DH34	土	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1089
274	DK35	真魚	須恵器	杯A	底部外面	『集成Ⅱ』1030
275	DK35	□〔書カ〕	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1082
276	DB34	主水	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1116
277	DD34	□□	土師器	皿A	底部外面	『集成Ⅱ』1096
278	DJ34	諸司□	須恵器	杯A	底部外面	『集成Ⅱ』1087
279	DH34	□	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1062
280	DL35	内	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1037
281	DJ35	秋	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1103
282	DK35	秋成	須恵器	杯B	底部外面	『集成Ⅱ』1059
283	DD34	□〔内カ〕大炊	須恵器	杯	底部外面	『集成Ⅱ』1039
284	DI34	□	須恵器	杯	底部外面	『集成Ⅱ』1075
285	DC34	□	土師器	杯または皿	底部内面	『集成Ⅱ』1114
286	DB34	主水	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1115
287	DB34	(内面) □万呂 (外面) 麻□(外面)	須恵器	杯B蓋	頂部内外面	『集成Ⅱ』1117

表11 SD3715出土墨書土器(2)

No.	出土地区	積文	土器の種類	器種	墨書部位	備考
288	OK35	□	須恵器	杯 A	底部外面	『集成Ⅱ』1029
289	DZ33	□□	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1031
290	DI35	□/□	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1032
291	DK35	[]/□□□	土師器	杯または皿	底部内面	『集成Ⅱ』1033
292	DL36・DK35	□	須恵器	杯 A	底部外面	『集成Ⅱ』1034
293	DK35	内大炊	須恵器	杯 A	底部外面	『集成Ⅱ』1040
294	DK35	□大炊	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1045
295	DD34	大	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1046
296	DG34	□□[木工カ]所/□	須恵器	杯 B	底部外面	『集成Ⅱ』1053
297	DE33	□	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1054
298	DJ34	□〔女カ〕□	須恵器	壺 A 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1055
299	DE33	□	須恵器	杯 B	底部外面	『集成Ⅱ』1056
300	DC34	□	土師器	杯または皿	底部内面	『集成Ⅱ』1057
301	DK35	□水	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1058
302	DK35	□	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1060
303	DG33	□□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1061
304	DH34	式	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1063 ○
305	DH33	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1064
306	DG34	人	須恵器	杯 B	底部外面	『集成Ⅱ』1065
307	DI34	□□〔式曹カ〕	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1067
308	DJ34	兵	須恵器	杯 A	底部外面	『集成Ⅱ』1070
309	DF34	□□□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1071 ○
310	DF34	○(記号)	須恵器	甕	体部内面	『集成Ⅱ』1072
311	DF34	十(記号)	須恵器	杯 B 蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1073
312	DI34	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1076
313	DI34	□□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1077
314	DD34	私	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1078 ○
315	DI35	□□	土師器	杯	底部外面	『集成Ⅱ』1079
316	DL33	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1080
317	DK35	□	須恵器	杯 B	底部外面	『集成Ⅱ』1081
318	DD34	□□□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1085
319	DE33	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1086
320	DH34	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1088 ○
321	DL33	秋	須恵器	杯 B 蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1090
322	DG34	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1091
323	DI34	渦巻状(記号)	須恵器	杯	底部外面	『集成Ⅱ』1093
324	DD34	□□	須恵器	杯 B 蓋	底部外面	『集成Ⅱ』1094 ◎
325	DD34	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1095
326	DJ35	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部内面	『集成Ⅱ』1097
327	DG35	□	土師器	皿	底部外面	『集成Ⅱ』1098
328	DH34	(内面) □ (外面) □〔所カ〕	土師器	杯または皿	底部内外面	『集成Ⅱ』1100
329	DJ35	○(記号)	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1101
330	DJ35	□	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1102
331	DJ35	美	須恵器	杯 B 蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1104
332	DJ35	□	土師器	杯または皿	底部外面	『集成Ⅱ』1108

表12 SD3715出土墨書土器 (3)

No.	出土地区	積文	土器の種類	器種	墨書部位	備考
333	DC34	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1111
334	DE34	府	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1112
335	DK35	中	須恵器	杯B蓋	頂部外面	『集成Ⅱ』1113
336	DC34	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
337		□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
338	DJ35	□ [書カ]	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
339	DE34	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
340	DK35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
341	DE34	□/□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
342	DD34	□ [人カ]	須恵器	杯B蓋	頂部内面	
343	DK35	□□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
344	DH35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
345	DK35	[] 人	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
346	DK35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
347	DK35	[]	須恵器	杯B蓋	頂部内面	
348	DK35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
349	DK35	長	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
350	DL34・DK35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
351	DJ35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
352	DH34	長□	須恵器	皿B	底部外面	
353	DK34	□□	須恵器	杯B	底部外面	
354	DK35	[]	須恵器	杯B	底部外面	○
355	DE34	○ (記号)	須恵器	甕	体部外面	
356	DH34	□野殿	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
357	DI33	□	須恵器	杯B蓋	頂部内面	
358	DH34	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
359	DK35	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
360	DF34	□	須恵器	杯または皿	底部外面	
361	DK35	[]	須恵器	杯B	底部外面	
362	DJ35・DK35	□	須恵器	杯B	底部外面	
363	DE34	□□	土師器	椀A	底部外面	
364	ZZ	□ [虫カ] □	須恵器	杯または皿	底部外面	○

*備考欄の「○」印は、転用硯。「◎」印は、朱用硯。

表13 包含層・その他の遺構出土墨書土器

No.次数	出土地区	積文	土器の種類	器種	墨書部位	備考
435 206	HG55 SK13790	□大炊所/□	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅲ』625
436 216	GP30 SK14445	西	須恵器	杯F	底部外面	『集成Ⅲ』627
437 206	HE54 SD13731	□	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅲ』623
438 206	HE54 SD13731	□	須恵器	杯B蓋	頂部内面	『集成Ⅲ』624
439 206	HG51 包含層	□□ [母カ]	須恵器	杯	口縁部外面	『集成Ⅲ』626
440 157	DD33 包含層	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
441 157	DC35 包含層	□ [宮カ]	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
442 157	DF33 包含層	□	須恵器	杯B蓋	頂部外面	
443 157	DD35 包含層	□	須恵器	杯B	底部外面	

*備考欄の「○」印は、転用硯。

- SK13776 **SK13776** (図版132 430-432) 430は須恵器杯 BIV 蓋。重ね焼きの痕跡がある。431は須恵器杯 BIII。432はc手法とみられる土師器碗 AII。
- SK13777 **SK13777** (図版132 427・428) 427は須恵器皿 CI。428は土師器皿 AI。
- その他 **その他** (図版132 429・433・434) 429は第157次調査区 SD11705出土の須恵器鉢 F。底部外面は細い工具で刺突する。433は第214次調査区包含層から出土した須恵器鉢 E。体部内面の下半は不定方向のナデ調整を施し、上半は轆轤ナデ成形。434はSA13737の柱穴掘形から出土した甕。おそらく体部より上をほぼ水平に打ち欠いたのであろう。下方に焼成後に穿った直径約25mmの孔がある。別の場所で用いられていたが破損し、掘形に入れられたのであろう。体部中央には粘土紐の接合痕跡を残す。底部外面はヘラケズリを施し、体部内外面はナデ調整で成形する。

墨書土器 3-1-3-2 包含層・その他の遺構出土の墨書土器 (図版133 435-443)

SD3715以外から出土した墨書土器はいずれも須恵器で、9点を数える(表13)。440-443は第157次調査区の包含層より出土。441は杯 B 蓋の頂部外面に「□〔宮カ〕」と記す。437・438は第206次調査区 SB13730の西面雨落溝 SD13731の出土。435は兵部省東第一堂 SB13750の東側にある土坑 SK13790出土。V群須恵器の杯 B 蓋の頂部内面に「□大炊所／□」と記す。436は第216次調査区南東隅にある大土坑 SK14445から出土。ほぼ完形の杯 F の底部内面に「西」と記す。I群の須恵器。

3-1-3-3 陶硯と転用硯

SD3715以外からも陶硯や転用硯が出土している。陶硯および転用硯の官衙内における出土状況を図95に示した。出土地点は包含層から出土したものが多く、原位置をとどめない資料群であるが、SB12980の西側や SB13740の東側など、兵部省の区画内で、各建物の外側から多く出土していることがわかる。

- 陶硯 **陶硯** (図版133 444-449) 444は第175次調査区の包含層出土の圈足円面硯。やや砂が多い胎土で、外堤と突線の上面に降灰がかかる。脚部に長方形の透かしをもつが、小片であるため透かしの数はわからないが、脚柱幅は4cm以上ある。445は40ヶ所に長方形の透かしをもつ圈足円面硯。第205次調査区の包含層より出土。硯面のみ6分の1程度残存する。微細な黒色、白色の粒子を含む胎土で、V群須恵器。446は第206次調査区、兵部省東面築地の片廂廊の西雨落溝 SD13736出土。丸く膨らんだ海部の硯面がほぼ完全に残る。I群須恵器。海部と外堤部の上面に降灰がみられ、硯面は使用による研磨痕を残す。447は第214次調査区の包含層出土、硯面のみ残存する円面硯。突帯が2条めぐることから、蹄脚円面硯の可能性もある。I群須恵器。448は第216次調査区の SK14445出土。圈足円面硯の脚部で、広くひらき、24ヶ所に長方形の透かしをもつ。449は圈足円面硯の海部のみ残存するが、外堤部と研面を欠く。450は隅丸十字形の穿孔をもつ圈足円面硯の脚部。451は台部基底と脚部を別に作って接合する蹄脚円面硯 A。第216次の包含層出土。452は台部基底から硯部を一体で作ったのち、型作りの脚節、脚頭を貼付ける蹄脚円面硯 B。第205次調査区の包含層より出土。

転用硯（図版133 453-467） 調査区より出土した転用硯は57点にのぼる。転用硯に使われた須恵器の器種をみると、57点中32点（55%）が須恵器杯B蓋、甕が16点（28%）であった。SD 3715の転用硯180点を加えても、杯B蓋が69%、須恵器甕が24%である（図96）。

杯B蓋はいずれも頂部内面を硯面にする。口径17.5cm以下の杯BⅢ蓋および杯BⅣ蓋が主体的で、器高が高いものが多い傾向にある。つまみを欠くものも多いが、小型のものには、ほぼ完形品のものもある。453は須恵器杯BⅣ蓋、第205次調査区包含層の出土。454-456はI群の須恵器杯BⅢ蓋。頂部外面は縁部付近のみナデ調整を施し、粘土紐の接合痕跡を残す。454はSD 13725抜取り、455は第216次調査区包含層、456はSX13850出土。いずれも縁部付近に5mm程度の重ね焼き痕跡をもつ。457は黒色粒子を含む胎土で、VI群の杯BⅢ蓋。頂部外面は轆轤ケズリが施され、内外面に重ね焼きの痕跡をもつ。頂部内面は端部から幅2cmほど降灰がかかるが、その内側を硯面とする。第205次調査区包含層出土。458もVI群。頂部外面に厚く自然釉がかかる。第206次調査区包含層出土。459は白色粒子を含み、青灰色を呈するI群の杯BⅠ蓋。頂部外面に降灰がかかる。第216次包含層より出土。460もI群の杯BⅠ蓋。頂部外面全体を轆轤ケズリする。第205次包含層出土。461は須恵器ⅢC。SK14355出土。口縁部内面に墨が残り、底部内面が研磨されている。甕の転用硯は10~20cmほどの破片であることが多い。462は須恵器甕の体部。体部の内面を硯面とする。SD13006出土。須恵器杯Bの転用硯は、底部外面の高台の内側を硯面にする。463は糸切りの痕跡を残すV群の杯BⅢ。底部外面に墨痕と研磨痕を残す。

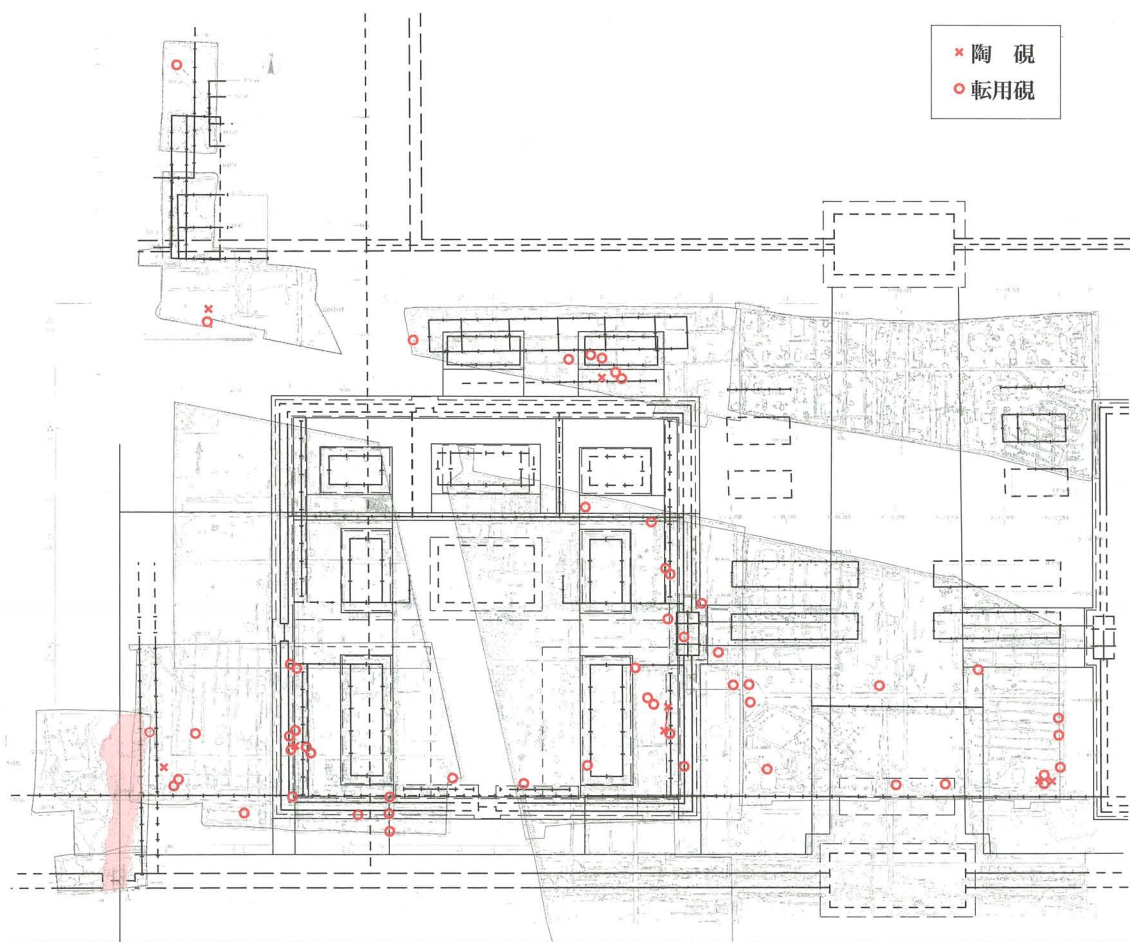


図95 陶硯・転用硯の出土分布図

SK13978出土。壺は甕のように破片のかたちで体部内面を使ったものや、体部を打ち欠き、底部外面を硯面にするものもある。464は広口壺の底部。底部内面にはば広く自然釉がかかる。体部を打ち欠いてひっくり返し、底部外面を硯面にしたもの。456と同じSX13850出土。

3-1-3-4 墨書土器・転用硯について

注目すべき墨書の内容として、官衙名と考えられる資料がある。「内大炊」(250・252・258)や「内木工所／充足杵」(247・249)の性格については不明な点が多い。「内」がつく機

関は天皇直属の可能性を示唆するが、既知の内廷関連官司名を記した木簡は出土していない。

式部省に関連する「式」(245・246)や「式曹」(224)が多い点も注目されよう。いずれも須恵器杯B蓋で、そのうちの1点は転用硯である。式部省に関わる木簡も出土しており、SD3715に投棄された土器の出所、性格を考えるうえで重要な手がかりとなる。SD3715から出土した転用硯は、183点(朱硯3点を含む)にのぼるが、式部省関連の墨書土器の存在は、これらの転用硯も兵部省を隔てた式部省で使用されていたものを含む可能性を示唆する。

いっぽう、兵部省に関連する可能性がある墨書土器は、須恵器杯Aの底部に記された「兵」(308)の1点だけである。兵部省関連の墨書土器は、平城宮南門大垣の南を流れる二条大路北側溝SD1250から7点が出土している(第122次調査)。1点(521)だけが壬生門の東方から見つかり、他の6点は壬生門前の西10mほどの間で出土したものである。宮内から壬生門の外に持ち出して投棄したのであろうか。いずれにせよ、SD3715、SD1250に捨てられた墨書土器には、その内容にある程度のまとまりが認められるものの、推定されている官衙の場所と照らしあわせた場合、ある程度の距離を移動したと考えざるをえない(なお、墨書土器については4-2-13で再論する)。

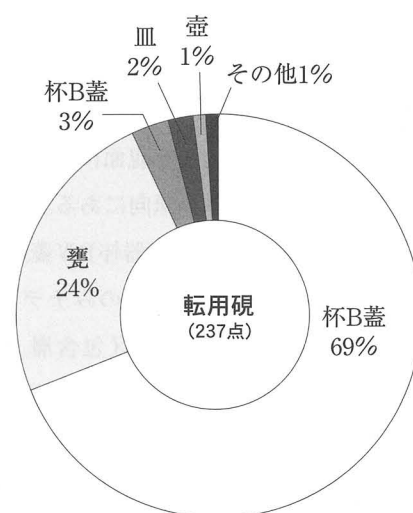


図96 転用硯の種類の比率

- 1) 基本的に「『平城宮発掘調査報告XⅢ』に従った。
- 2) SD3715出土土器は長岡京遷都に際して投棄されたと考え、平城Vでも末葉とした。しかし、これについては遷都前後の諸官衙のあり方や、これまでの平城宮土器の時期区分の平城VおよびⅥの内容と位置づけについてなお慎重に検討すべきであるとする。
- 3) 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』参照。
- 4) 墨書土器の積文には、平城宮跡発掘調査部史

- 料調査室がおこなった。なお、これらの墨書土器は、既刊の奈良国立文化財研究所1989『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』(奈良国立文化財研究所史料第31冊)に集録されたものであるが、その後の資料整理によって新たに発見したものや、積文を訂正したものが含まれる。
- 5) 神野恵2000「第3章 平城宮出土墨書土器について」『平城宮出土墨書土器集成Ⅲ』(奈良国立文化財研究所史料第59冊)参照。

3-1-4 木製品・金属製品・銭貨・石製品など

調査区全体から3883点の木製品が出土した。そのうち、3875点は157次と157次補足調査をあわせたSD3715から出土している。それ以外には兵部省西面区画塀外側の断割で、第1次整地土の下層からわずかに8点が出土したのみである。兵部省の区画内からは木製品は出土していない。木製品の大半は両端や側面を簡単に加工した棒や板である。本書では器種や全体像のわかる遺物を中心に29点について報告する。

SD3715からは容器、食器具、服飾具、工具、祭祀具などの多様な木製品以外に、木製品を製作した際に生じた木端や挽物を製作した際の轆轤残材が出土しており、溝の上流または付近に木製品の製作工房があったことが推測できる。これらの木製品は大半が溝の下層の暗灰砂質粘土または暗灰色粘土から出土した。木製品はすべて未処理で、水漬けの状態では保管されている。なお、木製品の名称と分類は『木器集成図録近畿古代篇』(1985、以下『集成』と略す)およびこれまでの『平城報告』に従う。樹種の鑑定と年輪年代測定は埋蔵文化財センター光谷拓実、大河内隆之による。

3-1-4-1 木製品

3-1-4-1-1 容器(図版134・135)

円形曲物(1～4) 1～4は円形曲物の底板。1は直径14.5cm。スギ板目材を用い、側面には面取りの削り痕跡が明瞭に残る。205次調査SD13905CQ17暗灰粘土出土。2は直径15.8cm。ヒノキ板目材を用いる。年輪年代測定の結果は727年(Bタイプ)²⁾。157次SD3715DF34暗灰砂質粘土出土。3は完形で、直径18.1cmのヒノキ板目材。側板の一部が遺存し、6ヵ所を断面方形の木釘で留める。内面には刃物による傷が残る。側板のケビキは明瞭ではない。年輪年代測定の結果は733年(Bタイプ)。157次SD3715DE34暗灰砂質粘土出土。4は2と同じく直径15.8cmのヒノキ板目材。157次補SD3715DB35上層黒色粘質土出土。

楕円形曲物(5・6) 5は楕円形曲物の底板。長径39.2cm。ヒノキ板目材。側面には15ヵ所もの釘穴があげられている。また、側縁付近に3ヵ所、中央の半裁部分に2ヵ所の穴が穿たれている。中央の穴は底板を連結したものかもしれないが、側縁付近の穴は、本例が転用されたことを示すのかもしれない。157次SD3715DO34暗灰色粘土出土。6は楕円形曲物の蓋板。ヒノキ板目材。推定長径27.5cm。表面にはわずかに刃物傷が残る。側縁には2ヵ所の結合穴がある。157次SD3715DB35上層黒色粘土出土。

刳物(7) 7は刳物の角鉢。スギの板目材を用い、長辺12.5cm、短辺8.0cm、高さ4.3cmをはかる長方形。内面には刳抜く際の鑿傷を残す。157次SD3715DK34暗灰色粘土出土。

3-1-4-1-2 食器具(図版136)

匙形木器(8・9) 2点出土しており、いずれも身の先端が半円形を呈する『集成』A型式に当たる。8はヒノキの板目材を用いた全長27.9cmの大型品。柄の縦半分を欠失し、本来は柄が幅広い特徴がある。157次SD3715DD34暗灰砂質粘土出土。9はヒノキの板目材を用いた全長11.7cmの小型品。身部が大きく広がり、薄く削る。157次補SD3715DB34石敷間出土。匙形木器

以外の食器具には、大量に出土した加工棒の中に断面円形に加工したものがあり、箸が含まれていると思われる。

3-1-4-1-3 服飾具 (図版136)

下駄 (10) ヒノキの柾目材を使用し、全長17.8cm、歯の最大幅8.9cmをはかる。前壺は台の中央、後壺は歯の内側にあける。歯の下辺幅は広くするとともに、歯と台の周縁を面取りする。全体の形は隅丸方形を呈する。これらの特徴から、『集成』分類のC IV a型式に当たる。後の歯は著しく磨り減っている。157次 SD3715DK34暗灰色粘土出土。

3-1-4-1-4 祭祀具 (図版136)

齋串 (11~15) 破片も含めて5点出土している。11は型式不明の破片。ヒノキ板目材。残存長11.6cm。157次補 SD3715DC35黒色粘質土出土。12は黒崎分類³⁾A 1形式で、頂部の先端をわずかに欠く。残存長20.7cm。両側面には一部削りによるくびれをもつが、ここに切りかけをもっていた可能性もある。ヒノキ柾目材。157次 SD3715DL34暗灰色粘土出土。13はB 1形式の完形品で全長23.7cm。左右の肩部に2カ所ずつの切りかけをもつ。ヒノキ板目材。157次補 SD3715DB34上層黒色粘土出土。14、15はD形式。14は破損が著しく、全長不明。157次 SD3715DF33暗灰砂質粘土出土。15は27.1cmと全長のわかる資料である。切りかけを欠失し、片面に6本の墨線が認められる。157次 SD3715DL33暗灰砂質粘土出土。ともにヒノキ柾目材。

正面全身人形 (16~18) 3点出土している。16は欠損しているが腕部の表現をもち、怒り肩で、『集成』A II型式に当たる。ヒノキ柾目材。157次 SD3715DH34暗灰色粘土出土。17は頭部を欠く。型式は不明だが、脚部の表現から人形と判断した。側縁部が焦げている。ヒノキ板目材。157次 SD3715DH34暗灰色粘土出土。18も16と同様、『集成』A II a型式。脚部と腕部を欠くが、全長は29.8cmと判別できる。頭部に被りものを表現する。157次補 SD3715DB34上層木柾下出土。これらの人形には墨書は認められない。

3-1-4-1-5 部材 (図版137)

部材 (19) 19は全長25.9cmの棒状品で、両端の下側に段差加工を施す。上側の角を面取りする。何に用いられた部材かは特定できない。157次補 SD3715DB34石敷間出土。

3-1-4-1-6 工具 (図版137)

鑿柄 (20) 20はアカガシ亜属の板目材に小口から穴をあけたもので、形状から鑿柄と判断した。全長は13.3cm、柄元付近の径は2.9cmをはかる。断面形は隅丸方形に仕上げる。157次 SD3715DH34暗灰砂質粘土出土。

木釘 (23) 23は全長8.1cmの棒状品で、先端を鋭く尖らせる。ヒノキ板目材。木釘と判断したが、留針の可能性もある。157次 SD3715DI33暗灰砂質粘土出土。

3-1-4-1-7 雑具 (図版137)

火鑽板 (21) 全長11.5cmの長方形板材の片側に6カ所の火鑽臼をもつ。全体に炭化しており、

樹種や木取りは不明。157次 SD3715DH34暗灰砂質粘土出土。

木筒形 (22) ヒノキの柁目板で、一方の小口寄りに2ヵ所の切り欠きをもつ。両面を丁寧削る。木筒の未使用品か。157次 SD3715DG34暗灰砂質粘土出土。

加工棒 (24~27) SD3715からは加工棒が多量に出土しているが、形の整ったものを4点図示した。24はスギ板目材。全長19.2cm。157次 SD3715DK34暗灰砂質粘土出土。25はヒノキ板目材。全長20.5cm。157次補 SD3715DB35上層黒色砂出土。26はスギ柁目材。全長25.0cm。一方の小口を斜めに薄く削る。157次補 SD3715DC34石敷間出土。27はスギ柁目材。全長26.2cm。両端の加工は粗い。157次 SD3715DI34褐色砂出土。24~26は小口の加工が平滑で、^{ちゅうぎ}籬木の可能性が高い。

加工板 (28) 28は大型の加工板。一方を幅広に作り、両側面を平滑に面取りする。大型の折敷を転用した可能性もある。スギ板目材。157次 SD3715DD34暗灰色粘土出土。

轆轤残材 (29) 29は轆轤の残材。最大径10.5cm、高さ4.1cm。裏面には粗い鑿の加工痕と3ヵ所の轆轤爪痕を留める。側面にはヤリガンナによると思われる回転削り痕跡、表面には轆轤目を残す。ヤマグワ芯持材だが、通有の轆轤製品と同様に芯をややずらして使用する。157次補 SD3715上層黒色粘質土出土。

3-1-4-2 種子・木炭

種子は157次補 SD3715の石敷間から胡桃の種が2個、桃の種が5個出土している。また、206次 SK13774から、羽口や鉄滓とともに木炭が出土している。

3-1-4-3 銭貨 (図版138)

調査区全体から8点の銭貨が出土した。皇朝銭が4点、寛永通寶が1点、中国銭が3点である。皇朝銭はいずれも157次調査区のSD3715から出土した。皇朝銭の分類は『平城宮発掘調査報告VI』(pp. 97~103)に従う。

和同開珎 (1~2) 2点出土。いずれも和同開珎Aで、「開」の門構えの上端が開く「新和同」

表14 銭貨計測表

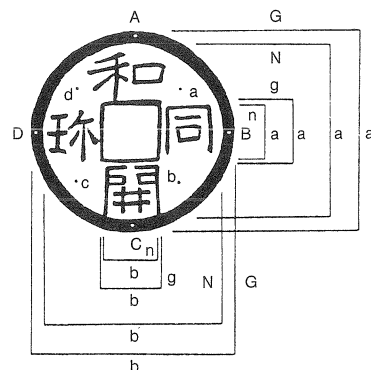
番号	銭種	次数	小地区	遺構	層位	外縁外径 平均 G	外縁内径 平均 N	内郭外径 平均 g	内郭内径 平均 n	外縁厚 平均 T	文字面厚 平均 t	重量 (g)
1	和同開珎	157	DG34	SD3715	灰色粗砂	24.7	21.2	7.8	6.9	1.0	0.6	2.0
5	寛永通寶	224	IC43	北排水溝		25.7	21.1	7.4	5.6	1.8	1.2	2.6
6	祥符元寶	205	CQ18		灰褐色土	24.9	18.8	7.1	5.9	1.3	0.9	2.8
7	元豊通寶	205	CT17		パラス面	24.5	19.2	8.3	6.7	1.6	1.1	3.5
8	慶元通寶	216	HE47		床土	24.4	19.7	8.1	6.7	1.6	1.0	2.9

銭貨の各部測点については右のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga+Gb}{2}, \text{ 外縁内径 } N = \frac{Na+Nb}{2},$$

$$\text{内郭外径 } g = \frac{ga+gb}{2}, \text{ 内郭内径 } n = \frac{na+nb}{2},$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A+B+C+D}{4}, \text{ 文字面厚 } t = \frac{a+b+c+d}{4}$$



に属する。1は鑄上りが悪く、「開」の一部に湯がまわっていない。157次 SD3715DG34灰色粗砂出土。2は左上半を欠く。1に比べて鑄上り、銅質とも良い。157次 SD3715DI35黒色粘質土出土。

神功開寶（3～4） 2点出土。いずれも破片で型式を確定できないが、3は「寶」の「貝」が小さいので、神功開寶DまたはEのどちらかであろう。3は鑄上りが悪く、「神」の一部に湯がまわっていない。157次 SD3715DE34灰色粗砂出土。4は157次 SD3715DI33暗灰砂質土出土。

寛永通寶（5） 1点出土。銹化が著しく、型式は不明。224次 IC43北排水溝出土。

中国銭（6～8） 3点出土。北宋銭が2点、南宋銭が1点である。6は祥符元寶。北宋真宗の大中祥符元年（1009）初鑄。205次 CQ18灰褐土出土。7は行書の元豊通寶。北宋神宗の元豊元年（1078）初鑄。205次 CT17ガラス面出土。8は慶元通寶。南宋寧宗の慶元元年（1195）初鑄。背文は不鮮明だが、「元」か。216次 HE47床土出土。

3-1-4-4 金属製品（図版139）

調査区からは47点の金属製品が出土した。そのうち157次調査区 SD3715から10点と、比較的まとまった数が出土している。それらの中には銅の切り屑や銅板などが含まれ、付近または上流で金属器が製作されたと推定できる。SD3715以外では、224次調査区で12点が出土しているが、特定の地区に集中する傾向は見いだせない。素材をみると、鉄製品が37点、銅製品が10点ある。

鉄製品には未処理で銹化が進んだものもある。本書では、図化できたもののうち器種や全体像のわかる17点について詳述する。

3-1-4-4-1 鉄製品（1～14）

鑿（1） 完形品で遺存状態も良好。全長13.6cm、莖長6.9cm、刃部幅1.0cm。身と莖の境界は突起状に作り出す。莖には柄の木質が付着する。刃部には使用による磨滅が認められる。157次 SD3715DH34暗灰砂質粘土出土。

鑿（2） 先端を細く加工した棒状品。先端が銹化のためにふくれているが、全体の薄い作りから、釘ではなく鑿と判断した。頭部を欠き、残存長6.7cm、幅0.7cm、厚さ0.4cm。175次灰褐土出土。

釘（3～13） すべて基部の断面形が四角い角釘だが、頭部の形から折頭釘、円頭釘、無頭釘の3種に分けられる。3は折頭釘。頭部は一方向に曲げて作った長方形。全長9.2cm。206次 HK62灰褐土出土。4は折頭釘。頭部は一方向に曲げて作った台形。先端を欠き、残存長6.5cm。206次 HM65灰褐土出土。5は折頭釘。頭部は長方形で、やや斜めに傾く。残存長7.6cm。205次東排水溝出土。6は折頭釘。頭部の折り曲げが不十分で、基部と鈍角をなす。残存長3.9cm。224次 HP38黄褐土出土。7は折頭釘。頭部は扁平に広がる。残存長3.8cm。8は円頭釘。頭部最大径2.2cm、残存長6.6cm。身部の銹化が著しい。224次 IB34黄褐土出土。9は円頭釘。頭部最大径1.5cm、全長5.9cm。224次 IC45灰褐土出土。10は無頭釘。基部は幅1.1cm、厚さ0.3cmと扁平な形状を呈する。残存長5.6cm。175次 AE16床土出土。11は無頭釘。基部は丸みを帯びる。残存長5.2cm。224次 IA33黄褐土出土。12、13は釘の破片。頭部を欠失するため型式不明。12は残存長7.7

cm。224次 HP31SX14894出土。13は残存長4.5cm。157次 SD3715DJ35暗灰色粘土出土。

鉄釜 (14) 羽釜の鏝状の部分が出土している。口縁部は残存していないが、屈曲の度合いからかなりの大型品と推定される。206次 HH53灰褐土出土。

3-1-4-4-2 銅製品 (15~17)

鋳 (15) 円頭の鋳。頭部の最大径1.0cm。脚部は断面正方形で頭部のやや偏った位置に付き、折れ曲がっている。157次 DK35瓦溜出土。

銅板 (16・17) 16は銅板の一端を棒状に丸めたもの。反対の端部は鑿によって切断された痕跡を残す。全長6.8cm、最大幅0.9cm、厚さ0.1cm。157次 SD3715DG34灰色粗砂出土。17は短冊状の銅板。両端を鑿で切断する。全長10.3cm、幅1.3cm、厚さ0.1cm。金属製人形の未製品の可能性もある。157次 SD3715DG34灰色粗砂出土。これらの他に SD3715からは小さな銅切屑も出土しており、付近に工房があったと推測される。

3-1-4-5 鍛冶・鑄造関係遺物 (図版140)

調査区全体からは304点の鍛冶・鑄造関係遺物が出土している。内訳は、鞆の羽口38点、埴塙8点、炉壁4点、鋳滓254点である。出土地点をみると、157次 SD3715から羽口19点、埴塙7点、銅滓143点、鉄滓9点が集中的に出土し、付近で銅器が製作されたと考えられる。次いで206次 SK13774から羽口7点、鉄滓235点がまとまって出土している。SK13774からは木炭も出土しており、鉄器製作に伴う廃棄土坑であろう。さらに、214次 SK14180からも羽口2点と鉄滓5点が出土しており、廃棄土坑の可能性はある。羽口や埴塙は大半が細片であるが、本書では残りの良い資料を中心に10点を図示した。

鞆羽口 (1~9) 1は先端部の破片。推定外径5.5cm、内径2.5、器壁の厚さ1.5~1.8cm。全体に融解してガラス化し、緑色に変色する。内面の一部に緑錆が付着する。157次補 DC34SD3715廊板外敷石下出土。2は先端部の破片。径の半分程が残存し、中心付近で推定外形5.3cm、推定内径2.2cm、器壁の厚さ1.6cm。外面には長軸方向に沿って板状の圧痕が認められる。157次 SD3715DL33暗灰色粘土出土。3は先端部の破片。外径4.9cm、内径2.3cm。1.6cm。外面は融解してガラス化し、緑色と赤色の斑状になる。157次 DD34暗灰砂質粘土出土。4は先端部の破片。断面楕円形を呈し、長外径5.4cm、長内径2.2cm。厚さ1.7~2.1cm。外面の先端から1cm程は融解してガラス化し、赤変する。それ以外の外面は黒褐色を呈する。157次 DG33暗灰色粘土出土。5は基部の破片。外径7.6cm、内径2.1cm。厚さ2.5cm。基部内面は漏斗状に窪む。基部から4.0cmを残し、先端側は黒褐色を呈する。面取りは明瞭ではない。157次 SD3715・DG38灰色粘土出土。6は外径6.5cm、内径2.5cmと推定される破片。外面には板圧痕による面取りがあり、黒褐色を呈する。157次 SD3715DE36灰褐土出土。7は先端部の破片。基部寄りの外径6.8cm、内径2.6cm、厚さ2.2cm。外面は板の圧痕による面取りが明瞭。206次 SK13774出土。8は外径6.5、内径2.7cmと推定される小片。厚さ2.0cm。外面は黒褐色に変色。206次 SK13774出土。9は外径7.0cm、内径3.2cmに復元される小片。厚さ2.0cm。外面の一部が黒褐色を呈する。206次 SK13774出土。**埴塙** (10) 埴塙は7点出土しているが、図化できたものは1点のみである。すべて157次と157次補調査区のSD3715から出土した。10は全体の4分の1程度が残存する。口径11.5cmに復元さ

れる小型品。外面には指ナデによる圧痕が残り、底部付近は黒く変色する。胎土には若干の砂礫を含む。内面には銅が付着し、銅製品の鑄造に使用されたことがわかる。157次 SD3715DJ 35暗灰砂質粘土出土。

炉壁 炉壁は4点出土している。そのうち3点は216次 HI45暗褐色砂質土からの出土である。いずれも径約4～5cm程度の小片で、胎土に径1cm程度の礫を含み、全体に赤変する。

鋳滓 鉄滓が105点、銅滓が149点ある。椀形滓はさわめて少なく、大半は粒状滓である。

3-1-4-6 石製品 (図版121)

調査区からは弥生時代の石器以外に奈良時代の砥石が5点出土している。小片の1点を除き、4点を図示した。石材の鑑定は埋蔵文化財センターの肥塚隆保、大賀克彦による。

砥石 1は棒状の砥石で、石材は流紋岩。上端は折り取ったままの状態、下半は欠損している。3面に明瞭な擦痕が認められる。残存長10.8cm、幅2.8cm、厚さ1.7cm。175次 AC12床土出土。2は長方形の砥石で、石材は流紋岩。下半を欠損する。片面に深さ2mmのV字形の施溝分割用溝をもつ。反対面の中央付近は使用痕が明瞭で、わずかに窪む。全面に擦痕が認められる。残存長7.1cm、幅4.0cm、厚さ1.1cm。175次 BP06瓦溜出土。3は角礫状の砥石で、石材は石英斑岩。4面に明瞭な擦痕が認められる。残存長5.3cm、幅4.0cm、厚さ4.5cm。157次 SD3715DE34上層出土。4は角礫状の大型品で、石材は石英斑岩。3面に使用の痕跡が認められる。残存長8.8cm、幅7.5cm、厚さ6.4cm。157次 SD3715DI34暗灰砂質粘土出土。

1) 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代篇』。
2) 一部に辺材部をとどめているもの。(田中琢編 1990『年輪に歴史を読む』奈良国立文化財研究所 p.94。)

3) 黒崎直1977「齋申考」『古代研究』10。
4) 奈良国立文化財研究所1974『平城宮発掘調査報告VI』。

3-2 弥生時代・古墳時代の遺物

3-2-1 弥生時代の土器

弥生時代の土器は、竪穴住居の覆土および土坑を中心に出土した。とくに最も大きい竪穴住居 SB14860の覆土と住居内土坑からの出土が多い。調査区全域の遺物包含層から、弥生時代から奈良時代にかけての土器が出土しているが、弥生時代の土器はとくに第224次調査区 6 AAY-H、I 区を中心に多い。出土した土器の大半は、前期新段階に位置づけられる。いずれも摩滅が著しく、ハケ目など器表面の観察が困難であるものがほとんどであるが、類例が少ない北和地域の様相をさぐるうえで貴重な資料であると考え、可能なかぎり図化した(図版142)。

601は薄手の甕の口縁部で SB14860覆土出土。約 4 mm 間隔で 8 条のヘラ描き沈線を巡らす。602も 601と同じタイプの甕で、約 4 mm 弱間隔で 8 条のヘラ描き沈線を巡らす。口縁部付近にはハケ目が残る。SB14859の覆土より出土。いずれも器壁が薄く、約 3～5 mm ほどの厚さしかない。

甕

603-605は施文土器。603は細口壺の口縁部、SB14858、SB14859、SB14860付近の包含層より出土した。約 9 mm 間隔に目印となる沈線をヘラ描きした後、幅約 5 mm の突帯を巡らし、斜方向の刻み目を施す。604は広口壺の頸部、SB14860の覆土出土。沈線をヘラ描きした後、その上に約 9 mm 間隔、幅約 6 mm の突帯を巡らす。沈線は一番上の突帯の上端を示す 1 条のみで、一部位置がずれて沈線が見える箇所があることから、突帯を貼る目印の可能性もある。突帯に斜方向の刻み目を施す。605は広口壺の胴部、SB14860覆土より出土。同様に沈線をヘラ描きし、そのうえに約 7 mm 間隔、幅約 4 mm の突帯を巡らす。同じく沈線は一番上の突帯の上端を示す 1 条のみで、下の突帯がはがれている部分に沈線は観察できない。突帯を貼った後、斜方向の刻み目を施す。

細口壺

606は広口壺の口縁部、SB14858覆土出土。壺の内面に平行する 2 条の突帯を巡らす。607も同じタイプの広口壺の口縁部で、SB14859の覆土より出土した。外面には、ハケ目が残る。608は甕蓋で、調査区南端の包含層より出土。609は広口壺の口縁部で、SB14860の覆土出土。器表面は摩滅が著しいが、約 3～4 mm 幅の沈線の痕跡が残る。610も広口壺の口縁、SK14940より出土。同じく器表面は摩滅が著しいが、ハケ目が確認できる。611は広口壺の長く伸びる頸部で、SB14858より出土。約 3 mm 幅のヘラ描きの沈線が 2 条、5 mm 間隔で巡る。612は甕の上半で、SB14860内の土坑 SK14862、SK14865から出土した器表面は摩滅しているが、かろうじてハケ目が観察できる。頸部には約 1 mm 幅のヘラ描き沈線が、約 4.5 mm 間隔で 6 条めぐり、赤みを帯びた橙褐色を呈し、他の個体に比べると胴部の張りが強い。

広口壺

また、底部のみ残存する資料も多い。613は甕または壺の底部。SB14860の覆土出土。残存率はよいが、器表面の摩滅は著しく、ハケ目が若干、観察できる。614は甕の底部あるいは甕蓋の可能性もある。SK14947出土。615は甕の底部で、底部中央に焼成後に内外面からの回転穿孔による孔がある。内面に粘土紐の接合痕が残る。SB14860覆土出土。

甕または壺

616は壺の体部下半で、SB14866の覆土出土。器表面は摩滅しているが、部分的にハケ目が残

埋納された壺

る。胴部の最大径をはかる部分で粘土紐の接合が観察でき、指おさえ後、ハケで調整したことがわかる。617は甕または壺の底部で、SK14868出土。全体的にハケ目が観察できる。618も甕または壺の底部で、SX14891の出土。620の甕は器壁が薄く、砂を多く含む胎土。SB14860の覆土より出土。肩部より上を欠き、上半は歪みが大きい。底部付近にのみハケ目が残る。619は甕で底部を欠く。調査区西よりの堅穴住居群の中央付近のSK14868から出土した。頸部に約1mmのヘラ描き沈線を約9mm間隔でめぐらす。摩滅のため器表面の観察は困難なものの、部分的にハケ目が観察できる。沈線の数などから、やや古い様相をもつと言えよう。621はSB14866の西側に埋納されていた壺。胴部は球形に丸く張り出す。残存状況は比較的良好で、外面全体にハケ目が観察できる。肩部には約1mm強幅ヘラ描き沈線が約4mm感覚で6条めぐる。

3-2-2 古墳時代の土器

3-2-2-1 SE13055出土土器

第175次調査区で検出された井戸SE13055からは、古墳時代中期の土器群が出土した。検出状況および土器の出土状況からみて、井戸はこの時期に埋め立てられたとみられ、下層はとくに一括性が高い。上層はやや時期のくだる須恵器片が混じる点を除けば、下層と同じ様相である。二重口縁の壺類、2種類の高杯、甌などの特徴や須恵器を伴うことなどの諸要素が、『平城宮発掘調査報告X』で報告した平城宮東朝集殿下層の自然流路SD6030上層と類似する¹⁾。

土師器
小型の壺

土師器 小型壺 (図版143 641-646) 641-646は小型の壺。法量に斉一性があり、球形の体部に、やや短めで緩やかに開く口縁部をもつ。口縁部は粘土紐を積み足し、接合面を強くナデるため、二段に肥厚し、各段は丸みを帯びる。体部は基本的に指で押さえながら形づくり、内面にヘラ削りを加える。外面はハケ目調整を施し、焼成時の黒斑が残る。色調は赤橙色を呈するが、642のみ淡褐色を呈し、焼成が良好である。642の胴部中央には、焼成後に穿たれた直径5mmの孔がある。SD6030上層にも底部に穿孔した類例(図97-5)がある。641・642・644・645は下層埋土の出土、643・644は上層埋土の出土。

大型の壺

大型壺 (図版143 654・655) 654は球形の胴部に、ゆるやかな二重口縁をもつ。内面は指おさえの後、ヘラ削りを施す。外面は全面をハケ目で調整し、黒斑が残る。655は球形にちかい胴部に、やや外反ぎみの口縁部をもつ。器表面の摩滅が著しいが、内外面にハケ目が観察できる。とくに内面はハケ目をナデ消すようにもみえる。654は赤褐色、655は淡褐色を呈する。654は上層と下層出土の破片が接合した。655は下層埋土出土。

高杯

高杯 (図版143 648-653) 杯部が残るものは少ないが、大小2種類に分類できる。648・649は小型の高杯。648は杯部内外面にハケ目が残る。脚部は内面には粘土を絞った跡が残り、外面を削って整形する。杯部外面下方に、指おさえの痕跡がのこり、この痕跡が杯部外面のハケ目を切ることから、杯部と脚部を個別に作った後で、粘土を足しながら接合したことがわかる。指でおさえて接合した後、接合部分に更にハケ目調整を施す。649は脚部のみ残存する。外面をヘラ削りで調整し、内面に脚柱部を絞りこんだ痕跡が残る。649は淡褐色を呈するのに対し、648は赤褐色で、胎土に赤褐色の粒子が目立つ。650・651は杯部のみ残存。651は外面にハケ目が観察できる。650は薄く外反する口縁部をもち、杯底部との接合面で剥離している。内外面をヨコ

ナデした後、粗い放射状のミガキを施す。651が赤みを帯びた淡褐色であるのに対し、650は赤橙色を呈する。652・653は、大型の高杯の脚部。頂部に直径約5mmの孔をもつ。652は外面を削り、内面の下方をハケ目で調整する。653は脚頂部に杯部と接合しやすいように刻んだと思われる工具の跡が残る。器表面の残りがわるく、調整は観察できない。648・649・652・653は埋土下層、650・651は埋土上層の出土。

甑 (図版143 647) 甑の底部。灰褐色を呈する。摩滅のため、器表面の調整は観察できない。残存部分の形状から、おそらく中央1か所に円形、周囲5か所に楕円形の蒸気孔が穿かれていたと思われる。やはりSD6030上層に類例(図97-6)がある。上層埋土より出土。

須恵器 甕 下層からは須恵器甕の胴部小片が1点出土した。外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具が残る。

SD6030上層の土器群と比較すると、SE13055の特殊性が浮き上がる。SE13055から出土した土器は、SD6030上層に比べ、斉一性が高く、器種が少ない点や、各個体の残存率が高いといった特徴が指摘できる。井戸であるSE13055に土器を投棄する行為は、自然流路であるSD6030の場合と、違う意味を持っていた可能性がある。

甑

須恵器

SE13055の
特殊性

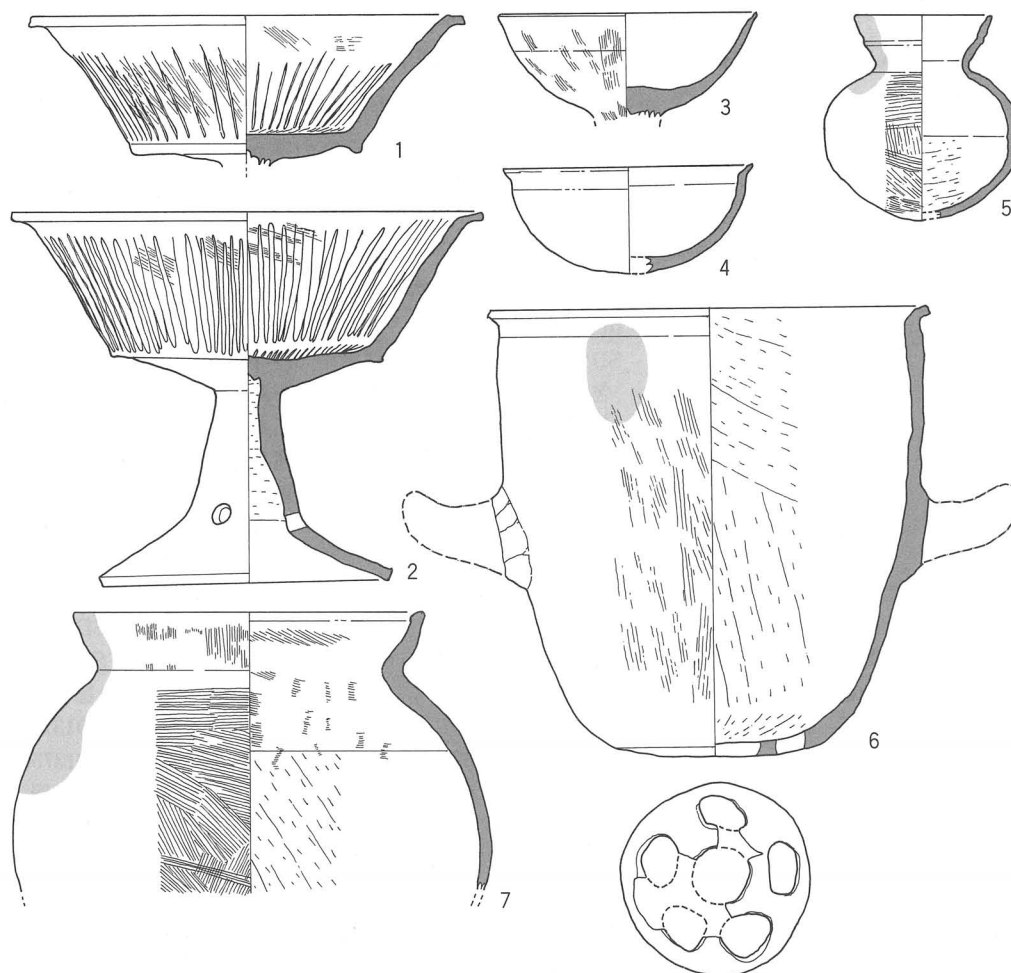


図97 SD6030 上層出土の土師器

3-2-2-2 その他の古墳時代の土器

兵部省地区全域の包含層や奈良時代の遺構などから、古墳時代の土師器、須恵器が多数出土している。とくに兵部省の西側、第206次調査区を中心に、第214、175次調査区からの出土が多く、古墳時代の集落が付近に存在した可能性がある。

ここでは包含層や奈良時代の遺構から出土したものを扱う。古墳時代である可能性が高い遺構の資料もあるが、いずれも出土点数が少ないため、この項で報告する。なお、各資料の出土地点については、表15を参照されたい。

土 師 器 **土師器** (図版144 656-667) 656は細長い胴部に短い口縁がつく壺。外面全体と内面の一部に細かいハケ目調整を施す。657、658は断割調査で下層の包含層より出土した椀。口縁部のみヨコナデし、底部は指頭圧痕を残す。SD6030上層 (図97-4 など) や西隆寺下層²⁾に類例がある。659は口縁部が短く屈曲して立ち上がる二重口縁の壺。660-667は高杯。660はSD6030上層や上述のSE13055にも多くみられる大型の高杯。器表面の残りが悪く、調整が観察できない。661-664・667は脚部内部に粘土を絞った痕跡を残す。664、665は脚部内面にヘラ削りが施され、器壁が薄いタイプ。666は脚部に直径約6mmの穿孔がある。

須 恵 器 **須恵器** (図版144 668-694) 5世紀中頃から6世紀前半のものを中心に出土している。681-689は須恵器杯H蓋。口径11-13cmのものが多い。668-679は杯H。672は暗灰色の粗い胎土で、底部外面は鋭く轆轤ケズリを施す。676は底部内面に同心円の当て具痕をもつもの。679は口径12.6cm、器高3.5cm、やや新しい様相を呈し、6世紀末頃のもの。底部に焼成前の篋書きがある。691-694は高杯。690は杯部しか残っていないが、やはり6世紀末頃のもの。692は逆三角形の透かしを3カ所、693は円形の小型の透かしをもつ。694は台形の透かしを6カ所にもつもので、668、669とともに出土した。693、694は脚部外面にカキ目を施す。680は肩部しか残存していないが、カキ目が施された小型の短頸壺。

表15 古墳時代土器の出土地点

報告番号	器 種	調査回数	出土遺構	報告番号	器 種	調査回数	出土遺構
656	土師器 壺	第206次	SD13761	676	須恵器 杯身	第214次	SX14176
657	土師器 鉢	第206次	包含層	677	須恵器 杯身	第214次	SX14176
658	土師器 鉢	第206次	包含層	678	須恵器 杯身	第206次	包含層
659	土師器 壺	第206次	包含層	679	須恵器 杯身	第206次	SD13754
660	土師器 高杯	第206次	包含層	680	須恵器 壺	第175次	包含層
661	土師器 高杯	第175次	包含層	681	須恵器 杯蓋	第206次	SD13779
662	土師器 高杯	第206次	包含層	682	須恵器 杯蓋	第206次	包含層
663	土師器 高杯	第175次	包含層	683	須恵器 杯蓋	第206次	SD13779
664	土師器 高杯	第185次	包含層	684	須恵器 杯蓋	第206次	SD13779
665	土師器 高杯	第206次	包含層	685	須恵器 杯蓋	第206次	SD13779
666	土師器 高杯	第206次	包含層	686	須恵器 杯蓋	第206次	包含層
667	土師器 高杯	第206次	包含層	687	須恵器 杯蓋	第206次	SD13779
668	須恵器 杯身	第216次	包含層	688	須恵器 杯蓋	第206次	SB13750
669	須恵器 杯身	第206次	SD13779	689	須恵器 杯身	第206次	包含層
670	須恵器 杯身	第206次	包含層	690	須恵器 高杯	第206次	包含層
671	須恵器 杯身	第206次	SA13737	691	須恵器 高杯	第206次	包含層
672	須恵器 杯身	第206次	SA13737	692	須恵器 高杯	第206次	SD13725
673	須恵器 杯身	第216次	包含層	693	須恵器 高杯	第206次	包含層
674	須恵器 杯身	第206次	SD13754	694	須恵器 高杯	第206次	SA13737
675	須恵器 杯身	第175次	包含層				

3-2-3 弥生時代の石器

調査区全体からは弥生時代の石器が1,568点出土した。そのうち1,456点が石器製作の際に生じた剥片である。石器の出土量を調査次数別にみると、206次調査区で2点、214次調査区で18点、216次調査区で17点、224次調査区で1,531点が出土しており、224次調査区に集中していることがわかる。さらに、224次調査区内における石器の分布をみると、調査区東部と中央部の竪穴住居跡付近に集中しており、その周辺で石器が製作されていたことがわかる。とくに、調査区東部では4棟ある住居跡に囲まれた範囲で石器の出土点数が多い。

つぎに、剥片と石核を除く石器の構成をみると、農具が11点（すべて磨製石庖丁）、工具が18点（スクレイパー7点、石錐3点、砥石3点、太形蛤刃石斧2点、石匙1点、ナイフ形石器1点、磨製石鑿1点）、武器が79点（打製石鏃71点、打製尖頭器＝打製石剣もしくは打製石槍7点、磨製石剣1点）から構成される。

本書では、残存状態のよい資料を中心に70点について報告する。まず遺構に伴う石器について、つぎに遺物包含層から出土した石器について報告する。なお、本書でサヌカイトと記述したものは特に断りのない場合、二上山産サヌカイトを指す。石材の鑑定は埋蔵文化財センターの森本晋による。

3-2-3-1 遺構に伴う石器

SB14860出土石器（図版145） 竪穴住居 SB14860からは5点の石器が出土した。1はサヌカイト製打製尖頭器。全長10.0cm、最大幅2.8cm、厚さ2.0cm、重さ60.8gを測る。基部付近でわずかな関をもち、基部の側縁は細かな調整による刃潰しを行う。すなわち、欄亘田分類のI-2'-b類に当たる³⁾。2は砥石。石材は結晶片岩。4面に使用痕が認められる。長さ7.7cm、幅6.4cm、厚さ4.3cm、重さ331.3g。側面には2条の溝が認められ、顕著な使用痕がある。3～5は打製石鏃。いずれもサヌカイト製。3、5は平基式⁴⁾、4は凹基式。なお、石鏃の計測値等は遺物包含層出土のものとまとめて表17に示す。

その他の遺構出土石器（図版145） SB14860以外の遺構からはまとまった石器の出土はなく、いずれも単独で出土した。6は緑色片岩製石庖丁の破片。全体に磨滅が著しく、刃部との境界線も不明瞭。SK14880出土。7は緑色片岩製石庖丁の破片。SK14877出土。8は大和盆地南部に特徴的な耳成山産流紋岩製石包丁の破片⁵⁾。断面形はレンズ形で、ゆるやかに刃部へと移行する。刃部の一部に使用による磨滅が認められる。側縁上部は平坦に研磨されている。SK14868出土。なお、石庖丁の計測値等は遺物包含層出土のものとあわせて表16に示した。9は石錐。金山産サヌカイト製。全体に磨滅が著しく、剥離の稜線も不明瞭になっている。全長3.5cm、幅1.3cm、厚さ4mm、重さ1.1g。SX14939出土。10～14はサヌカイト製打製石鏃。10は凸基無茎式の小型品。SX14974出土。11は基部を破損し、型式は不明。SK14872出土。12は凸基無茎式。SX14974出土。13は凸基無茎式。SX14889出土。14は凸基有茎式。全体の半分程度を茎が占める。SB14858出土。

3-2-3-2 遺物包含層出土の石器

つぎに、遺物包含層である黄褐色粘土および暗褐色砂質土から出土した石器について報告す

る。明らかに中世以降の耕作溝から出土した石器も包含層出土遺物に含めて報告する。

石庖丁 (図版146) 総数11点のうち、遺物包含層から8点の石庖丁が出土した。すべて破片である。遺構出土資料もあわせて石材をみると、緑色片岩が9点、スレートが1点、流紋岩が1点である。ここでは2点の細片を除く6点について報告する。なお、部分名称と計測位置は森本晋⁶⁾の研究を参考にした。

15は緑色片岩製の小型品。背部は湾曲し、直線刃。表面の剥離が著しく、研磨の方向は不明。紐ずれは明瞭ではない。16は緑色片岩製。背部は直線的で、明瞭な紐ずれが認められる。刃部の形態は不明。刃表には穿孔途中で放棄されたくぼみが1カ所ある。断面形はレンズ状を呈し、よく使い込まれている。17はスレート製。背部、刃部ともに直線的で、背部にはわずかに紐ずれが認められる。背部と刃部の対称位置に若干の粗いすじが認められる。18は緑色片岩製。背部は湾曲し、直線刃。2組の紐孔があげられている。断面形はレンズ状を呈し、よく使い込まれている。19は緑色片岩製。背部は湾曲し、直線刃。背部や紐孔には紐ずれが認められない。20は緑色片岩製。背部は湾曲し、刃部の形態は不明。

石匙 (図版147) 21は石匙。サヌカイト製。全長7.0cm、幅4.1cm、厚さ9.9mm、重さ32.2g。刃部は曲線的で、つまみの作り出しはやや不明瞭。刃部は磨滅によってやや鈍くなる。つまみの先端面に自然面を残す。216次 HB39出土層位不明。

スクレイパー (図版147) 本書では、素材剥片の側縁に調整剥離を行って刃部を形成する利器をスクレイパーと呼称する。22のように縦長でくさび形を呈するもの、23~27のように台形もしくは木の葉形を呈するものがあり、後者はさらに大きさによって細別が可能である。石材はすべてサヌカイトである。

表16 石庖丁計測表

石材	長さ	幅	厚さ	孔間	孔1~背	孔2~背	孔1外径	孔1内径	刃角	重さ	次数	出土地点	層位	図番号
緑色片岩	(5.90)	(3.83)	0.58	-	1.52	-	0.83	0.54	55	13.9	224	SK14880		6
緑色片岩	(4.66)	(4.68)	0.67	-	1.35	-	0.79	0.57	50	23.6	224	SK14877		7
流紋岩	(8.20)	5.85	1.03	1.94	1.62	1.73	0.91	0.45	35	63.6	224	SK14868		8
緑色片岩	(6.86)	3.36	0.70	1.46	0.97	-	0.82	0.53	85	24.8	206	HB55	耕作溝	15
緑色片岩	(7.97)	3.70	0.79	1.94	1.40	1.63	0.95	0.63	50	37.4	224	HQ30	暗褐色砂質土	16
スレート	(8.72)	4.46	0.76	2.17	2.20	2.41	0.96	0.54	55	48.3	216	GO31	黄褐色粘土	17
緑色片岩	(9.15)	3.66	0.81	1.78	1.04	0.93	0.84	0.57	45	34.4	224	IC29	暗褐色砂質土	18
				1.73	1.03	1.07	0.70	0.47						
緑色片岩	(9.21)	5.44	0.68	-	1.34	-	0.93	0.49	45	51.6	224	HQ31	暗褐色砂質土	19
緑色片岩	(9.36)	(4.00)	0.84	1.45	1.69	1.51	0.85	0.64	50	43.3	224	IC31	暗褐色砂質土	20
緑色片岩	(6.36)	(5.10)	0.57	-	1.14	-	0.90	0.58	-	22.1	224	HQ31	耕作溝	
緑色片岩	(6.90)	(4.54)	0.50	-	-	-	-	-	-	31.7	224	SB14866		

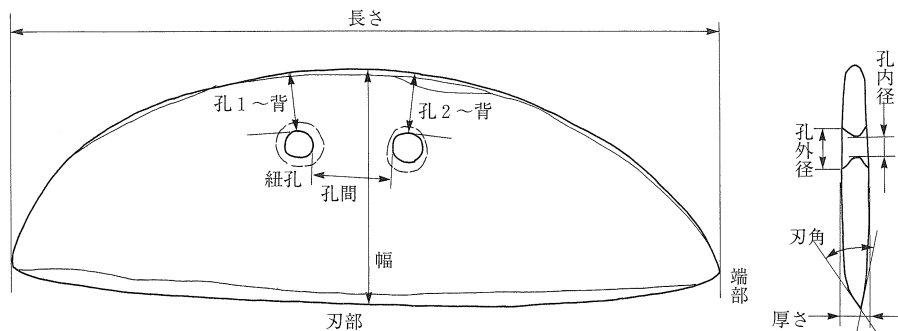


図98 石庖丁各部の名称と計測部位

22は台形を呈する剥片の短辺に、両面から調整剥離を行う。全長5.1cm、幅3.9cm、厚さ1.15cm、重さ23.0g。224次 HS40黄褐色土出土。23は三角形の剥片の長辺に両面から調整剥離を行う。全長5.2cm、幅3.1cm、厚さ9.1mm、重さ10.1g。224次 HQ31耕作溝出土。24は台形のスクレイパー。両肩部分にも調整剥離を行って形を整える。刃部は磨滅によってやや鈍くなる。全長4.5cm、幅3.0cm、厚さ7.0mm、重さ11.6g。224次 HN29暗褐色砂質土出土。25は大型の木の葉形スクレイパー。刃部は弧を描き、肩部を作り出す。全長8.0cm、幅4.8cm、厚さ1.24cm、重さ54.4gで、重量感がある。224次 IB42黄褐色土出土。26も大型の木の葉形スクレイパー。刃部は弧を描く。片面は自然面を大きく残している。全長8.2cm、幅5.0cm、厚さ1.08cm、重さ44.8g。224次 IB48黄褐色土出土。27は大型の台形スクレイパー。刃部は直線的。全長8.9cm、幅5.3cm、厚さ1.45cm、重さ69.1gで、重量感がある。224次 HR46暗褐色砂質土出土。

大形蛤刃石斧 (図版148) 2点が出土した。うち1点は玢岩製の小片。28は基部の破片で、玢岩製。全面に丁寧な研磨を行っている。残存長10.0cm、破断面での長径6.7cm、短径4.5cm、重さ505.0g。206次 HJ58灰褐色土出土。

磨製石鑿 (図版148) 1点出土している。29はスレート製。基部の一部に自然面を残し、その他の面は縦および斜め方向の研磨を行って形状を整える。わずかに刃こぼれが生じている。全長5.5cm、最大幅1.1cm、最大厚1.02cm、刃部幅8.4mm、基部幅5.3mm、基部厚5.2mm、重さ12.4g。224次 HP29暗褐色砂質土出土。

石錐 (図版148) 3点のうち、遺物包含層から2点が出土している。1点を図示した。30はサヌカイト製。刃部はやや湾曲する。使用による磨滅は不明瞭。全長4.0cm、刃部長2.0cm、基部幅1.8cm、基部厚6.3mm、重さ3.2g。224次 HS31暗褐色砂質土出土。

磨製石剣 (図版148) 破片が1点出土した。31はスレート製で、剣身部分⁷⁾の破片。断面形は菱形を呈し、研磨方法は寺前直人による分類のA技法。残存長7.4cm、幅2.8cm、重さ16.4g。216次 GP41暗褐色砂質土出土。

打製尖頭器 (図版148) すでに報告したSB14860出土例以外に、包含層から7点の打製尖頭器が出土した。完形品は1点のみで、身部の破片が2点、基部の破片が3点ある。図示していないのは基部の小片である。石材はすべてサヌカイト。

32は完形品。全長7.8cm、幅2.8cm、厚さ1.3cm、重さ28.9gを測り、緩やかな関をもつ。すなわち、瀬田分類Ⅰ-2'-a類に相当する。両側縁から浅い細部調整を行い、断面形は扁平な六角形を呈する。基部の刃潰しは行われていない。224次 HP29暗褐色砂質土出土。33は身部の破片で、切先も欠けている。両側縁からの調整は深く、断面形は菱形を呈する。全体に若干の反りをもつ。残存長5.3cm、幅2.3cm、厚さ1.03cm、重さ13.5g。34は身部の破片。残存長8.9cm、幅4.7cm、厚さ2.1cm、重さ76.0gを測る大型品。片面は調整が深く、鑄が通るのに対し、反対面は調整が浅く、主剥離面を留めている。224次 HQ29耕作溝出土。35は基部の破片。断面形はレンズ状を呈し、片面、側縁には磨滅が認められる。残存長4.3cm、幅2.5cm、厚さ8.0mm、重さ10.3g。224次 IB49黄褐色土出土。36は基部の破片。両面とも調整は浅く、断面形は扁平な六角形を呈する。両側縁は磨滅し、刃潰しが行われたと考えられる。残存長5.7cm、幅2.7cm、厚さ1.3cm、重さ26.3g。

石鏃 (図版149) 石鏃は破片も含めて71点出土し、そのうち30点を図示した。佐原による分類を

踏襲し、凹基式、平基式、凸基無茎式、凸基有茎式に分類するが、さらに凹基式と平基式は細分が可能である。凹基式は全長が短く幅広のものと、細長く肩が張るものに分けられる。前者を凹基式 A 類、後者を凹基式 B 類に細分する。平基式は全長が2.5cm以下の小型品と2.7cmを超える大型品に分けられる。前者を平基式 A 類、後者を平基式 B 類に細分する。

型式ごとの出土量をみると、凹基式 A 類が11点、凹基式 B 類が13点、平基式 A 類が7点、平基式 B 類が8点、凸基無茎式が18点、凸基有茎式が7点であり、凸基無茎式がもっとも多い。しかし、調査地点による偏りはなく、様々な地点から多様な型式の石鏃が出土している。石材をみると、大半が二上山産サヌカイトであるが、緑色片岩が1点、金山産サヌカイトが1点含まれる。

それでは、型式ごとに詳述する。37～41は凹基式 A 類。各辺から浅い調整剥離を行い、整美な形態をもつものが多い。40は緑色片岩製。41は調整剥離が不十分で主剥離面を大きく残し、基部内面には自然面を残す。42～46は凹基式 B 類。いずれも本調査区から出土した石鏃の中で最も整った形態をもつ。いずれも側縁に丁寧な調整剥離を行い、薄く仕上げられている。47～52は平基式 A 類。47のみ、金山産サヌカイト製で、風化が著しい。49、50、52のように最大幅が身部中央付近にくるものと、48、51のように基部にくるものがある。53～56は平基式 B 類。形や全長の個体差が大きい。56は側縁に丁寧な調整剥離を行い、全体を細長く作る。57～61は凸基無茎式。57～60のように木の葉形を呈するものと、61のように基部へ向けて幅広になるものがある。形や全長の個体差は大きい。59は全体の調整剥離を入念に行う。62～66は凸基有茎式。調整剥離が入念なものは少ない。66は片面に主剥離面を残し、鏃身の断面形は三角形を呈する。

砥石 (図版150) 3点出土したが、2点は小片で1点のみ図示した。67は全長18.9cm、最大幅8.4cm、残存部の厚さ3.9cm、重さ471.6gを測る大型品。石材は結晶片岩。片面と両側面に使用痕が認められる。とくに片面は大きく磨り減っている。224次 HT44黄褐色土出土。

石核 (図版150) 3点出土した。いずれもサヌカイト。68は全長6.3cm、幅4.9cm、厚さ3.3cm、重さ94.8gを測る。3面に自然面を留める。224次 ID33排水溝出土。69は全長5.1cm、幅4.5cm、厚さ2.8cm、重さ49.5gを測る。224次 HR31暗褐色砂質土出土。70は全長10.6cm、幅9.1cm、厚さ3.8cm、重さ276.3gを測る大型品。一部に自然面を残す。224次 HR44耕作溝出土。なお、この3例以外にも石核の可能性のあるサヌカイト片が SB14859から1点出土している。

1) 奈良国立文化財研究所1981『平城宮発掘調査報告 X』。
2) 西隆寺調査委員会1976『西隆寺発掘調査報告』。
3) 禰亘田佳男1986「打製短剣・石槍・石戈」金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究 9』雄山閣。
4) 佐原眞1964「石器」『紫雲出』誌間町文化財保護委員会。

5) 塚田良道1987「耳成山産流紋岩製石庖丁について」森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会。
6) 森本晋2002「石庖丁原論」『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所。
7) 寺前直人1998「弥生時代の武器形石器」『考古学研究 第45巻第2号』考古学研究会。

表17 石鏃計測表

型式	石材	全長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	次数	出土地点	層位	図番号
凹基A	サヌカイト	2.73	2.29	0.37	1.7	224	SB14860		4
凹基A	サヌカイト	1.96	1.62	0.36	1.0	224	HT31	暗褐色砂質土	37
凹基A	サヌカイト	2.06	1.76	0.37	1.2	224	IA34	暗褐色砂質土	38
凹基A	サヌカイト	2.26	1.82	0.38	1.1	224	IA48	暗褐色砂質土	39
凹基A	緑色片岩	2.31	2.69	0.32	1.8	224	東排水溝		40
凹基A	サヌカイト	2.60	1.60	0.45	1.4	224	HR30	耕作溝	41
凹基A	サヌカイト	2.36	(1.51)	0.32	(1.3)	224	HO32	暗褐色砂質土	
凹基A	サヌカイト	(2.15)	1.80	0.41	(1.4)	224	HS31	暗褐色砂質土	
凹基A	サヌカイト	(2.01)	(2.23)	0.41	(1.5)	224	IC45	黄褐色土	
凹基A	サヌカイト	(1.92)	1.89	0.50	(1.6)	224	IC31	黄褐色土	
凹基A	サヌカイト	2.50	1.59	0.30	1.2	214	ID54	灰褐色粘質土	
凹基B	サヌカイト	2.90	1.59	0.36	1.3	224	IC32	暗褐色砂質土	42
凹基B	サヌカイト	2.93	1.41	0.39	1.2	224	HO30	暗褐色砂質土	43
凹基B	サヌカイト	2.98	(1.44)	0.38	(1.3)	224	IC33		44
凹基B	サヌカイト	3.35	1.55	0.41	1.6	224	IC35		45
凹基B	サヌカイト	3.54	1.96	0.44	2.1	224	HD30	黄褐色粘質土	46
凹基B	サヌカイト	2.88	(1.72)	0.45	(1.7)	224	HR49	暗褐色砂質土	
凹基B	サヌカイト	3.09	2.15	0.51	2.7	224	HR29	暗褐色砂質土	
凹基B	サヌカイト	(1.99)	1.59	0.33	(0.9)	224	IC35		
凹基B	サヌカイト	3.29	2.60	0.65	5.1	224	HT47	暗褐色砂質土	
凹基B	サヌカイト	(2.64)	1.67	0.43	(1.9)	224	HO30	暗褐色砂質土	
凹基B	サヌカイト	4.73	(1.90)	0.65	(3.4)	224	HR31		
凹基B	サヌカイト	2.77	1.88	0.52	1.9	224	南排水溝		
凹基B	サヌカイト	(2.65)	1.68	0.88	(3.2)	216	HF47	灰褐色砂質土	
平基A	サヌカイト	2.35	1.54	0.40	1.2	224	SB14860		5
平基A	金山サヌカイト	1.87	1.22	0.37	0.7	224	HS47	暗褐色砂質土	47
平基A	サヌカイト	1.97	1.46	1.25	0.8	224	HS43	暗褐色砂質土	48
平基A	サヌカイト	(2.03)	1.30	0.34	(0.8)	224	HO31	耕作溝	49
平基A	サヌカイト	2.18	1.35	0.25	1.0	224	IA34	黄褐色土	50
平基A	サヌカイト	2.50	1.73	0.40	1.2	224	IA43	耕作溝	51
平基A	サヌカイト	2.30	1.05	0.39	0.8	224	HQ29	耕作溝	52
平基B	サヌカイト	2.70	1.28	0.62	2.4	224	HS28	暗褐色砂質土	
平基B	サヌカイト	2.73	1.43	0.38	1.6	224	HN30		
平基B	サヌカイト	3.01	1.76	0.41	1.8	224	SB14860		3
平基B	サヌカイト	(2.16)	2.00	0.36	(2.1)	224	HS32	暗褐色砂質土	53
平基B	サヌカイト	(2.82)	1.97	0.38	(1.9)	224	HR47	暗褐色砂質土	54
平基B	サヌカイト	2.70	2.05	0.56	3.4	224	IC35	灰褐色砂質土	55
平基B	サヌカイト	(3.36)	1.44	0.44	(1.8)	224	HR29	暗褐色砂質土	56
平基B	サヌカイト	(1.63)	1.74	0.41	(1.2)	224	HP30	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	2.60	1.12	0.34	1.0	224	SX14974		10
凸基無茎	サヌカイト	(3.17)	1.53	0.61	(3.2)	224	SX14974		12
凸基無茎	サヌカイト	3.60	1.21	0.82	3.1	224	SX14889		13
凸基無茎	サヌカイト	1.99	1.11	0.46	0.9	224	HS43	暗褐色砂質土	57
凸基無茎	サヌカイト	2.39	1.15	0.42	1.0	224	HS30	暗褐色砂質土	58
凸基無茎	サヌカイト	3.53	1.37	0.46	2.0	224	HR32	暗褐色砂質土	59
凸基無茎	サヌカイト	4.22	1.47	0.51	3.3	224	HQ30	暗褐色砂質土	60
凸基無茎	サヌカイト	(5.40)	1.78	0.59	(5.0)	214	HT51	茶灰色粘質土	61
凸基無茎	サヌカイト	2.92	1.43	0.33	1.4	224	HP32	耕作溝	
凸基無茎	サヌカイト	2.70	1.19	0.49	1.5	224	HT32	耕作溝	
凸基無茎	サヌカイト	2.44	1.33	0.45	1.1	224	HS44	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	3.73	1.01	0.59	2.2	224	HQ32	耕作溝	
凸基無茎	サヌカイト	2.60	0.96	0.36	0.8	224	HR41	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	3.88	1.67	0.59	2.5	224	HR43	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	3.19	2.24	0.70	4.3	224	IB46	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	3.07	1.34	0.64	2.4	224	HP29	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	(2.32)	0.91	0.53	(1.3)	224	HP30	暗褐色砂質土	
凸基無茎	サヌカイト	2.88	0.75	0.38	0.8	224	IB47	黄褐色土	
凸基有茎	サヌカイト	4.48	1.17	0.42	1.8	224	SB14858		14
凸基有茎	サヌカイト	2.92	1.29	0.37	1.1	224	HP32	耕作溝	62
凸基有茎	サヌカイト	3.61	1.02	0.48	1.5	224	IA48	暗褐色砂質土	63
凸基有茎	サヌカイト	4.14	1.59	0.56	2.9	224	HS42	暗褐色砂質土	64
凸基有茎	サヌカイト	(3.47)	1.18	0.57	(2.5)	224	IC49	灰褐色砂質土	65
凸基有茎	サヌカイト	4.08	0.79	0.68	2.0	224	HR30	耕作溝	66
凸基有茎	サヌカイト	(3.68)	1.63	0.79	(5.6)	224	HQ44	暗灰砂質土	
不明	サヌカイト	(3.28)	(2.09)	0.43	(2.8)	224	SK14872		11
不明	サヌカイト	3.37	(1.92)	0.37	(2.1)	224	HR45	暗褐色砂質土	
不明	サヌカイト	(3.04)	1.03	0.48	(1.3)	224	HO31	耕作溝	
不明	サヌカイト	(2.90)	1.65	0.31	(1.8)	224	IC45	黄褐色土	